日本産魔術師と異世界ギルド

山外大河

注意事項

【小説タイトル】
日本産魔術師と異世界ギルド

【Ｎコード】
Ｎ２１３５ＢＵ

【作者名】
山外大河

【あらすじ】
魔術が当たり前に使われている現代日本で最底辺の魔術師だった高校生、浅野裕也は、とある事が原因で異世界へと飛ばされる。その世界でも地球と同じく魔術が使われていて、しかもその世界では裕也の魔術は最強の魔術へと変化する。
そうして最強の魔術師となった裕也が異世界で生き抜く話。
３／９　ギルド活動編１６話「ギルドランク」にて、やや描写不足な点がありましたので、依頼内容を説明している所を数行加筆しました。

リメイクします。リメイク先のタイトルは、『一から始める異世界ギルド』です。

01　プロローグ

……迂闊だった。

俺、浅野裕也（あさのゆうや）は荒い息を漏らしながら、心中でそう後悔の言葉を漏らす。

状況は最悪だった。

路地裏の壁に背を預けへたり込む俺の体は、少しでも動かしただけで激痛が走り、この状況を作り出した目の前の男から逃げる術が無い事を理解させた。

「おいおい、もう終わりかよ」

目の前の男……クラスメイトの佐原義也（さはらよしや）、は無表情で俺を見降ろしてそう述べる。

この状況を客観的に述べるとすれば、勝者と敗者の図だった。

……何やってんだよ、俺。

俺は自分の行為に酷く呆れてため息を付いた。

別に喧嘩の過程に悔やんでいる訳ではない。そもそもの所、端から勝てるわけが無かったのだから。

呆れるのは……相手が自分とはかけ離れた存在であると分かっていながらも、佐原の目の前に踊り出た自分の馬鹿さ加減にだろう。

佐原が行うカツアゲ現場に出くわして、助けに入って……このザマだ。こうなるのが目に見えているのに、体が勝手に動いちまったんだ。本当に馬鹿らしい。

「ったく、碌に魔術も使えねぇくせに突っかかって来るから、実は魔術以外で俺を追い詰める策でもあんのかと思ったのによ……あんまりガッカリさせんなや」

……魔術。

それが俺と佐原の勝敗を決めた力である。

現代日本において、魔術は誰でも扱える様な技術だが……当たり前に扱えるだけであって、その効力は個人差が大きく現れる。

簡潔に言えば、佐原は高校の中でもトップクラスの実力を持っていて……俺は最底辺。だから俺はアスファルトにへたり込んでいるのだ。

「おいおい、なんか言ったらどうだよ。こっちはターゲット逃してイラついてんだよ。謝罪の言葉とかねーのかよオイ」

「うるせーよ……つーか、なんでカツアゲなんかやってんだ。てめぇ別に金とか困ってねぇだろ」

佐原の家は所謂地主という奴で、つまりは金持ちである。噂では佐原のポケットマネーだけで札束ビンタができるらしい。

「……はぁ、分かってねぇな、お前」

佐原は呆れたようにため息を付く。

「金じゃねぇんだよ目的は。ほら、ＲＰＧとかでモンスター倒すと金落とすだろ？　あんな感じだ」

「……さっぱり分からねぇが？」

「鈍いなぁ。狩りだよ狩り。それこそが魔術の最も有能な使い方だろ？」

実際、日常生活で使い所なんか殆どねーし、と佐原は言う。
確かに、肉体強化や回復魔術などはともかく、現代日本において魔術というのは殆ど使い所の無い技術と言って良いだろう。
例えば発火魔術。あんなもんを家の中で使えば火災報知機が鳴るし、風を起す魔術だって、扇風機代わり位にしか鳴らない。
佐原の言う通り、魔術はきっと戦闘の為にある物であって、佐原の使い方はきっと間違っていないのだろう。
人間としては間違いすぎているが。

「ホント、なんでこの世界はこんなに生きにくいのかねぇ。どうせならファンタジーＲＰＧみたいな世界に生まれて勇者でもやりたかったぜ俺は」
「どちらかというと、魔王の方が向いてんじゃねえのか？」
「ちげえねえな、多分俺は魔王だ」

……自覚してやってんのが質わりいよ。

「……じゃあ俺に楯突いた勇者には、罰を与えねえとなぁ」

佐原の眼の色が変わる。
文字通り……黒から赤への変色。魔術を使用する証拠。
次の瞬間、俺の真下に紫色の魔法陣が展開された。
「コレさあ、家の蔵に封印みたいな扱いで保管されてた魔道書の魔術なんだよ。どうもこの前爺さんが交通事故でポックリ逝った時から封印が解かれたみたいでよぉ。俺が拝借したわけ」
だがなぁ、と佐原は悪意に染まった笑みを浮かべる。

「残念な事に、この術式の効力は全く知らねえんだ。詳しい説明は何書いてあんのかさっぱり分かんなかったし、封印されてた魔道書だから知ってる奴も身近にいねえ。だったらよ……気になんじゃねえか。使ったらどんな事が起こるか」

「……てめぇ」

コイツは……もしかしたら人が死ぬかもしれない様な事を、平気でやろうとしていた。
その目に躊躇いはなく、ただ何時も誰かを虐める時と同じ様な赤目に、好奇心の色を混ぜ合わせた、そんな目つきでターゲットを……俺を睨み、発動させる。

「……ッ」
「おお、なんかすげえなオイ」

魔法陣から眩い光が放たれた。あまりに強烈なその光は、俺の視界を奪い、俺の世界は白に染まり……それと同時に急激な眠気が俺を襲った。
……催眠系の魔術か？
しかしそんな思考もすぐに掻き消され……白くそまった俺の視界は暗転し、俺の意思は薄くなっていった。

◆◇◆◇

目を開いた時に最初に見た物は、佐原でも路地裏の壁でもなく……青っぽい石造りの壁だった。

「ここ……は？」

どういう訳か同色の石造りの床にうつ伏せで倒れていた俺は、ゆっくりと体起しつつそう漏らした。
床も壁も石造りの、ダンジョンとでも言うのが適切な雰囲気を漂わせるこの場所は……少なくとも、さっきまでいた路地裏ではない。

「つーことは……さっきのアレは転移術式か？」

転移術式……簡潔に言えばテレポートみたいな物である。どうやら俺はどこか屋内に居るみたいだが、あの路地の周辺にこんな内装をしてそうな建物はなかったから、アレは転移術式だったと考えるのが適切だろう。

「だとしたら、俺は一体どこまで飛ばされたんだ？」

もしかすると海外とかまで飛ばされてるんじゃないか？　封印されてたとか言ってたし。
だとすると相当マズイ……言語の方は辛うじてなんとかできるとしても、日本円しか持っていない事だけはどうにもならない。もっとも財布の中に六百円しか入っていない時点で、県外に飛ばされただけだとしても厳しいが。

「まあとりあえず……殺傷能力のある魔術じゃなかっただけマシか」

色々と面倒な事は間違いないが、それだけは本当に良かった。

「……よし」

まあ此処が何処だとかそういう事を考える為にも、まずは外に出

なければなるまい。
　俺はそう考えてゆっくりと立ち上がる。
「まだ痛ぇけど……なんとかなりそうだな」
　怪我はどうにもならないにしても、単純な痛みはある程度休めばそれなりに緩和される。とりあえず両手の自由が利いて、両足でしっかりと歩ければ大丈夫だろう。
「さて、どう歩けば出口に辿りつけるんだ？」
　今俺は廊下の様な場所に立っている。だから進む方向は前後どちらかになる訳だけど……はっきり言って、出口を示す手掛かりなんて何処にもない。
「当てずっぽうに進んで行くしかないか」
　俺は深く考えるのを諦めて、そのまままっすぐ歩きだす。
「しっかし……ダンジョンっぽい雰囲気だなここ」
　今にもモンスターとか出てきそうである。まあ佐原でもなければそんな状況は望まないだろうし、少なくとも俺は御免である。
　佐原位ならともかく……俺の実力じゃ、最初の街の周辺に生息してるモンスターを倒すのがやっとだ。こんな怪しい場所でＲＰＧの如くモンスターが現れれば、即棺桶行きだ。現実じゃ教会なんかに連れてかれず、そのまま火葬されて墓の下。だからモンスターとかはマジ勘弁である。

……もっとも、あくまで出てきそうな雰囲気なだけで出て来る訳が無いとは思うのだが。

「まあ此処から出れずに餓死して火葬みたいな事にはならねえようにしねえと……って、ん？」

曲がり角を曲がった先に、赤い巨大な扉があった。

例えるならそう……ボス部屋みたいな感じである。

「……どうすりゃいいんだ？」

なんとなくこの扉を開けてその先に進む事に嫌な予感はするのだが、もしコレが出入口だったらどうする？　そうなればこのどれだけ広いかも分からない建物の中を彷徨い続ける事になるのだ。

「とりあえず……進んでみるか」

まあボス部屋とか言ったって、ここは現実だ。モンスターが居そうなだけで、実際には居やしない。だから安心して扉を開ければいい。

「つーか……開くのか？　コレ」

とりあえず扉の前までやってきたが、高さ五メートル近いこの扉は、はたして押したり引いたりの基本動作で開ける事ができるのだろうか。

一応俺も微力ながら肉体強化を扱える訳だし、ある程度筋力の底上げはできるけど……やった所でこの扉を開けるのは厳しいんじゃないかと思う。

目の前に立って開かないって事は自動ドアではないし、かといって周囲にスイッチなどは無い。だとすれば別に部屋に扉開閉のシステムでも用意してあるのか？

「……まあ押すだけ押してみるか」

開かなかったら開かなかった時だ。

俺はそのまま扉に手を伸ばす。

肉体強化を使わないのは、使うと僅かながらに肉体に負担が掛るからだ。佐原にボコボコにやられた今、改めて肉体強化を使うのは避けたいところ。

だからとりあえずは素の力で押してみる事にしたのだ……が。

「……え？」

なんとその扉は、触れただけで勝手に開き出した。どうやら触れると開くようになっていたらしい。

だけどどうやら俺の読みは外れていた様で、扉が開かれていっても外の光が入ってくる事は無い。どうやら出口の扉では無かったようだ。

「まあこの部屋の先に出口があるかもしれないか……ら？」

ギシギシと開いていく扉を見ながらそんな事を口にした俺は……開かれた扉の先の光景を見て、思わず絶句する。

……一言で言えば、ファンタジーＲＰＧだった。

中世風の衣服を着た十四、五位の女の子が掌から電撃を放っている。

それはいい。それは別に良いのだ。
その位ならば、あの子コスプレでもしてんのかな？　で済む話である。
問題はその電撃が放たれた対象。

「ドラ……ゴン？」

俺は思わずその存在の名を口にする。
俺の視界の先。水色のショートカットの少女が戦うその相手は……直径十メートルはあろう、白い鱗を全身に纏った、二本足で立つファンタジーの世界の存在。
それはまぎれも無いドラゴンだった。

０２　覚醒

「なんだ俺……夢でも見てるのか？」

俺は視界の先で繰り広げられる戦闘を目の当たりにして、そんな感想を漏らした。

全部夢と考えれば納得がいく。

「……うん、俺がどうするべきかってのは、分かってるよな」

全力疾走でドラゴンに向かっていき、少女に加勢する……訳が無い。

いくら夢だとしても、流石にアレに向かって行く勇気など無い。勝ち目の無いのに佐原に向かって行った奴が何を言ってんだって気もするが、それとコレでは話が別だ。言うなれば史上最強の軍人に立ち向かうのと、対魔術装備の最新鋭戦車に立ち向かう位違う。

これはいくらなんでも……無理だろう。

俺は一歩後ろに後ずさり、それに合わせるようにドシンという足音が聞えた。

「……ドシン？」

俺は恐る恐る背後を振り返る。

「……」

そして絶句した。

トロール。

ＲＰＧ風に例えるとすれば、そんな感じの名前が一番しっくり来るだろう。
緑色の巨体の両手には巨大な棍棒が握られており、その力強さを感じさせる。
そんな化物が……目の前に居た。

「……マジかよ」

完全に退路が塞がれている。いくら夢だとしても、コイツを突破する程の勇気は俺には無い。
トロールは呆然と立ち尽くす俺に戦意を見せるように、棍棒を床に叩きつける。それだけで……物凄い陥没しましたが！？　なんか工事現場みたいになってんだけど！？

「……」

自然と唾を呑みこんだ……次の瞬間。

「……ッ！」

俺は肉体強化を使う事すら忘れて全力で部屋に飛び込み……後方では再び棍棒を振り下ろした轟音が響き渡った。

「あ、あぶねえ……」

体制を立て直してさっきまで立っていた場所をみると、既にそこは工事現場となり果てていた。
一瞬でも遅かったら……確実に肉片になっていた。

そう思った瞬間だった。

「……ッ」

正面から轟音が響き渡る。
ただしそれはトロールが棍棒を振り下ろした音では無い。

「扉が……」

扉が、勢いよく閉じた。
それはまるで、俺がこの部屋に入ったタイミングを見計らった様に。

「助かった……のか？」

そう呟いて、次の瞬間その考えが間違っている事に気付く。
確かにトロールの危機は、一旦去ったと考えて良いだろう。だがこの部屋はどういう部屋だ？
俺は恐る恐る後方を振り返る。

そこにはやはりドラゴンがいて……少女を巨大な尻尾で弾き飛ばしていた。

「な……」

何が……起きた？
理解している筈の事が理解できなかった。
弾き飛ばされた少女は床をバウンドし、壁に叩きつけられ、ぐったりと動かなくなる。

気を失っているのか、それとも……いや、それは考えたくない。

そしてそれを行ったドラゴンは……その少女に向かって一歩踏み出した。

「ま、マズイ！」

確実に、ドラゴンはあの少女を敵として捉えている。

あのドラゴンがこのまま少女に近づけばどうなるか……それはあまりに簡単だった。

「だ、誰か……」

周囲にこの状況をなんとかできる様な奴が居ないか、俺は必死に周囲を見渡す。

だけどもこの部屋に居るのは俺とあの少女。そしてドラゴンだけで、その事実は絶望以外の何でもなかった。

「これは夢……だよな？　夢であってくれ……ッ」

夢じゃないとすれば、この現実は最悪だ。どうしようもない位に最悪だ。

俺にはどうする事も出来ない。あの少女を助けられない。本当に最悪な状況。

そんな状況である事は分かっているのに……気が付けば俺は一歩前に踏み出していた。

それはあの時……佐原と対峙した時の様に。

勝てないと分かっていても、気が付けば足が動いた。本当にあの時と同じだ。

……本当に、馬鹿だ。何も反省していない。

昔友人に言われた事がある……お前はお人好しすぎるから、絶対その内損するから治せと。
……本当にそうだ。損しかしない。
だけど止められなかった……あの時も、今も。

俺は瞳を赤に染める。
……注意を逸らす。
逸らした先にどうすればいいかなんてのは何も思いつかない。だけどとりあえず、あのドラゴンがあの子に向けている意識をどうにかしなければ、全てが終わる。

だが叫んだところで振り向くかどうか分からない。肉体強化で接近したとして、それでは結局あのドラゴンは少女の近くに居たままだ。

だとすればどうすればいいか。答えは簡単だ。
俺は右手の甲に赤い魔法陣を展開させる。

発火術式。

掌から炎を出現させる、日常生活ではキャンプの時位しか使い所の無い魔術。
俺の魔術師としての実力は並より下。精々硬式の野球ボール位の大きさの半分程度の炎しか出す事ができない筈だ。
だけどそれでも、小さかろうが炎は熱い。気を引く事位、できる筈だ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

俺の叫びと共に右手に熱が籠り、掌サイズ以下の炎が出現する……

筈だった。

が……現実ではそうはいかなかった。予想だにしなかった現象が、右手を中心として発生していた。

だけど、今はそれに驚愕している暇はなかった。俺は全力で、右手に出現したソレをドラゴンに向かって飛ばす。

俺の予想していた炎の数倍……否、十数倍にまで膨れ上がった、巨大な炎の塊を。

０３　強化されし魔術

放たれた炎は、自分でも驚く様な勢いでドラゴンとの距離を詰め、着弾。肌を焦がされたドラゴンが咆哮を上げる。
……効いていた。
注意を逸らすだけでは無く、紛れも無く攻撃として、俺の炎は作用していた。
だがそれは即ち……ドラゴンがより明確な敵意を俺に向けるという事になる。

「……ッ」

ドラゴンが鋭い目付きで俺を睨めつけた。
思わず竦み上がり、一歩後ずさる。
圧倒的威圧感。普通に生活していれば、まず感じる事の無い重圧。
そんな物が今、俺に向けられていた。

「ク……ッ」

俺は再び右手に炎を出現させる。
例えこのまま後ろに下がっても、何一つ状況は好転しない。
今俺がやるべき事は……とにかく目の前の脅威をなんとかする事だ。

「うぉらあああああああああああッ！」

俺は原因不明の強化が成されている炎を、再びドラゴンに向けて放つ……が。

「何！？」

ドラゴンが口から吐いた炎……ブレスとでも言うべきソレが俺の炎を相殺した……否、完全に呑みこんだ。

「クソッ」

勢いよく放たれた炎のブレスは、二十メートル近く離れた俺に向かってまるで火炎放射機の如く迫ってくる。その勢いは、バッティングセンターで見た百三十キロ……いや、百五十キロの球に引けを取らない。

俺は咄嗟に右方へと跳びこみ、転がりながらもブレスを交わす。

「ハァ……ハァ……」

ブレスの通った後の床は黒く焦げてしまっていた。もし生身の俺が喰らっていたら、冗談じゃ無く消し墨になっていただろう。

そして分かった事……どれだけ強化されていようが、この炎の魔術じゃあのドラゴンを倒す事ができない。

この炎がどれぐらいの威力を持っているか、明確な判断はできないけども……多分、威力うんぬん以前に、あのドラゴン相手に炎の魔術は相性が悪いんじゃないだろうか。

実際あの女の子も雷を操って戦っていた。そう考えれば俺の読みは合っている気がする。

だけど、俺に雷は出せない。たとえ強化された今であっても、殺傷能力を得られそうな魔術は、発火術式を含め二つだけ。

「だったら……一か八か、やってみるしかねえか」

できる事なら、遠距離攻撃でのヒット&ウェイで攻めたかったけども……それが無理なら使うしかない。

発火術式以外の魔術も強化されている事を祈って……正面からぶつかるしかない。

右手の甲に白い魔方陣を展開。俺は再び目を赤く染め……発動する。

佐原との喧嘩で使っていた……大した恩恵も得られない肉体強化を。

「……ッ！？」

発動した瞬間、自分の体の異変に気付く。

本来、俺の微弱な肉体強化では、実際に物を持ち上げてみたり、百メートルのタイムを計ってみたりでもしないと、その効果を実感できないような物だ。

それがどうだ……何もしていなくても、自分の体に力が溢れるのが分かる。

それこそ……自分を圧倒した佐原を、赤子の手を捻るかの様に倒す事ができる程に。

「これなら……いけるか？」

……いけるかじゃない。やらないといけないんだ。

俺は右拳を握りしめ、腰を低くして構える。

そして、勢いよく右足で床を蹴った。

「……ッ」

突如得た推進力に俺は思わず驚愕するが、さっきと同じでそんな時間は何処にもない。

ほんの一蹴り。たったそれだけの動作で……二十メートルあった距離が一瞬で詰められた。本当に一瞬の出来事だった。

それ故に……ドラゴンは反応できず、それ何処ろかスピードがどの程度が理解していなかった俺もすぐには反応できなかった。

それはつまり、こういう事になる。

「グハッ！」

殴るつもりで飛んだのに、結果は不格好なショルダータックル。ショルダータックルとは名ばかりのただの追突だった所為か、全身に激痛が走る。完全に自爆……いや、諸刃の剣だった。

「グォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

今の一撃に合わせるかのようにドラゴンが方向を上げ……その巨体が後方によろめいた。

ドラゴンが後方によろめいたのと対をなす様に、俺の体も弾かれて後方に四、五メートル飛ばされる。

滑る様に着地して相手を見据えると、まだドラゴンは必死に踏み留まり、倒れない様に体制を保とうとしている様だった。

だったらその隙を逃す訳にはいかない。

俺は再び右足に力を込め、ドラゴンの腹部に向かって飛ぶ。
眉間を狙いに行った時ならともかく、腹狙いだったらあの体勢でこちらにブレスを撃ってくるとは考えにくい。
つまり、腹は今現在反撃が飛んでくる可能性の低い、付け入る隙！

「倒れろおおおおおおおおおおッ」

俺は今度こそ握りしめた拳をドラゴンに向かって放つ。
人間が何かを殴ったとは思えない衝撃が周囲に響き、その直後、ドラゴンが倒れた事により発生した轟音が部屋の中を支配した。

「ハァ……ハァ……どうだ……」

俺の一撃が相当効いたのか、倒れた時の打ち所が悪かったのか……それともあの女の子がそうとう体力を削り、死に掛けていたのか……ドラゴンは倒れたまま動かなくなった。

本当にもう大丈夫なのか不安だったので、仰向けで倒れたドラゴンの頭に乗って眉間辺りに全力の踵落としを放ってみたが、特に反応は無い。
きっとやっぱりあの子がほぼ倒しかけていたのだろう……まあなんにせよ、当面の危機はさった……いや、去って無い。

あの子は……どうなった？

俺は部屋の壁に叩き付けられてぐったりとした女の子に視線を向ける。
まだ意識が回復していないのか、あちらも動く気配は……って、ちょっと待て。

「そもそも……生きてんのか？」

あのドラゴンの巨大な尻尾で弾き飛ばされて……果たして生きてるのか？

段々と自分の顔が青ざめて行くのが分かった。

俺はドラゴンの頭から飛び降り、肉体強化を解除して、少女に駆け寄る。

そして……段々と鮮明に見えて来る少女の状態を見て、更に顔を青ざめる事となった。

「……ッ」

絶句する。それは絶望以外の何物でもなかった。

生きているのか死んでいるのか、それは分からない。

ただ、少女を中心に……血の海が広がっていた。

０４　回復魔術

「冗談……だろ？」

冗談だと思いたい様な光景……だけども冗談では無い。

俺は少女の前に屈みこみ、そして一つだけ安堵できる情報を得る。

「……息はある」

つまりはまだ生きているという事。これが安堵でなくて、一体何なのか。

だけども、状況そのものは、決して安堵できる物では無い。

「そ、そうだ、救急車……ッ」

俺はポケットに入っていたスマフォを取り出すが……、

「クソ、圏外かよ……ッ！」

この建物自体が電波を遮断しいているのか、電波が無い様な海外に飛ばされたか……いや、そもそもの所、本当に俺が居た世界なのか？

謎の建物。トロール。そしてドラゴン。本当にファンタジーな存在だ。

そして俺はその疑念を少しでも確信に変える、凄く身近な要素に目を付ける。

……水色

俺の前で血を流しているこの女の子の髪の色は水色だ。しかも素人の判断だから合ってるかどうかは分からねえけど、地毛の様な気がする。

人間の髪が水色なんてあり得るか？　否、あり得ない。少なくとも地球上ではだ。

だったらなんだ、俺は一体何処に居るんだ？

いや、そんな事よりも……この子が生きている内に此処を脱出できたとして……果たしてこの辺りに……いや、もしかすると地球上のどこかではないかもしれないこの世界に、この子の怪我を治せるレベルの医療機関は存在するのか？

分からない。ここか日本なのか、海外なのか、それとも地球ですら無いのか……外に出ればこの子を助けられるのか。

だが一つ、素人目で見ても分かる事。

「……時間がねえ」

間違いなく、この子はこの建物を出るまで持たない。ほぼ確実にその前に息絶える。

「だったら……どうすればいい？」

とにかく止血……でもどうやって？

こんなもの、学校の保険体育で習う様な応急処置じゃどうにもならない。

そんなものでどうにかなる領域は当の昔に越えてしまって、完全に外科医か回復魔術師の領域に到達してしまって……回復魔術？

「そうだ……それだよ」

今まで自分で回復魔術を使うなんて事は無かったからすぐには思い付かなかったけど……俺にだって回復魔術は使える。しかも回復魔術に関しては、平均位の実力はあると自負している。

「だけど……やれるか？」

平均程度に使えるにも関わらず、そうした選択肢に思い至らなかった理由……それはきっと、そもそもの所、その平均点がすこぶる低く……使い物にならないレベルだからだ。

魔術の全てが、ＲＰＧの様に簡単な物だという考えは大間違いで、回復魔術も使えば対象のＨＰが一定値回復する様な甘い物では無い。

回復魔術は徐々に対象を回復させていく魔術だ。

この子の様な状態の怪我人に対して使用した場合は、血液の生成、破れた皮膚を繋ぎ合わせるなどの事を、ゆっくりと行う。

そう……ゆっくりと。

俺の素の力……平均そのものの回復魔術を用いて治療を行った場合、掛る時間は計り知れない。

なにしろ、転んだ擦り傷を治すのですら、人間の自然回復を度外視した計算で、約三時間近く掛る様な代物なのだから。

それこそこんな状況をなんとかできるのは、ごく僅かの一握りの人間。だから誰かを助けたい人間は、回復魔術師ではなく医者を志願するのだ。

……だが、それでもこのまま何もしない訳にはいかない。
俺は右手を少女に翳し、魔術を発動。右手の甲に緑色の魔法陣が展開され、少女の倒れている床にも同色の魔法陣が展開される。

「……頼む」

これは賭けだ。

発火術式。肉体強化。それらと同じ様に回復魔術も強化されていた。
魔法陣からは大量の光りの粒子が浮かびあがり、それらはやや薄い黄緑色をしている。

回復魔術はその色が黄緑に近づく程効力が高い事を意味する。
俺の色……この薄い黄緑がこの子を治す為の及第点に達しているかどうかは分からない。

少なくとも、以前テレビで見た最高位の回復魔術師には及んでいない。あの色彩を出せちゃいない。

だからこそ賭けだ。賭けるしか選択肢の無い賭けだ。
成功する確率なんて分かった物じゃない。失敗すればこの子は死ぬし、多分俺だって立ち直れない。自分の裁量で人の生死が変わってくるのだから当然だ。

「……頼むッ」

俺は再びその言葉を口にし、集中の海に身を投げ出す。

◆◇◆

「ハァ……ハァ……クソッ」

一体どれだけの時間が経過したかは分からない。

それは数十分か、もしかすると数時間か。そんな時間感覚を失う程の緊張感が俺を埋め尽くす。

……以前出血は止まらない。

だが、一分間に流れ出る血液の量は減って来ている様に思えた。

依然大量出血という言葉がしっくりくるが、自然回復力と、俺の魔術の効果で、幾分かマシにはなっている。

そして、依然大量の血液が流れながらもまだ息があるという事は、血液の生成量が出血量に辛うじて追い付いているという事なのだろう。

それはつまり、時間を掛けさえすれば目の前の女の子を助けられるという事になる。

……時間を掛けさえすれば。

「……マズイな」

力は及第点に達している。今の俺の回復魔術は、目の前の少女を助けられる程のポテンシャルを秘めている。

だけども……足りない事が一つ。

「……フラフラして来やがった」

場数の不足。それによる集中力の欠落。

魔術を扱う際には結構集中力を有する。故に長時間の魔術の行使

は相当体力を削られる作業となる。

それでも肉体強化などの日常的に使う様な魔術ならば、まだ慣れがある分楽なのだが……回復魔術を……それに、こんな人の命が掛った作業など慣れている筈が無い。

「……あと、どの位持つ」

俺の集中力はもう限界に近かった。いつ回復魔術が途切れても可笑しくは無い。

……せめてこの子が目を覚ませば。

そうなれば俺だってある程度安堵し、残りの治療を済ませられるかもしれない。それどころか、目を覚ます事によって、この少女自身が何かしらの方法で自らに治療を行うかもしれない。

そう……目を覚ましてくれれば。

ただ、此処が何処か分からなくても、都合のいい事はそう起こらないという現実は変わりはしない。

俺の魔術が強化された事が都合のいい事だとすれば、都合の悪い事だって起きる。世界はきっとそういう風にできているんだ。

だから……目を覚ました。

その事から一つ分かる事があるとすれば……俺がしくじったんだと言う事だ。

背後から鳴り響く咆哮。起き上るために四肢でも動かしたのだろうと推測できる轟音。

少女から目を逸らさない今でも、何が起きたか分かる。

目を覚ましたのだ。

俺が倒したと思いこんでいた……白いドラゴンが。

０４　回復魔術（後書き）

四話でこの辺りって、展開が早いのか遅いのか……

05　目覚めた者

「ふっざけんな……こんな時に……ッ」

俺は魔術を継続させたまま、ドラゴンの方に視線を向ける。

詰めが甘かった。

動かなくなった時点で大丈夫？　ドラゴンは倒した？　ふざけるな。

俺は殺した事を確認したか？　……否、していない。

生き物は、生きている限りは何度だって立ち上がる。佐原に倒された俺が、こうして立っている様に、あのドラゴンだって絶命しない限り立ち上がるのだ。

……どうして、殺す事を考えなかった？

あのまま、踵落とし一発だけではない。確実に殺したと思える位のオーバーキルを行うべきだったのだ。

それを無意識に行わなかったのは……日常的に何かを殺すなんて環境に置かれていない、日本人の性なのかどうなのか、それは分からない。

だけどこの状況が成す意味は良く分かる。

絶体絶命。

治療を続けないと危険な状態の少女を庇いながら、ドラゴンとの

戦闘を行う。これが絶対絶命じゃ無くて何になるんだ。

その時、ドラゴンの咆哮が再び響き渡り……頬がやや膨れ上がったのが見えた。

「まさか……ッ」

またあのブレスが来るのか……そう思った時だった。
ドラゴンの口から白い霧が放たれる。

「……目暗ましか……ッ」

霧に寄って一気に視界が悪くなり、ドラゴンが文字通り消える。

「くそ……何処から来る……ッ」

見えない遠距離からのブレスとか来られたら、対処できるのか？
なにより……この子がいる状態で。

そう思った時、ドラゴンの居た方から大きな地響きが鳴り響いた。
警戒して、流石に回復術式を打ち切って肉体強化に移る。

……流石にすぐに死んでしまう事は無い筈だ。
俺はそう信じてどの方面から来てもある程度対処できるように身がまえた。

そうして……それはやってくる。
真上から……巨大化したドラゴンの尻尾が。

「なに……ッ！」

俺は辛うじてそれに反応し、振り下ろされた尻尾を受けとめる。
訪れる衝撃に腕がしびれるが……軽すぎる。
振り下ろされる力が……押しこむ力が、殆ど感じられない。

「……まさかッ」

俺は気合いでその尻尾を払いのけようとする。
それと同時に再び正面から地響き。俺が思いのほか楽に尻尾を撥ね退けた次の瞬間、霧の中でも見える範囲までやって来たドラゴンの姿は……尻尾が無い。
つまり今のは囮……本命は、

「巨大化!?」

尻尾と同じく巨大に膨れ上がった足。
俺と少女を纏めて潰すかのように、それは躊躇なく落とされる。

「ぐぉ……ッ」

それを俺はなんとか……両手で受けとめた。
だが尻尾の時の比では無い……全身の体重が掛ったこの攻撃は、尋常じゃ無い力を秘めている。
腕が軋む。全身が悲鳴を上げる。

「グ……あぁあああああああああああああッ!」

身動き一つ取れない、相手を圧倒するプレス攻撃。
つまりは、この状況に追い込まれた時点で……俺の負けだったのだ。

「ぐ、うおおおおおおおおおおおッ！」

俺はなんとか押し返そうとするが、びくともしない。寧ろ今も抑えられている事が奇跡で、だんだんとジリ貧に追い込まれている。

……どうすりゃいい。

俺は必死に考えるが、こんな状況では……いや、俺の持ち駒では、きっとどんな状況で考えようが打開策は浮かんでこない。

詰み……王手。

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

もう終わりだ……そう思った次の瞬間、俺は先程考えた事を否定する事になる。

俺の持ち駒では、どうする事もできない。

だが、この状況において、持ち駒と呼んでいいかは分からない物の、確かに俺とドラゴン以外の駒は置かれていた。

俺を横切る様に、一筋の電撃が走る。

それはそのままドラゴンへと突き刺さり、咆哮を上げたドラゴンは大きくバランスを崩した。

……その隙を逃さない。

「うおらあああああああああああああああああッ！」

俺は全力でドラゴンを押し切り、ドラゴンを後退させる。
そしてそのまま飛び上がり、バランスを崩し今にも倒れそうなドラゴンに放つ。
全力の勢いのとび蹴りを、再び腹部に。
「倒れろおおおおおおおおおおッ！」
俺の叫びと共に、叩き込んだ右足に衝撃。次の瞬間ドラゴンが倒れた事を意味する衝撃が部屋内に走った。
「……ハァ……ハァ……」
俺は再び動かなくなったドラゴンの腹の上で荒い息を吐く。
一先ずは動かなくなった。気絶か、それとも今度こそ絶命したのかは分からない。だけど目先の危機が去った事だけは確認出来た。
それもこれも、この場にいたもう一人の駒のおかげで。
俺は少女の方に視線を向ける。
少女は依然血塗れだった。まだ安堵はできず、継続した治療が必要になってくる。
だけど確かに……目を覚ましていた。
目を覚ましたのは、何も敵だけではなかったのだ。

０５　目覚めた者（後書き）

そろそろ序章が終わる予定です。

06　今居る場所は

俺はとりあえず少女の方に駆け寄る事にした。

先程の過ちを繰り返さない為にも、余分に攻撃を加えて置くべきかと思ったが、すぐに治療すべき相手に意識が戻ったにも関わらずそれを放置するのは、なんというか……放置される側にとって酷な気がする。あくまで俺の主観ではあるが。

「大丈夫か？　待ってろ、今もう一回回復魔術を掛けてやる」

少女の前まで戻った俺はしゃがみ込んで、か細い息をする少女に再び回復魔術を掛けてやる。

……しかし凄いな、こんな状態だってのにもう目を覚ますなんて。今だ出血が止まらないのだから、普通はもう少し昏睡状態が続くと思うけど……まあ医療にまるで詳しく無い俺が考えて分かる事ではないし、そもそも考える必要だってない。

目を覚ました。それだけで充分なのだから。

俺がそう考えていると、少女はゆっくりと体を起そうとする。

「馬鹿、無茶すんな。もう少し寝てろ」

俺がそう諭すまでもなく、まだ少女は起き上れないらしく、再びその場にぐったりと寝そべる。

だが首だけをこちらに向けて口を開いた。

「……ありがとう」

「どういたしまして」
　俺はそのままそう返す。
　やっぱり、誰かを助けてお礼を言われるってのは、気分がいい。
　もちろんコレを目当てに誰かを助けるなんて事は無いけど、それでもやっぱり感謝されるってのは良い物だと思う。
　……しかし、そんな気分に浸っていながらも、やはり気になる事が一つ。
　俺は自分の後方に倒れている巨体をチラチラとみる。
　……まだ起き上ってくんのか？
　やはり何処かのタイミングで魔術を再び打ち切って確認した方が良いのだろうか？
　今回はうまく切り抜けたけど、次もうまく切り抜けられるとは限らない。どうしたもんか……。

「大丈夫」
　俺がドラゴンの方をチラチラと見ている事が気になったのか、少女はそう言って続ける。
「あのドラゴンはもう死んでるわよ」
「そうなのか……？」
「うん、多分大丈夫……女のカン」
「……信用ならねえ……」

それあんまり信じちゃいけない奴じゃねえのか？

……でもまあ、ああして戦っていた所を見る限り、この少女はあのドラゴンの事を俺なんかよりよく知っているのかもしれない。そう考えれば、あのドラゴンが死んでいるという事も分かったりするかもしれない。

「まあ、俺には判断付かねえし……とりあえず信じとくわ」

やっぱり今から回復魔術を打ち切るのも、ちょっと気が進まない。そういう事にしておこう……まあ何かあるんじゃないかって不安は拭えない訳だけど。

……だけどまあ拭えた不安もある。

こうしてこの少女が、この出血量であるにも関わらず、多少辛そうながらもある程度喋れる位に回復しているという事。

そして俺が……この子の言葉を理解できたという事。

俺はその事に対し、本当に安堵し、深く息を付く。

「しっかし……どうやら此処が日本みたいで良かった。知らない世界に飛ばされたんじゃないかって真剣に思ったぞ」

俺は日本語が分かる以外は、若干英語ができる位である。

海外に飛ばされたのならば、そのカタコト英語と現地警察の手出すけなどでどうにでもなりそうだけど……マジでさっきから可能性に入れていた、別の世界……異世界みたいな場所に飛ばされたのであれば、カタコト英語も使えないし、きっと警察なども当てにはできなかっただろう。

そう考えると、とりあえず異世界じゃなくて良かった。そして恐らく此処が日本だと言う事も、本当に良かった。
俺が心中で再び深く息を付いていると……少女が俺の息をため息に変える様な事を言い始める。

「日本……どこよ、それ」

まだ喋り辛そうなその言葉は……嫌な予感を全身に駆け巡らせた。

「えーっと、ほ、ほら、日本だよ日本。寿司とか有名だろ？　というか、お前日本語喋ってんじゃん」

俺はそうやって必死に、日本の存在を立証しようとするが、少女は再び訳が分からないという風に口を開く。

「日本語？　なに言ってんのよ……これ、ダイラーン語じゃない。もしかして、戦闘で頭でも打った？」

打ってない。
だけど……たった今、精神的に、後ろからハンマーで叩かれた様な衝撃はあった。
それも当然だ。

少女の言葉を分かりやすく変換すれば、こういう事になる。
どういう訳か俺が日本語だと感じているこの言葉は、ダイラーン語という未知の言語となっていて……、

「……冗談だろ？」

少女が嘘を付いていなければ此処は……異世界に分類される様な場所という事になるのだ。

俺は今度こそ、深いため息を付いた。

06　今居る場所は（後書き）

話の切りを考えたら、ちょと短くなった気がします。

０７　少女の名前

俺はため息を付きながら思う。

……そりゃ封印されるわ。

俺が此処に居るのは、間違いなく佐原が使ったあの魔術の所為だ。そんな無茶苦茶な魔術が記された魔道書、封印すると考えるのが当然だ。

……でも、なんでそんな魔道書が佐原の家にあったんだ？　だがしかし、そんな事を考えても、それを知っているのは交通事故で死んだとされる佐原の祖父だけだろうし、ソレを知った所で俺に何の利点も無い。

もし此処が本当に異世界だとするならば、他にもっと優先して考えるべき事が山ほどある筈だ。

例えば……これから俺はどうするべきなのか、とか

「……大丈夫？」

俺の顔色があまりよく無かったのだろう。大丈夫じゃない少女が俺にそう問いかけてきた。

「まあ……なんとかな」

実際の所は全く大丈夫ではないのだが、弱った怪我人の前であまり落ち込んだ姿を見せるのは良く無い気がする。まあ大丈夫？　と、問い掛けられてる時点で、俺が全然内面を隠せて無いのは丸分かり

なのだが。

「それより、お前こそ……大丈夫か？」

「まあ少なくとも……会話ができる位にはね」

少女は苦しそうに笑みを浮かべてそう言う。

「俺は正直言って、お前の怪我じゃまだ昏睡状態でもおかしくないレベルだと思うけどな」

もちろん医学に疎い素人の考えではあるが。

「ほら、えーっと……私、結構丈夫だから」

「今の状態と丈夫ってのは、関係ないと思うけど……」

丈夫ってのは、怪我をしにくい。病気になりにくいって事じゃないのか？　今の状態で目を覚ましているってのは、また違う気がする。

「でもまあ……とりあえず無事でよかったよ。俺、お前が死んじまうんじゃないかって思ったんだぜ？」

本当に危ない状態だった。あと少しでも遅ければ、あと少しでも俺が弱ければ、どうにもならなかった。

「えーっと……本当に、ありがとう」

「礼はもういいよ。別に礼を言われる為に助けた訳じゃねえしな」

まあ嬉しい事には嬉しいけど。

「それに……まだ終わってねえだろ」

まだ治療は終わっていない。

「此処からが、もうひと踏ん張りだ」

俺は気合いを入れ直し、少女の治療を続ける。

◆
◇
◆

数分後、部屋の状況は一転していた。

少女の傷はまだ癒えていない。数分の内に少しはマシになったが、まだ危険な状態だ。

そして俺は……床に座り込んで息を付いていた。

結論を言えば、限界が来た。

まあ会話をしてたってのも、長時間魔術を使う事に慣れていない俺にとっては集中力を飛ばす原因だったのかもしれないけど……それが無くても限界が訪れるタイミングはさほど変わらなかっただろう。

だがまあ、俺が魔術を止めた今でも、少女の寝そべる床には緑色の魔法陣が展開されている。

そして少女の手の甲には魔法陣。即ちバトンタッチしたのだ。

あの時瀕死の少女が電撃を放ったのを見る限り、今の状態で回復魔術を行使する事は、辛いだろうが不可能ではなさそうだ。

「なぁ、変わろうか？」

「もう少しいける……だからアンタは休んでて」

……まあそう言ってくれるなら、一先ず休んでおく事にする。

疲労困憊。佐原との喧嘩にドラゴンとの戦闘。そして回復魔術。もう全身疲れ果てて、何もしたく無いという気分まで沸き上がってくる始末だ。こんな状態で回復魔術を再び扱う位なら、もう少し休んでからの方が絶対良いとは思う。

……まあとりあえず、この子が回復魔術を扱えてよかった。使えなかったら、結構ヤバい状況だった訳で、それは非常に幸運だった。

効力は俺よりも少し弱い程度。治るスピードも当然俺より劣るけど、繋ぎだと考えれば十分だ。まあ早く変われる様に、少しでも体力を回復させないとな。そう考えた時だった。

「ところで、アンタもあのドラゴンを倒しに来たの？」

少女がそう尋ねてきた。

「いや……実は違うんだよ。此処に飛ばされてきたっつーか……正直、この場所が一体何処なのかすら分かってねえんだ」

「飛ばされたって……一体何があったのよ」
何が……か。
まあ別に言っても支障はないだろう。寧ろこっちがどういう状況かって伝えられるのは、好都合だ。こっちの事情を知る人間が誰も居ない状態ってのはなんだか寂しい。
「えーっと、どっから話せばいいのか……」
少し悩んだ結果、俺は佐原との喧嘩の下りから少女に語り始めた。

◆◇◆

「……つまりアンタは喧嘩に負けて、その日本って所からこっちに飛ばされてきた。それでドラゴンにやられている私を見つけて、助けに入った。それでいい？」
「まあそんな所だよ……で、反応を見る限り、本当に日本の存在を知らないんだよな？」
「ええ。聞いた事も無いわ……無茶苦茶な話だとは思うけど、此処がアンタにとって異世界説は、割とあってるんじゃないかしら」
「……だよな」
俺は自分以外からその事を言われて、改めてため息を付く。
まあ話の途中でそれは既に確信が取れていた。

まず少女いわく、今俺が居る国はブエノリアという国らしい。

当然ながら、そんな国は地球上に存在しない。俺が知らないだけという可能性もあった

にはあったが、少女いわく世界の中心とも言えるらしい国家を知らない訳がなかった。それに地球の場合、世界の中心として国を上げる時は、おそらくアメリカ辺りをチョイスするだろうし。

異世界……か。

「まあとにかく……助けてもらった恩もあるし、こっちの世界の案内位はしてあげるわ」

「悪いな、頼む」

「いいわよ、別に」

「じゃあ、私が動けるようになったら……この塔から出ましょうか」

そう言って少女は薄っすらと笑みを浮かべる。

この塔はエジピアの塔と呼ばれているらしい。当然知らない。少女はなんでかは知らないが、此処にドラゴンを狩りに来たのだ。

「じゃあ、道案内頼むよ」

「任せて……って言っても、そんなに距離は無いけどね」

「じゃあ此処、結構低いのか？」

「ううん。二十階」

「高ぇ……」

それじゃあどうやったって、結構歩かないと駄目だろう。

「じゃあ何？　二十階から一気に一階まで降りられるショートカットでもあるのか？」

「違う……いや、あってるのかな？」

「どういう事だ？」

「転移術式」

少女は……俺が此処に来る原因にもなったソレを口にする。

「まあアンタを飛ばした大層な物ではなくて……こういう所から脱出する為の転移術式ね」

術式としての括りは同じでも、その効力は様々だ。
あくまで一括りにしているだけなのである。例えばAという発火魔術があったとして、二人の魔術師がAを使った場合、出力が異なってくる。それはつまり、場合によってはより上位の魔術であるBの平均値に届いてしまい、効力は同じなのに術式が違うというややこしい事態が発生してしまう事だってあるのだ。だから他との関連性の無い魔術以外は、基本的に○○魔術や、○○術式といった風に一括りにされる。

転移術式に関しても、建物から出る。どこか別の場所に移動する

など、何処かに移動するという括りで纏められている。効果は違うけど、そういう事情があるため纏められるのだ。
「でもさ、二人……運べるか？」
転移術式は回復魔術と同じ様に扱いが難しい魔術とされている。術者一人を運ぶならともかく、他者を一緒に運ぶとなると相当転移術式に自信が無い限り無理だ。
「まあ私はそんなに転移術式には自信がないんだけどね」
「なら駄目じゃねえのか？」
「でも、この下の階にマナスポットがある」
「マナスポット……」
えーっとなんだったっけ、マナスポットって。聞いた事はあんだけどな……。
確か、極稀にある特殊な場所で……そこで魔術を使うと、通常より大幅に魔術が強化される場所……だったか？　以前授業でそう聞いた事がある気がする。殆ど関わる事が無いから忘れてた……って、ちょっとまて。
通常より魔術が大幅に強化される……それって、今の俺と同じ状態じゃ……。
「な、なあ……下の階って事は、此処はマナスポットじゃねえんだよな？」

「だったら、私の傷だってもう大分マシになってるだろうし……移動しなくたっていいじゃない」

「……だよな」

じゃあなんだ……俺のこの力は、マナスポットとは関係ないのか？

「……どうしたの？」

「いや、別になんでもねえよ」

どうしたのかと聞かれれば、「俺は何か知らないけど俺の魔術が強化されていて、此処がマナスポットじゃないんだったら、一体この力は何なんだろう？」という風に話をもっていくのが正直者のする事だ。

さっきの話で、俺は自分の魔術が強化されている事を話していないから、タイミングとしては今が丁度良かったのだろう。

だけど、さっきも話さなかったのには理由がある。

単純に……本来の俺は今よりずっと弱いって事を言うのが、なんとなく恥ずかしかったからだ。折角こんな力を手に入れたのだから、女の子の前で位見栄を張りたいって思う。誰だって自分を良く見せたいのだ。

「まあとにかく、動けるようになったら、頼むわ。えーっと……」

「……アリスよ。アンタは？」

俺が名前を呼ぼうとした所で、まだ聞いていない事に気付き詰まっていた事を察してくれたようで、自己紹介をしてくれる。

俺もその流れに沿う様に、自己紹介をする事にした。

「俺は浅野裕也。えーっと、よろしく」

結局自分の事が何も分からない現状で……俺はこうして、一人の女の子の名前を知ったのだった。

０７　少女の名前（後書き）

次回で序章が終わる予定です。

０８　だから俺はこの手を伸ばす

その後、何度か交代しつつアリスに回復魔術を掛け続けた。

正確な所要時間は分からないけども、その行為に費やした時間はプロの回復魔術師と比較すると大幅に遅れているだろう。それでも瀕死だったアリスが立ち上がっている姿を見ると、掛った時間やそれに伴う疲労なんてのはどうでもよく感じられた。

「しっかし……とんでもねえ絵面だなオイ」

俺は立ち上がれる様になったアリスを見て、思わずそう呟く。ややや小柄な背丈に、それ相応の……いや、多分相応と呼ぶにはやや膨らみが小さい胸元。ソレらを覆い隠す衣服は、まあ当然の事ながら血塗れだった。

日本を歩いてたら、間違い無く職質される。もし俺が何の先入観も持たずに今のアリスを見たとするならば、きっと俺は何処かで誰かを殺って、返り血でも浴びたのか？　とでも考えて、全力疾走で逃げ出すと思う。

「確かに、酷い事になってるわね……」

「……それで街とか歩いて大丈夫なのか？」

職質とかされないんだろうか。

「まあ多分大丈夫だと思うわ。アンタ……ううん、裕也の居た日本はどうかしらないけど、この世界はモンスターが普通に街の外をう

ろついているから。いつ怪我しても可笑しく無いわけだしね」
「……物騒な世界だなオイ」
まあ確かに、こんなドラゴンが存在している時点で物騒な世界だ。
「まあ物騒な世界だからこそ、お前の言うギルドってのが機能するのか」
アリスを治療している間、俺はアリスに尋ねた。
どうしてドラゴンなんか倒しに来たのか、と。
するとアリスはこう言ったのだ。
『このドラゴンが塔の周囲にモンスターを呼びよせているから、討伐して欲しいって依頼があったの』
アリス曰く、この世界にはギルドと呼ばれる組織が存在しているらしい。
依頼を受けて、ソレをこなす何でも屋の様な職。それがギルド。
アリスはそのギルドに飛び込んできた依頼を受け、此処へやって来た。そういう事だそうだ。
「にしてもお前、あんな奴相手に一人で来るか普通。話じゃギルドってのは所謂組織みたいなもんなんだろ？」
だとすれば、複数人で討伐に来るのがセオリーじゃないのか？
「だってしょうがないじゃない！　ウチのギルド私しかいないんだから！」

「ああ、そういう……なんか、ごめん」

「ちょっと、同情しないでよ！」

いや、だって……なぁ。

「と、とにかく、一人で来たのはそういう事。文句ある？」

「いや、ねえけどよ……」

アリスが此処に一人でやって来た事に対して、俺に文句を言える筋合いはない。

ただ文句そのものが無いかと言えば嘘である。

アリスは死にかけた。もし誰も此処に現れなければ、確実に死んでいたのだ。

……もう少し自分の身を案じろと、文句の一つでも言いたくなるのが本音だ。

「……あんまり無理すんなよ」

だからこれは気使いだ。文句なんかじゃ無い。

俺の気使いに、少し間を開けてからアリスは口を開く。

「……分かってる」

その表情に反省の色が混ざり始めた。

「流石に無茶しすぎたわ。アンタがいなきゃ死んでた訳だし……自分が一人じゃ何も出来ないって事が良く分かったから」

一人じゃ何も出来ない……か。

「なぁ、アリス」

「何よ」

「お前ん所のギルドって……人、募集してねぇのか？」

俺はアリスにそう尋ねた。

「募集してるけど……それがどうかしたの？」

「いや、えーっと……」

今、俺達は互いに問題を抱えている。

まず俺。アリスに色々案内して貰う事にはなっているけど、それでも最終的には行くあてが無くなる。知識の方は何とかなっても、ただ放浪しているだけでは多分詰む。

そしてアリス。本来複数人で構成するギルドを一人で運営していて、一人じゃ危険極まりない。

コレらの問題を、纏めて解決できる方法があるとすれば……こういう事だろう。

「もしよかったらでいいんだけどよ……俺を、雇ってくれねえか？」

俺がギルドに加入する事。

俺はこの世界で一応の居場所を得る事ができる。そして……多分、

俺のこの力があれば、アリスの無茶を無茶じゃ無くしてやれる。
考える限り、メリットしか浮かんでこない。
……だがしかし、アリスは難しい顔を浮かべる。
「ねえ……なんでウチのギルドに誰も人がいないか、分かる？」
「……いや、分からない」
そもそも他のギルドの事を何も知らないので答えようがなかった。
何も分からなかった俺に、アリスは言う。
「結局のところね、ポッと出の新人の所になんか誰も来てはくれないの。有名所とは規模も、やってくる依頼も、貰えるお金も。何もかもが変わってくる。ウチのギルドに入るメリットなんか何もないから」
そう言ってアリスは表情を曇らせる。
「本当はね、今日のドラゴン討伐。自分でも無茶かなって思ってたの。でも無名のギルドが……たった一人しかいないギルドが、見事討伐なんて事になったら、ちょっとはウチのギルドに入ってくれる人が出て来るんじゃないかって、そう思ったんだ」
確かに。あのドラゴンが一般的に一体どの程度の認識をされているのかは分からないけど、俺は結構強敵に値するモンスターだと思っている。
それを無名が一人で倒せば……もしかすると、それなりに名は広がるのかもしれない。

「だけど無理だった。裕也に助けてもらわなかったら死んでいた位に……私は弱かったんだ」

だからね、とアリスは言う。

「ウチのギルドに裕也みたいな人が入るんだとしたら、それは間違っているんだと思うの。裕也ならきっと、トップクラスのギルドでも余裕で入れると思うから」

つまりアリスは……遠慮しているのだ。

俺を……自分の所に収まっていい器じゃないとか思っているんだ。……本来俺よりも遥かに強い筈なのに。

「街に戻ったら、案内してあげる。確か名前はよく思い出せないけど、結構有名所が採用試験の告知してたから」

「……んな事しなくても別にいいよ」

俺はアリスの申し出を拒否する。

「もう一度言うぞ。俺を雇ってくれねえか？　アリス」

アリスは予想外とばかりの表情を浮かべる。

条件だけで言えば、アリスの言う有名所の方が圧倒的にいいだろう。この力の正体は今だ分からないけど、今後もコレを使って行けるのなら、俺はきっとアリスの言う通りその有名所にだって入れるかもしれない。

だけど……こんな右も左も分からない世界で、誰も知らない所に

飛びこむより、こうして普通に会話できるようになっている、アリスと共に活動した方が気が楽そうだ。

そしてそんな俺の私情とは別に……きっとまた俺の悪い癖が出て来ているんだと思う。

目の前で困っている女の子を……一人にしておけなかった。見捨てたくなかった。

……昔友人に言われた通り、やっぱり俺はお人好しだ。止めようと思って、止められる事じゃ無い。

「い……いいの？」

その声は、僅かに涙声のように聞こえた。

「ああ」

「ウチのギルド、碌な仕事がまわってこないのよ？　今回のドラゴンの討伐だって、やっと取った依頼だし……そんな状態だから、お金だって全然払えないわよ……？」

その瞳は、僅かに潤んでるように感じた。

「だから、別にいいって」

俺は笑みを作ってアリスにそう返す。

どうでもいいことではないが……そういう事は二の次だ。
俺は一拍開けてから……ゆっくりと手を差し出して言う。

「頼めるか？　アリス」

そうして数秒の沈黙があった後、静かに俺の手は握られた。

こうして俺は……アリスのギルドのナンバー2になったんだ。

08　だから俺はこの手を伸ばす（後書き）

今回で序章を終える予定でしたが、もう一話程掛りそうです。多分、あと一話で

今度こそ序章が終わる筈です。

09　採用試験

「とりあえずそろそろ此処を出ようぜ」

「そうね……あ、ちょっと待って」

　あまりこの部屋に長く居ても仕方が無いので、アリスにそう促すと、アリスは思いだした様にドラゴンの方へと走り出す。

「おーい、どうしたんだ？」

「倒した証拠を持ってかないと」

　ああ、確かにそうだ。

　例え依頼主に、「私達がドラゴンを倒しました」なんて事を言っても、現場を見ていない依頼主からしたら、本当に俺達が倒したのか分からないだろう。そう考えれば証拠は必要だ。

　俺も小走りで追いかけ、ドラゴンの元でしゃがみ込んで、何か作業しているアリスに声を掛ける。

「証拠っつったって、一体何を持ってくんだ？」

「倒れたドラゴンの写真と皮膚よ」

　覗きこむと、アリスはどこからか取り出したナイフでドラゴンの皮膚を剥ぎとっていた……生々しい。

「で、コイツの写真はどうやって取るんだ？　カメラ持ってきてん

の？」

「カメラなんて持ってきたら、戦闘で壊れちゃうでしょ。だからこういう時は魔術を使うの」

「ああ……念写魔術か」

念写……本来の意味は、心の中で思い浮かべている事を画像として焼き出すって感じだった気がするが、念写魔術はやや異なる。目に映った光景を術式がストックし、それを後々紙に映し出す。それが念写魔術。まあ目で見ると必然的に心の中……いや、脳に情報が行きわたるから、やや異なるとは言ったものの、念写とさほど変わらないのかもしれない。

「えーっと、裕也は念写魔術使える？」

アリスがドラゴンの皮膚を剥ぎとりながらそう尋ねて来る。つまりは、剥ぎとってる間に済ませて欲しいという事だろう。

「いや、悪いけど俺は使えねえ」

残念な事に、俺に念写魔術は使えない。
多分その気になれば覚えられるだろうけど、覚えた所でメリットが少ないからな。

念写魔術ははっきり言って画質が悪い。常日頃から持ち歩いているスマートフォンと画質を比べてみると、天と地の差……否、インスタントカメラと比べても天と地の差が付いてしまう。

つまり使い所は、カメラを使えない場面で緊急に写真を取りたい

場合に限定されるのだ。
だからまあ、覚える必要もなかったし覚えようともしていない……今後、覚える必要はあるだろうが。

「そっか。じゃあそっちも私がやっとくわ」

「任せた」

俺はそんなやりとりの後、ドラゴンから少し下がってアリスの作業を眺める。
アリスの手際は正直に言ってあまりよくなかった。いつ指を切ったりするか、見てるこっちがひやひやする。

「……よし」

だが、やがて無事に剥ぎとりが終わると、アリスは掌サイズ程のドラゴンの皮膚を手にして立ち上がり、右手に白色の魔法陣を展開させた。

だがしかし、端から見てもそれ以外の変化は訪れず、やがてその魔法陣も消滅した。
念写魔術も肉体強化と同じで体内で体事が進む。だから紙に焼き出すとき以外は、発動を意味する魔法陣と、目の色の変化以外は端から見ても分からない。まあそれらが元に戻った事により、無事撮影できたって事はわかるんだけど。

「終わったわ」

「お疲れさん」

　ドラゴンの元からこちらに歩み寄ってくるアリスに、俺はそんな労いの言葉を掛ける。

「とりあえずこんな風に、掌サイズにカットして剥ぎとればいいわ。あくまで素材加工要じゃなく、倒して無いのに念写術式でうまい事やって騙してるんじゃないか？　って思わせない為の証拠品だしね」

　まあ証拠品で巨大な物持ってこられても困るからな。

「まあとりあえず、コレを参考に覚えといて」

「わかった。大きさはとりあえず覚えて参考にしておく。大きさだけはな」

「私の手先が不器用みたいな言い方やめなさいよぉ……私だって頑張ったのよ？　今日はナイフ使っても手を切らなかったし」

「やべえ、想像以上に危なっかしいぞコイツ……」

　コレ、今の俺みたいなポジションの奴が居なかったら、その内割とどうでもいい場面で悲惨な事になってただろ、絶対。

「と、とにかく私が不器用なのは一旦置いておいて」

　……不器用って認めるんだなオイ。

「今度こそ行きましょうか」

「ああ、そうだな」

形は歪だが証拠品も剥ぎとったし、念写魔術もやった。後はこの部屋から出るだけだ。

俺達はゆっくりと扉の方へ歩き出す。

「そういえばあの扉、触れただけで開いたんだけど、魔術でも使われてんのか？」

「ええ、そうよ。裕也の世界じゃああいうの無かった？」

「少なくとも俺が住んでた所にはな。俺ん所は、前に立つとウィーンって横にスライドして勝手に開く。ちなみに魔術は使ってない」

「え、何ソレ。アンタの世界どうなってんのよ……」

「その反応を見る限り、こっちの世界にそういうのは無いって事か……」

異世界って説が濃厚になってはあいるが、仮に異世界だったとしてこの世界の文明がどういう事になっているのかは分からない。アリスの着ている中世風の衣服をみる限り、此処は中世ヨーロッパみたいな感じの文明なのだろうか。だとすれば本格的にファンタジーＲＰＧみたいだ。

そんなやり取りをしていると、扉の前へと辿りついた。

「じゃ、開くわよ」

そう言ってアリスが扉に手を置くと、入って来た時の様にゆっくりと音を立てて開き始めた。

そうして広がる廊下の景色。
そうして目の前にトロールさん御一行。
「ま、まだ居たのかよ……つーか、増えてるし」
俺がこの部屋に入るきっかけとなったトロールは、何時の間に四体に増えてしまっていた。図体がデカイもんだから、廊下に通れそうな死角が見つからない。
だけどまあ……今は通り抜ける必要はねえか。
「裕也！」
「ああ、分かってる！」
俺は白い魔法陣を展開させ、肉体強化の魔術を発動させる。
通り抜ける必要なんて無い。道が無ければ作ればいい。
トロール？　……ドラゴンに比べれば、全くもって怖くねえ。
「アリス、お前は下がってろ」
俺と同じ様に、何かの魔術を発動させようとしていたアリスを制止させる。
「でも……」
「お前、まだ動けるようになったってだけで、完治してねえだろ。ここは任せろって」
二人居た方が楽な事は間違いない。だけど今の状態のアリスに荒

事をさせるのは気が引ける。
アリスは尚も不満そうな表情をしているので、俺はこう言ってやる。

「文句があるんだったら、コレはギルドの採用試験って事にでもしといてくれよ。それなら一人で戦うのは当然だろ？」

「……分かったわ」

それだけ言うと、アリスはやや不満そうな表情を浮かべたまま後ろに下がる。
勿論、こんな事をしなくても、俺はもうギルドの一員だ。少なくとも俺はそう思っている。
だからこの試験は、自分のモチベーションを上げる為の……けじめだ！

「いくぞ！」

俺は全力で地面を蹴った。
次の瞬間、先頭に立っていたトロールの顔面に右拳を叩きこむ。
呻き声を上げて後ろに倒れるトロール。俺は追い打ちを掛けるように蹴りを入れて腹に着地。次のトロールへと跳ぶ。
振り下ろされた棍棒を交わし、側頭部に蹴りを放つ。
ゆっくりと床に倒れるトロールを視界に入れながら、蹴った勢いで後退した俺は左手に赤い魔法陣を展開させ、右手に巨大な炎を発生させる。それを勢いよく、倒れたトロールに向けて放った。
先程のドラゴンには殆ど有効なダメージを与えられなかったその炎は、トロールを焼き尽くすかの如く全身に燃え広がり、トロール

はやがて動かなくなった。

「……あと二体」

俺は再び地面を蹴る。
振り下ろされた棍棒をサイドステップで交わし、隣に居た別のトロールに回し蹴りを放つ。
呻き声と共に大きくバランスを崩したトロールの持つ棍棒は、もう一人のトロールの後頭部に直撃し、二体ほぼ同時に地面へと沈む。

……まあそりゃ、後頭部をあんなんで殴られれば倒れるわな。

後頭部を叩かれ倒れたトロールは起き上ってこない。相当ダメージが深刻の様だった。
だがもう一体のトロールは起き上る。浅かったか。
そして棍棒を持つ右手には……魔法陣！？

「……ッ」

次の瞬間、突然床から鎖が出現し、俺の両足首を絡め取る。
……動かねえッ！

「裕也！」

アリスの叫びにハッとして視線を鎖からトロールへと戻すと、そこには俺に向かって棍棒を振り下ろそうとするトロールの姿があった。

一瞬、どうしようもない程の恐怖が全身を駆け巡った。
だがそれと同時に……俺はドラゴンとの戦いを思い出す。

そして棍棒は振り下ろされ……次の瞬間、砕け散った。否、砕いた。

「冷静に考えりゃ……そんな棍棒、交わす必要もなかったんじゃねえか？」

あのドラゴンに踏みつけられた際、俺は辛うじて受けとめていた。だとすれば……棍棒だって受けとめられる。否、棍棒位破壊できる。

「次はこっちの番だ！」

俺は再び赤い魔法陣を展開させ……そして放つ。

放たれた炎はトロールの全身に燃え広がり、トロールは仰向けで倒れる。先程のトロール同様、もう動く事は無かった。

「……よし」

トロールを倒した事により、俺の両足首に絡み付いいていた鎖は消滅した。

「終わったぜ、アリス」

俺はアリスの方に向き直す……って、アレ？

「あの……なんで涙目なわけ？」

「なんでじゃないわよ馬鹿！」

アリスがそう言いながら、俺の方に歩み寄ってきて……抱きついてきた！？

「……何が下がってろよ。急な事で私も援護できなかったし、あの棍棒だって壊せなかったらどうするつもりだったのよ。裕也はもう私のギルドの一員なんだから……心配させないでよ……バカ」

「……悪い」

俺はとりあえず謝るが……何だろう、女の子を泣かせてるのに、あまり悪い気はしなかった。

そうしてトロールを退けた俺達は、マナスポットのある十九階へと向かう事にした。

０９　採用試験（後書き）

あの、何回も次で序章終わるって言ってますが、実際書いてみたらあと一話掛ることが分かりました。ですが今度こそ、三度目の正直で次回序章終了です。

10　力の正体

俺が飛ばされてきた地点を超えて暫くすると、下の階へと続く螺旋階段があった。
その螺旋階段を降り、約一分程歩いた所で、俺達は小部屋を発見する。

「此処よ」

アリスの言葉に俺は立ち止まった。

「……別になんの特徴もねえ部屋だな」

分かってはいる事だが、折角魔術が強化される場所なんだから、特殊な地形だったりしても良いと思うけど……別にそういうのは関係ないんだよな。

「まあマナスポットなんてそんな物よ。前に風の噂で聞いたんだけど、自宅のトイレが偶然マナスポットだったって人も居る位だし」

「……意味ねぇ」

「でもおかげで便秘が解消できたらしいわ」

「活用してるといえばしてるけど……なんか残念すぎる」

いや、すげえ事なんだろうけど、なんだこのガッカリ感。

「ま、こんなどうでもいい話は、街に戻ってからしましょ」

「そうだな」
移動中、トロールの様なモンスターと遭遇する事は無かったけれど、これから先がどうかは分からない。
あのドラゴンがこの塔の周囲にモンスターを呼びよせていたとするならば、塔内にも呼び寄せたモンスターはまだ居る筈だ。まあドラゴン関係なく、元々生息しているモンスターが出るって可能性もあるけど。
まあそんな考察が当たってしまう前に、この塔を出る事に越した事は無い。
俺達二人はその部屋へ足を踏み入れる。
「マナスポット……初めて入ったけど、さっきまでの廊下と何にも変わった気がしねえな」
「まああくまで、魔術が強化される場所だから。魔術以外に変化は起こらないわ」
「そりゃそうか」
そんなやり取りをしながら、二十畳程の部屋の中心までやってくる。
「そうだ」
アリスが何かいい事を思い付いたかの様に、俺の方を振り返る。
「裕也、折角マナスポットに来たんだから、試しに魔術を使ってみ

たら？」

「俺が？」

「うん。素であれだけ凄い魔術なんだから、とんでもない事になると思うの」

「……確かに」

俺はそう呟きながら自分の掌を見つめる。
この世界にやって来て、全ての魔術が例外無く強化されている。
それはもう、別物と言わんばかりに。

そんな状態の俺が、マナスポットで魔術を使った……一体どうなる？
純粋に好奇心が沸いてきた。

そして、沸き出した好奇心を止める術を俺は知らないし……止めなければならない理由も存在しない。
だったら……やってやろう。

俺は右手に白い魔法陣を展開させ……発動させる。
素の状態でドラゴンを受けとめ、トロールの棍棒を砕いたその魔術を。

そしてその結果、俺に訪れたのは放心だった。

「なんで肉体強化なんか使ってんのよ。私にも分かる様な魔術にし

なさいよ」

「あ、ああ、そうだな」

だがしかし、俺はそれを拒む言葉を紡ぎだす。

「で、でも俺が使える魔術で目に見えて効果が分かるのって言ったら、あの発火術式しか無いわけだし……あんなもんこの小部屋で使ったら、何起きるか分からねえぞ？」

「た、確かにそうね……遠慮しとくわ」

アリスは何か大惨事を想像したのか、少々真剣にそう返してきた。

そしてその後、一拍置いて俺に尋ねる。

「で、どうだった？」

それは今、俺が発動している肉体強化についての問いだろう。

俺はそう察して答えた。

「やべえ……自分で引く位に凄い事になってる」

「自分の力に引くって、それはそれで凄い話ね」

そう言ってアリスは微笑を浮かべる。

だが俺の表情はもしかすると、あまりいい顔ではなかったかもしれない。

俺の発動した肉体強化。確かにソレは凄い事になっていた。驚愕と……そして疑念が俺を覆い尽くした。

殆ど変化が無い。

それはあのドラゴンと戦った時と比べてではなく……あの時、佐原と喧嘩した時の様に、地球で肉体強化を発動させた時と同じ感覚。

まるでこの部屋、この空間だけが地球だと思わせるように……今の俺は碌に力を持たないお人好しの、浅野裕也となっていた。

「……」

……気が付けば、俺は部屋の外に向かって歩き出していた。

「さーて。さっさと此処を出ましょうか……って、裕也？」

部屋を出て行こうとする俺に気付いたアリスが、俺に声を掛ける。

「何処に行くのよ。もう脱出するわよ？」

「あ、ああ。ちょっと待ってくれ。十秒だけでいい」

「……？　分かったわ」

アリスは首を傾げるが了承はしてくれた様で、少し待ってくれる様だった。

そんなアリスに感謝しつつ、俺は部屋の外……マナスポットの外へと出る。

「……ッ！？」

突然、溢れんばかりの力が全身から沸き上がって来た。
マナスポットから一歩出た俺は……力のあるお人好しの浅野裕也に戻っていた。

「……どういう事だ？」

俺は眼前で拳を握りながらそう呟く。
マナスポットに入って使った肉体強化は、地球で肉体強化を使った時とまるで感覚が変わらなかった。
そしてマナスポットを出ると、そこは部屋の中とはまるで別世界の様に、力が溢れて来る。
それはさながら……地球から異世界へ、一歩踏み出したかの様に。

「……まさか」

この瞬間、俺は一つの仮説へと辿りつく。
根拠なんてまるで無い仮説……それは、マナスポットの正体に関する事。

俺は弱い。だけどこの世界に来た途端に強くなった。まるで自分がマナスポットに居るかの様に。
そうしてそんな俺がマナスポットに入った途端に弱体化したんだ。
それはつまり……こういう事になるのではないだろうか。
マナスポットとは……異世界の空気、いや、きっと言葉で表せない様な何かが、漏れだしている様な場所。
つまりこの部屋、否、この世界のマナスポットは地球と普通の土地と変わらない、そんな場所……。

当然、仮説ではある。だけどこの仮説が当たっているとすれば、俺のこの力の正体はこういう事になる。

……マナスポット以外の場所で、マナスポットの恩恵を得られる……あべこべの力。

「これは……すげえ事って思っていいのか？」

マナスポットは本当にごく僅かな場所で、多くの人は一度もその場所に足を踏み入れないままその人生を終える。その場所でこの力は使えないけど、それ以外の場所ではその希少な力が使い放題。

「凄いん……だよな？」

……ああ、凄い。これは凄い事だ。
碌に力の無かった俺が、ほぼ常時この力を使っていられるんだ。
凄く無い訳が無い。

マナスポットでのみ元に戻る？　そんなもん、この力の代償にしては安すぎるだろう。
そう、思う事にした。
俺は肉体強化を消し、再びアリスの元へと戻った。

「どうしたの？　一体」

「なんでもねえよ」

俺は軽く笑みを浮かべてそう返す。

そう……なんでもないんだ、この位。
俺は寧ろ喜ぶべきなんだ、この状況に。

「じゃ、頼むぜアリス」

「任せなさいよ」

俺とは対照的に、マナスポットで魔術が強化されているアリスは、転移術式を発動させる。すると部屋の床全体を覆うほどの巨大な魔法陣が出現した。

「ちょっと嫌な浮遊感があるかもしれないけど、我慢しなさいよ」

「大丈夫。ジェットコースターとかフリーフォールとかは大好物だ」

「じょっとこーすたー？　ふりーふぉーる？」

「まあ今度教えてやるよ」

「分かった、楽しみにしてるわ。じゃあ……行くわよ！」

そうして、俺の周囲が白く染まった。
この力の正体を知り、歓喜と少しばかりの不安を抱いた俺は……
ようやく、旅立つ事になる。
塔の外の景色。全く知らない未知の異世界へと。

１０　力の正体（後書き）

今回で序章終了です……今度こそ終了です。
次回から一章、もとい本編突入です。

01　塔の外への第一歩

「ん……」

　ゆっくりと目を開くと、最初に見えたのは雲ひとつない青空だった。
　今の季節は春なのだろうか。さんさんと照らす太陽の日が気持ちいい。昼寝に最適な環境だ。もうひと眠りしたい所……って、ちょっと待て。

「……なんで俺寝てんだ？」

　佐原の転移術式でこの世界に飛ばされた時も気絶はしていたが、多分アレは世界を跨ぐような移動をしたからだろう。たかが建物から出る位で気絶なんかするか？
　……というか全身が痛い。戦闘で怪我なんかしなかったのに……どういう事だ？

「あ、目が覚めた？」

　アリスが俺の顔を覗きこんで来た。
　突然の出現でやや驚いたが、取り乱す程でも無かったので、そのまま平然を保って尋ねる。

「なあ……なんで俺寝てんだ？　あとさっきから地面がガタゴトと揺れてんだけど」

　あと、なんかガタガタという音もする。昼寝に最適な環境と言ったが、訂正しよう。気候以外は最悪である。酔いそうだ。

とりあえず俺はゆっくりと体を起す。途中全身にはっぱが付いていたのが見えたが、今はスルーだ。それより……。

「……荷台？」

どうやら俺は移動中の荷台……というより、馬が引くリアカーの様な物に乗せられて移動している事が分かった。

どうりで揺れて音もする訳だ……で、その疑問が片付いたら、次に手を付けなければならない疑問が当然出て来る。

「……一体何がどうなってんだ？　置かれた状況が何一つ理解できない」

隣に座っていたアリスに尋ねると、申し訳なさそうな表情で言う。

「まあ一言で言えば……失敗しました」

「失敗？」

「そう、失敗。自分の服を見れば、なんとなくその時の状況が分かると思うわ」

服……さっきスルーした、葉っぱだらけの服である。

「ああ……なんとなく理解できたよ」

失敗。葉っぱだらけ。

「つまり俺は、木の上にでも落ちたと」

「……正解」

本当に申し訳なさそうに答えるアリス。

「思ったよりもマナスポットの恩恵が強くて、出現地点が大幅にずれたというか……まあ木の上に落ちたのよ、私達」

「……散々な第一歩だなおい……」

異世界への第一歩……まあ正確には塔の中も異世界だったけど、気持ち的には第一歩みたいなもんだったのに……それが木の上に出現して気絶かよ、情けねえ。

「……そうだ、お前は大丈夫だったか？」

まあ起きてるから大丈夫なんだろうけども、一応心配だから聞いてみた。

「えーっと……木には突入したけど、裕也がクッションになってくれたおかげで地面直撃は免れたというか……」

「気絶した理由ソレじゃね！？」

なんかソレが一番ダメージでかそうだもん！

「えーっと、その節はありがとうございました」

「お、おう……」

いや、まあ俺がクッションになったおかげでアリスが無事だった

んなら良かったけど……あれ、それでいいのか俺？

「……まあいいや、過ぎた事はしょうがねえ。誰にだってミスはある」

実際マナスポットでの魔術の扱いは難しい。

二度目以降の魔術ならともかく、初めてマナスポットで使う魔術というのは効力が予想以上に高いのだ。その結果が、ドラゴンへのタックルである。

だからこの結果は……仕方ないのだ。そう考えておこう。

「で、アリス。俺達はなんでコレに乗ってるんだ？」

俺が載っている馬の引くリアカー……否、馬車とでも言っておこうか。

そもそも俺達はどうして馬車に乗って移動しているのだろう。

「偶々通りかかった運び屋のおじさんに乗せてもらったの」

そう言ってアリスが視線を向けたのは、馬に乗る気弱そうなおじさん。

そのおじさんはアリスの視線に反応するように、少しだけ視線をこちらに向けて言う。

「まあ向かうところが一緒だったからね。本当に何かと思ったよ。この編は今、モンスターが多くなってるってのに、あんな場所で気絶してるんだから」

どうやらこのおじさんは、俺達の事を心配して声を掛けてくれたみたいだった。それで乗せて行ってくれる事になったのだろう。

「あの……本当にありがとうございます」
「いいっていいって。人間困った時は助け合いが大事だからね」
そう言っておじさんは俺達に向かって笑みを向ける。その笑顔から、この人は本当にいい人なんだと思えた。ちゃんと思えたから前を向いてくださいお願いします。
やがておじさんが再び前を向いた所で、俺は気になった事を尋ねてみた。
「あ、あの」
「ん？　なんだい？」
「あ、いや。前向いたままで大丈夫です。安全運転しましょうよ」
俺はそう促して、おじさんが前を向いたのを確認してからこう尋ねる。
「えーっと……この辺、モンスターが集まってるんですよね？　おじさん、そんな中一人で運び屋なんかやってて大丈夫なんですか？」
塔の周辺は、まだ結構モンスターがうろついている筈だ。危険だろう。
「ああ、大丈夫だよ」
そうしておじさんは、またもこちらに視線を向け、満面の笑みを浮かべて言うのだ。

「轢き殺すから」

「……」

その言葉には絶句するしかなかった。

……いい顔でなんて事言いやがるんだこのおじさん……。

「ああ、でもこの前盗賊に襲われた時は、まさに絶体絶命といった感じだったねぇ」

そう言って嫌な事を思い出したという風な表情を浮かべたおじさんは、やがてふたたび俺達の方向を向いて笑う。

「まあ、轢き殺したけどね」

「……」

「……」

俺とアリスは完全に黙りこむ事になった。
おじさんはなんだかフランクに笑っているけど、もはやその笑顔は狂気にしか見えなくなっていた。

「……異世界怖ぇ……異世界人怖ぇ……」

「……あの、お願いだから、あの人をこの世界の基準にしないで」

俺達はおじさんに聞えない様にそんなやり取りをして……最終的

にこの案を言わざるを得なくなった。

「……なあ、アリス」

「……何？」

「……降りねぇか？」

「……降りたい」

こんな安全運転とは程遠い、殺戮運転の馬車にこれ以上載っていられる程、穏やかな日本で育った俺のメンタルは強くは無い。そして多分普通なアリスもそれは同じだった。

「あ、あの、おじさん。私達此処まででいいです」

「え？　それまたなんで……お、モンスターみっけ」

「降ります！　降りますから一旦ストップ！」

こうして、少なくとも俺達が載っている間は、馬車による殺戮は起きなかったけど……その後どうなったかは知らない。

ただ、少し歩くと、モンスターの悲惨な姿を数匹発見した事から、俺達は一つ新しい生活の知恵を得たのだ。

……多分あの人に任せれば、何でも無事に届けられる。

でもまあ、使いたくはないけど。

俺達はそんな、ややげんなりとした気分で、街まで徒歩で歩く事にしたのだった。

01　塔の外への第一歩（後書き）

新章開始ですが、何も話進んでないという……

02　今夜の寝床

歩きだしてどの位たった頃だろうか。感覚的には一時間程歩いた感じがする。
そこで俺達は、今更ながら深い後悔に襲われていた。
「……乗ってりゃよかった……」
「……もう歩きたくない」
約一時間前。移動手段を自ら手放すよう促した者と、それに切実な思いを吐露して同調した者の末路がコレである。
「なあ、アリス。お前の言うアフリスって街は、本当にこっちであってるのか？」
俺は不安になりながら、アリスにそう尋ねる。
アフリス……ブエノリアの首都らしいパキシアを円状に取り囲む様な街らしい。日本に例えるなら、東京の周辺……埼玉とか神奈川みたいな東京に隣接した県を、一つの街にしたみたいな感じだろうか。海にも面しているそうだから、まさにそんな感じなのかもしれない。
そんな東京周辺の様な街であるアフリスに、俺達は一向に辿りつけない。それが俺達二人が後悔している理由である。
「あってる……と思う」
「なんで自信無くなってんなってんだよ」

　こっちは全くこの世界の地理を全く知らないんだから、アリスに白旗を振られたら完全に詰みである。

「……まあ、時々分かりやすい目印があるから、こっちで良いんだろうけど」

　正直目を背けたくなる……テレビだったら、間違い無くモザイクが掛る以前に、放送コードに引っかかって放送できない様な、モンスターの轢死体が不定期に、まるで目印の様に落ちている。

　コレを見れば、なんとなくアフリスに付くという事が分かってくる。

「……あと何分程で付くんだ？」

「……あと十分程じゃ無いかしら」

「それ二十分程前にも言ってなかったか？」

「……そうだったかしら？」

　そうである。マジで言ってました。それと、それより更に十分程前にも言ってた気がする。

「なあ、アリス」

「なによ」

「お前、あの塔までどうやって行ったんだ？」

自分の足で歩いていれば、こんな悲惨な事態を事前に把握できただろうに……把握できていないという事は即ち、徒歩以外の移動方法を取ったという事だろう。

「えーっと、偶然近くまで行くって人が居てね。その人の馬車に乗せてって貰ったの。凄く寝心地が良かったわ」

「寝るなよ……あと、そもそもの所、出発前に距離位調べとけよ……」

無計画すぎる……あまりにも無計画すぎる。

これ、仮にギルドのメンツが増えた所で、迷走に迷走を繰り返して消滅するんじゃねえか？　何も考えず、ヤバイ方向に進む未来が手に取る様に分かる。

これは……結構俺、大変な所に就職したのかもしれない。

俺達はその後もしばらく無言で歩き続ける。今が春っぽい気候で良かった。夏なら熱中症で倒れてるんじゃねえかコレ。

そんな事を考えて歩いていると、俺はそこでようやくと言える案を思い付いた。

「なあ、アリス。すげえ今更何だけどさ……肉体強化使って走れば早いんじゃね？」

今の俺が時速何キロで走れるかは分からないが、相当早く街へと辿りつく筈だ。

「いや、私も考えなかった訳じゃないけど……凄く疲れるわよ？」

確かにごもっともである。

肉体強化は身体能力を上げる事ができるが、本来のスペックを大きく上回った体での活動は相当体に負担が掛る。さっきドラゴンやトロールと戦ったみたいな短時間の発動ならともかく、長距離移動には案外向かない魔術なのだ。

「まあそりゃそうだけどよ……少しの間我慢して、街でゆっくり休む。これが最善の選択じゃねえのか？」

「いや、そうとも限らないわ。だって途中で二人共力尽きたらどうすんのよ。それこそ絶体絶命よ？」

下手すりゃ怪我より達が悪い。怪我なら回復魔術で治せるが、回復魔術で体力の回復は望めない。それどころか発動者が疲れ切ってしまう。

つまりは……こういう事だ。

「結局、歩くしかねえって訳か」

「そういう事ね」

俺達はそんなやり取りの後、一拍開けてから同時にため息を付く。

一体俺達は何時になったら街へと……休息へと辿りつけるのだろうか。

早く休みたい。

そんな思いを胸に、俺達はひたすら前へと歩き続けた。

◆◇◆

「……生きてるか？」

「……なんとかね」

俺達がアフリスへと辿りついたのは、すっかり日が落ちてからの事だった。

肉体強化うんぬんのやり取りの後辺りから起動していた、スマフォの万歩計アプリによると、あの場所からこの街だけでも三十八キロもあったみたいで、一体あの殺戮リアカーに出会っていなければ、一体俺達は何キロ歩く事になったのだろうかと、思わず自分達が置かれていた状況に戦慄した。

ちなみに初めてスマフォを見たアリスウの反応は無茶苦茶面白かった。試しに触らせてみると、驚愕の嵐といった風で、見ているこっちが楽しくなってきた。

その反面、こちらの世界には携帯電話といった電子機器の類が無いという推測に辿りつく事になり、少しだけ気分がブルーにもなったが……プラマイゼロだ。そういう事にしておく。

「とりあえず……何処かで休まねえか？　なんか疲れ過ぎて、飯食う気にもなれねえし」

時刻的に恐らく夕食を取るべき時間なのだろうが、今すぐは流石に無理だ。

「そうね。報酬を貰うのも明日にして……今日はもう休みましょ」

「それがいい」

これ以上、歩きたくない。トータルでフルマラソン並の距離を歩

いたんだから、もう暫くの間寝て過ごしたい。フカフカなベッドで数回トランポリンした後に、ぐっすり眠りたい……って、ちょっと待てよ。

「な、なあ、アリス？」

「……どうしたの？」

疲れ切った顔でアリスが返してくる。

「い、いや……よく考えたらさ」

……自分の置かれた状況を今一度確認してみよう。

現在地はブエノリアの首都、パキシアの周囲に展開する街、アフリス。

この街がどういう地理をしているのかも全く分からず、日本円だって使えない。だが一応ギルドに所属したので、仕事さえあれば路頭に迷う事は無くなるだろう。どこか適当な所に部屋を借りたりできるだろうし、この世界で生活の基盤を作ることだってできる筈だ。

では……今日は？

「俺、今夜どこに泊まればいいんだ？」

所持金ゼロ。宿なし。状況最悪。この状況を打開するのはどうすればいい？

「そ、そうだ。とりあえずもう報酬貰いに行こう。んで、そこから俺の宿泊費って捻出できねえかな……？」

「なに言ってんのよアンタは……」
アリスが呆れたようにため息を付く。アレか？　給料日は月末だから今は払えません的な感じか？
しかし、俺の予想は大きく外れた。
「ウチに来ればいいじゃない。部屋だって余ってるし、第一何も知らない裕也を一人で放りだせないでしょ？」
「え……いいのか？」
「駄目な理由なんて無いでしょ？」
いや……あるだろ。
異性だぞ？　異性家に泊めるんだぞ？　それはそういう間柄でなければあまり良いとは言えないんじゃないか？
「じゃ、行きましょ。ここから結構近いから」
「なあ、もう一度確認させてくれ」
俺は歩きだしたアリスを呼びとめ、もう一度確認する。
「本当に……良いんだな？」
「なによもう。良いって言ってるでしょ？」
そう言って再び歩き出したアリスに、俺は置いてかれない様に付いていく。

……何考えてるんだよコイツは。
家に上げてくれるというのは、それだけ俺が信用されているという事か……それともコイツがフレンドリーなのか、ただ単に何も考えていない馬鹿なのか。
それは分からないけど……今は素直に感謝しておこう。
こうして俺は本日の寝どこを確保し……そうして初めて、女の子の家に泊まる事になったのだ。

03　異世界の科学と魔術

「……落ち着かねえ」

　約十分程歩いた末に辿りついたアリスの家は、周囲の家より一回り程小さい家だった。だがそれでも一人で暮らすには十分な広さで、アリスの言う通り、使われてない部屋が一つ位あっても可笑しく無いなという感じだった。

　そんなアリスの家へとやってきた俺だったが、やはりまあ、落ち着かなかった。木製テーブルに向かい合い、椅子に座ってコーヒーを呑むというリラックススタイルであるにも関わらず、落ち着かない。やはり男友達の家へ行くのとは訳が違う。

「落ち着かないって……内装的な意味で？」

「そうじゃねえよ。別にお前の部屋、人を落ち着かせなくする程個性的じゃないし」

　というか普通すぎる。異世界人の俺から言わせても断言できる。例えるならばＲＰＧで村や街に入った時の、物語の進行的に一切立ち寄る必要性の無い民家みたいな感じだ。もっとも、ゲームで良く見られる様なワンフロアではなく、しっかりとした木造二階建住宅ではあるが。

「まあ、アレだ……察してくれよ」

　まさか女の子の家だから緊張するとは言えまい。それは結構恥ずかしい。

「察しろって言われても……いや、まあ自分の家以外の空間って、結構落ち着かないわよね」

「じゃあそういう事にしといてくれ」

俺は適当にこの話題を流す事にした。これ以上この話題に留まっていると、いずれボロが出てきそうだ。

「じゃあそういう事にしておくからさ……さっきのスマフォって奴触らせて？」

「またかよ……まあいいけどさ」

俺はポケットからスマフォを取り出し、アリスに手渡した。

充電、三十四パーセント。スマフォは何もしてなくても結構バッテリー喰うし、おそらくこの世界には充電方法なんてのは無いだろう。ここで貸そうが貸すまいが、余命が少し変わるだけだ。だから別にいい。

「しっかし……この世界の科学力は、地球でいうと何時位のレベルなんだろうな」

俺は天井から下げられている丸い物と、それを覆う紙風船の様な物に視線を向ける。

電球である。

地球においてエジソンが白熱電球を発明したのは、確か千八百年後半だったと思う。そんな電球がこうした家の内容や、街の街灯として使われているのを見る限り、この世界の科学力はその辺りなのだろうか。

まあ此処は地球じゃない。たとえ中世ヨーロッパの様な世界でも、科学力が中世ヨーロッパでなければいけないという決まりは無いんだ。だからスマフォや携帯の様な高度な電子機器はなくても、いずれはそれに発展するであろう何かしらの基盤が、既に出来上がっているかもしれないし、そもそも地球以上の科学力を築いている分野もあるのかもしれない。

だけども……だとしてもだ。俺の視界の先にある、世界観無視の異様な存在は、ピンポイントで発展し過ぎだと思う。

「ところでさ、アリス」

「ん？　どうしたの？　私コレ触るのに忙しいんだけど」

「……お前地球来たら、絶対暇とかしなさそうだよな」

俺はジト目でそう返す。

だがしかし、一応聞いてはくれる様で、画面から視線をこちらに向けてくれた。

そんなアリスに、俺は異様な存在の事を聞く。

「で、えーっとさ……キッチンのアレ何？」

いや、そう聞いたものの、俺はあの存在を知っている。

冷蔵庫……ＲＥＩＺＯＵＫＯである。

いや、それ自体は別に可笑しくは無い。何しろ以前雑学本で読んだ事だが、冷蔵庫が出来たのは千八百年前半。一応先の電球が歴史に登場し始める以前から存在していた代物なのだ。

だがしかし、その時代の冷蔵庫は厳密には冷蔵庫ではない。あの時代のは冷蔵箱だ。使い型も、電気を使用するのではなく氷を入れて使用する。そして俺の視界のさっきにあるのは冷蔵箱ではなく、まぎれも無い冷蔵庫だ。

まあ電気が通っている事から、可能性はゼロじゃないんだろうけども……アレ、外観が日本で店頭販売されてそうなレベルである。凄い電気代を節約できそうなエコ使用な気がする。

いくらなんでも、こんなスマフォも、挙句の果てには自動ドアも存在しない様な世界に、最新式、もしくはそれ以上の冷蔵庫が存在するのはおかしいと俺は思う。

多分、冷蔵庫っぽい何か……だよな？

「何って……冷蔵庫よ」

冷蔵庫だったよ……名称まで完全に冷蔵庫だったよ。

いや、名称にかんしてはある程度都合よく翻訳されているっていう可能性はあるだろうけども……だとしても、目の前の存在が冷蔵庫である事に変わりは無い。

「えーっと、ソレ、マジなのか？」

「マジだけど、それがどうかした？」

どうかも何もないだろうよ。

「……マジでこの世界の科学力ってどうなってんだ。電気で動く冷蔵庫があるんだったら、実はパソコンとかもあったりすんじゃねえのか……」

俺が驚きのあまり呟くようにそう言うと……アリスは違う違うと否定する。

「アレ、別に電気で動いて無いわよ」

「え、じゃあ何で動いて……まさかあのデザインで、氷を中に入れる旧式タイプか？」

「いや、旧式とか知らないけど、アレそのものが魔術じゃない」

「……は？」

アリスは軽くそう言うが、正直何を言っているのか分からなかった。

「アリス、つまりそれはどういう……」

「え、分からなかった？　だから、冷蔵庫の存在そのものが魔術って事……ってこれじゃあさっきと同じかな」

アリスがどう説明したらいいかと軽く唸っているが……アリスが何を言いたいのかは、もうちゃんと理解した。

理解できないのは……何故そんな事が出来ているのかという事だ。

俺は一応アリスの瞳の色を確認する……やはり、赤には染まっていない。

だとすると可笑しいのだ。だからこそ理解できないのだ。

魔術で物体を作る事はできる……だけど、それはあくまで一時的な物に過ぎない。

剣を出現させる魔術は、術を解けば剣は消える。術を解いて尚、形成した物が残っているなんて事はあり得ない。

故にトラップとして利用する様な術式も、術者が常時魔術を発動させている事が設置の条件となってくる。つまりは、魔術で冷蔵庫を再現しようとしたとした場合、常時魔術を発動させて、冷蔵庫の形状、効果を持続させなければならないという事になるのだ。

だがしかし、アリスの瞳の色は変わっていない。そして外部の人間が形成しいている可能性についていては、そもそも二十四時間稼働する事が前提の冷蔵庫を半永久的に維持していくのは不可能だ。そんな事をしたら術者が過労で死んでしまうし、仮に一人で維持できる魔術師が存在したとしても、この冷蔵庫が一般家庭に流通されているとして、その維持を外部にまかせるとすれば、絶対的に魔術師の数が足りなくなる。故にその可能性は極めて薄い。

魔術で物を作るという事がそれほどまでに困難であるから、地球で魔術を用いた自動ドアなんてのは殆ど無いのだ。あったとしても、金持ちの道楽で、雇われの魔術師が後退交代で形成する程度の物。故に俺の住んでいた所に、あの塔の様な扉は存在しない。

「って事は……ちょっと待て」

俺は思わず額に手を当て、思考を巡らせた。
今まで気にせず自然とスルーしていた事が、目の前の冷蔵庫について真剣に考え始めた事によって、疑問と確信として展開される。

アリス曰く、あの塔はもう使われていないらしい。だとすれば、あんな自動ドアは存在する筈が無いのだ。
そこを人が通る必要が無いから。通る必要が無い故に、そのドア

を維持する魔術師は必要無いから。
だけども、あのドアは確かに存在していた。触れただけで開き、出入りの後に閉まるというシステムは確かに維持されていた。
それはつまり、あの扉は魔術師の手無しで維持されていたという事になる。

そして目の前の冷蔵庫。住人以外の手では維持していく事ができないその存在。そして今現在魔術を使っていない住人の存在。
これらから導き出される、全ての疑問への解はこうなる。

「まさかこの世界の魔術と俺達の世界の魔術じゃ……なにかズレがあるのか？」

いや、ズレとか、そういう事じゃ無い。

間違いなく……これは発達だ。
例えば、地球の科学がこの世界よりも圧倒的に進んでいる様に……この世界では魔術という技術が地球の物より洗練された……進化した物なのではないだろうか。

そうだとすれば、合点がいく。仮にネックとなっている維持の問題を克服できれば、充分に自動ドアも冷蔵庫も魔術で作成可能なのだ。

「だとしたら……とんでもない事だぞ、オイ……」

「ちょっと。一人で何ブツブツ言ってんのよ」

アリスが不満そうな声を上げるが……それは無理な話だ。

それほどまでに……その事実が与える衝撃は大きい物なのだから。

◆◇◆

それから三時間程立った。

風呂を借りた後、俺は使われていない一室に来客用の布団を引いてもらい、横になっていた。
本来ならば、女の子が使っている風呂に入った事に寄る、ちょっとした興奮があっても良いだろうが……やはり魔術に対するカルチャーショックが俺の脳内を埋め尽くして、それ所ではなくなっていた。

あの後アリスとの会話の中で、俺が立てた憶測は真実だった事が判明した。

この世界の魔術は、地球の魔術より一歩……いや、二歩程進んでいる。
地球では成し得ない術式の自立化に成功している……完全なる上位互換。
それが、地球より科学技術が劣っているこの世界に存在する魔術だった。
そしてその事実が俺に与える、忘れていたもう一つの疑問に対する真実。

「死んだ佐原の爺さんは……一体何者なんだ」

あの時は切羽詰まっていて考えられなかったが……良く考えると佐原の言っていた事は無茶苦茶だった。
封印の様な扱いになっていた魔道書の封印が、爺さんが死んだ時に解かれた。

基本的に封印などを行う方法は、地球で魔術によって自動ドアを作る様な事と同じ。複数人の魔術師が交代交代に封印を維持していくのだ。
そのシステムであるが故に……仮に一人が倒れたとしても、別の誰かが引き継げる様になっている。当然、封印する必要性のある物なのだから、他者が探して触れられる様なタイムラグが生まれるようにはなっていない。

だけど佐原の爺さんが死んで、佐原は結界が解かれた魔道書を手に取るに至った。それは、佐原が爺さんが死んだ瞬間に魔道書を手に取るという奇跡に等しい事が起き無かった場合、結界が引き継がれなかったという事になる。

つまり引き継ぐ魔術師がいない……交代要員がいなかったという事になる。
そして……それは即ち、その爺さんが一人で封印を管理していたという事になるのだ。
だがしかし、現状、地球の技術でそれは不可能。となると答えは一つに絞られる。

「この世界の魔術の事を……知ってたのか？」

そしてこの世界の魔術を知った人間の元に、この世界へと渡る魔道書があった。
つまり……佐原の爺さんはこっちの世界に来た事があったという

事なのか？
それで、何かが原因であの魔道書を封印するに至った。そういう事になるのか？

「……まあそれは俺が考えても仕方が無い事か」

というよりも……考えない様にした。
この事がもし本当だとすれば、一つ確定する事実がある。
それはあの魔道書の効力が、何処かに飛ばすではなく、確実にこの世界へ渡るための転移術式であるという事。
稀ではあるが、何処かしらに対象を飛ばすなんていう無茶苦茶な術式も存在するのだ。まあ稀ではあるため、そこに飛ばされたらそこに飛ばす術式なんだと考えるのが常識。そして佐原の爺さんの事が確定してしまえば、その常識以外はほぼ起こり得ないという事になる。

そこから導き出される事は……あの魔道書の中身をしる者であるならば、この世界へ渡る事ができるという事実。

「それは無い……よな」

佐原の性格からして、そんな異様な物をなりふり構わず教えたりしない。自分だけが使える物として、自分だけが知る知識として保有する筈だ。

そしてその佐原は、あの魔術の詳細を知らない。佐原から見れば、俺は消えた事になる。その上封印なんて事が成されていた代物だ。
何も知らない人間からすれば、人間一人を消滅させる魔術といった方向性を連想してもおかしく無い訳だ。

そして、そういう可能性が孕んでいる、何が起きるかまるで分からない物を、これ以上誰かに……ましてや自分に使うとは思えない。カツアゲとかそういう次元では無く、結果的に誰かを自らの手で殺してしまったかもしれないという可能性。そんな物を抱いた状態で、使える訳が無い。

まあ封印されていて、本当に何が起こるか分からない様な代物を俺に振るった時点で考えなしの馬鹿野郎だという事は分かるが……何が起こるか視覚的に分かった以上、アイツは多分一線を超えない。普通の神経をしていれば……越えられる訳が無い。

「……越えられる訳が無いんだ」

俺は最後にそう呟いて、もうこの事は考えまいと目を瞑った。

０３　異世界の科学と魔術（後書き）

大変遅くなりました。すみません。
そろそろ世界観説明を終えて、ギルド活動したいですね。

０４　異世界の食文化

「おはよう。昨日は眠れた？」

朝、部屋を出て件の冷蔵庫の姿を一望できるリビングへと足を運ぶと、俺よりも先に目が覚めたらしいアリスがコーヒーを呑みながらそう尋ねてきた。

「ああ、よく眠れた」

昨日。色々考える事があった所為で眠れないんじゃないかと危惧した訳だけど、実際何も考えず目を瞑ると、以外にあっさりと眠りに付く事ができた。どうやら相当疲れが溜まってたらしい。主にドラゴン戦ではなく、此処に辿りつくまでの移動でのな。

まあなにはともあれ、その疲労も眠ればある程度回復できた。若いって凄い。

「裕也もコーヒー呑む？」

「ああ、頼めるか」

俺はそう言って椅子に腰かける。

基本、俺の朝はコーヒーから始まると言っても過言ではない。コーヒー片手にニュースを見る。これだけ聞くとなんとなくインテリっぽい気がしないでもないが、基本朝のニュースってのは、バラエティー色が強かったりもする訳で、そう考えるとインテリもクソも無い。

「砂糖は？」

「どっちでもいいよ、お任せで。俺はブラックからＭＡＸコーヒーまでオールジャンルを網羅してるから、何が来たって大丈夫だ」

朝呑むコーヒーの内、週に一回は買い貯めたＭＡＸコーヒーな訳だから、本当にインテリもクソもない。いや、ＭＡＸコーヒーを馬鹿にする訳じゃないけど。寧ろ大好きだけど。

まあＭＡＸコーヒーは別にいいとして……やっぱり朝起きて、テレビの音を聞かないというのは新鮮な気分になる。

なんというか……改めて、此処が自分の居た世界ではないんだという事を再認識させられる。

そういえば……こうして一晩こちらの世界で過ごしたわけだけど、地球は今どうなっているのだろう。

時期が夏休みであったなら、一日二日消えた所である程度誤魔化しは聞くだろうけど、平日の、しかも週半ばの水曜日。つまりは今日も本来ならば、俺は高校に通っている筈なのである。

なのに家に帰っていない。そしてそれについての連絡も無し。即ち俺は行方不明の様な状況下に置かれているのだろう。

……よく考えれば、そんな状況下を作り出した佐原は、どうなるんだろうか。

俺はあの場にカツアゲを止めに入ったんだ。つまり俺があの時点であの場に居た事を、佐原と、そのカツアゲの被害者は知っている。いずれ警察が捜査を開始した際、この二人は参考人にでもなるのではないだろうか。

ただ、その被害者は事が起きた時点で既に俺が逃がしていたし、佐原も口を割るとは思えない。

そして……多分実況見分なんかしても、何も事は前に進まないだ

ろう。
　何しろ証拠が残っていない。あの場に出現した魔法陣は術式を解いた時点で消滅しているし、魔術によって生じた視覚的効果もまた、俺が消滅するという無に等しい物だ。それに加えて、魔術にはある程度射程距離が定められている事もあって、あの場にいなかった人間でも犯行が可能になる。
　そういった様々な事が重なって、きっと佐原が俺を異世界に飛ばしたなんて答えに辿りつ事は難しいと思える。

　そして俺が何処にいるかなんて事も、また迷宮入りとなってしまうだろう。
　最後にあの場で目撃情報があったのだから、転移術式が使われたと仮定して、何処へ飛んだかを調べる調査が行われる事だろう。その場に魔術の痕跡事態は残らなくても、その周辺を転移術式などから生じる魔術的な何かが蠢いていた事自体は分かるはずだ。それを辿れば答えは導き出せる……が。

　だがそうして行われる調査で、はたして異世界が導き出されるだろうか？
　糸を辿れば、最終的に何処かで切れてしまっている。そうなるのではないだろうか？

　仮にこの場所を導き出したとして、異世界なんて馬鹿げた存在は、そう簡単に立証されやしない。常識的に考えて、それはただのミスとして処理され、やがて糸は自然消滅し、迷宮入り事件の完成だ。
　まあ俺は警察じゃない。こういった調査の事は一般人が知り得る程度の事しか知らない訳で、実際は穴だらけな考えなのかもしれない。警察は俺が思っているより遥かに有能で、事の全てを速攻で把握してしまうのかもしれない。

だけども、結局全てはこの簡潔な二つの文だけで否定する事が出来る。
今まで何をやっても警察沙汰になっていない佐原は、なんとなくではあるが今回も何事も無く普段の日常に戻って行くのだろうという憶測。
そしてもう一つは……やはり異世界なんて非常識な存在が絡んでいる以上、どう転んでも進展する事はないだろうという、俺のカンだ。
だからきっと俺が消えた原因は不明のままだろう。ただ一人の男を除いて、誰も真相を知る者はいない。その男が何かしらのアクションを起こすまでは、俺が消えたという事態に何か進展が起きる事は無い。これが最終的な俺の結論、もといカンだ。
「難しい顔して、何考えてんの？」
マグカップを手に、アリスはテーブルにコーヒーを置いた……ブラックだ。
「まあ、たいした事じゃねえよ」
実際には全然大した事なくはないのだが、昨日の夜に考えた事と同じ様に、今の俺には関係の無い事なのだ。
こちらの世界に居る以上あっちの問題には関渉できない訳だし、俺が失踪に関して何か考える事があるとすれば、親父や母さんが心配してるだろうなという事と、高校の出席日数大丈夫かなとか、その程度の事だ。いや、どっちも重要なんだけど。特に後者は真剣に

ヤバい気がするんだけど。
まあとにかく……今考えなければならない事は、この異世界での事なんだ。
「そんな事より、昨日のドラゴンの報酬。今日貰いに行くのか？」
俺はややこしい事に思考能力を裂く事は止め、今日の事に回す事にした。現状、それが一番だろう。
「そうね。昨日は疲れたから止めにしたけれど、これ以上先延ばしにする必要も無いからね。とりあえず昼前に行くって連絡はしておくわ」
どうやらこの世界。電話はしっかりとある様である。
といっても地球の様に洗練された物ではなく、最初期の様な代物だ。まさか歴史博物館みたいな所以外でみる事になるとは思わなかったけど、それは今、リビングの一角に置かれている。
まあコレに関しては冷蔵庫程の違和感がなかった。形状が最初期の物だったのもあるだろうけど、やはりファンタジー漫画でも電話は結構出て来るってのもあるのかもしれない。
俺がそう考えてると、アリスはさて、と声を上げて俺に尋ねる。
「ところで今から朝食取ろうと思うんだけど、裕也も食べるでしょ？」
「あああ、頼めるか？」
というより、出ないと困ります。無一文だし……昨日から何も食

べてないから超腹減ってるし。
……っと、飯といえば気になる事が一つ。
「ちなみに、この世界の主食っていうと何になるんだ？」
今でこそパン食が流通しほぼ米とパンの二分化となっている日本だけど、それでも日本の主食は何かと聞かれれば米となるだろう。同じ様に、主食というのは地域によって変わってくる物だ。
この世界……そしてこの国、ブエノリアでの朝食は、一体何になるのだろうか？
アリスはそんな俺の疑問に、迷うことなく答えた。
「主食と言ったらパンになるわね」
「なんとなく予想通りだな。ちなみに米ってこの世界にある？」
「……聞いた事位なら」
「そのレベルか……」
コレはアレだ……近代文明の恩恵を得られないとかそういった悩みよりも、米を食べられないってのが日本人的に一番辛いんじゃないか？
まあ米自体はあるみたいだから……暇な時に、食べられる場所でも探すとしよう。
「じゃ、適当に作ってくるからちょっと待ってて」
「おう」

そう言ってアリスはキッチンに消えて行く。
いや、まあ朝食レベルで壮大な調理ってのは無いかもしれないけど、昨日のドラゴンの剥ぎとりとかを見てる限り、アリスが料理ってのはやや危険な香りが漂って――

「うわ、あっぶなぁ……危うく死ぬ所だった」

死ぬ！？　朝食作りで死ぬ！？

「気を付けないと、今月入って三度目は流石にヤバいわね」

「いやいやいや、ちょっと待とうかアリスさん！？」

俺は椅子から勢いよく立ち上がった。
一体コイツはこれまでどうやって生きてきたんだ……。
まあなんというか……俺が一人暮らしを始めた後も頻繁に料理を作りに来ないと、コイツは死ぬかもしれない。飢え的な意味では無く物理……いや、切断で。
俺は慌ててキッチンに掛け込み、アリスに心の声をそのままぶつける。

「アリス、もはや状況は手に取る様に分かった。とりあえず俺に変われ」

「だ、大丈夫よ。野菜切るだけだから。確かに今月死に掛けたのは三回目だけど、普段は月に一回程度だし、五回中三回程は怪我無しで料理を終えられるわ」

「全く大丈夫な要素が見当たらねえ！」

これは頻繁どころじゃなく、毎回だな。意地でも毎回だ。
俺は軽くため息を付いて、アリスから包丁を奪い取った。

０４　異世界の食文化（後書き）

なんとなく脱線している気がしますが、とりあえず必要な情報だったので、今回の話を挟みました。次回からはサクサク進める＆早めに更新します。

０５　ある筈のない存在

危なっかしい朝食を終えた俺達は、ドラゴン討伐の報酬を受け取る為に街中のカフェにやってきていた。
まあ報酬を受け取りにと言っても、受け取り時刻は昼前。朝に家を出たのだから、随分と時間が余ってしまう訳で、つい先程までアリスの案内でこの街の市場などの施設の案内を受けていた。なので到着は二十分程前という事になる。

アリスの案内のおかげで、あとはお金さえ手に入ればある程度の生活はしていけそうである……と言いたいけれど、コンビニもなければ自販機すら無い訳で、早々と馴染めるかどうか不安が残る。
……まあ俺の不安はさておき。

「……そういや、お前にドラゴンの討伐を依頼した依頼主ってどんな人なんだ？」

どうせもう暫くすれば分かる事だが、依頼主が来るまでの時間をただ何もせず待っているというのも暇である。話せる話題があるのなら出しておく。

「そうね……怪しさ満点で何考えてんのかよく分からないけど、いい人とでも言っておこうかしら」

「それ本当にいい人なのかよ……」

「そりゃいい人よ。色々と世話になったしね。たとえば……ギルドの設立とかの時に、結構力を貸してくれたわ」

「力を貸してもらったって事は、元からの知り合いか？」
「ううん。そうじゃないの。始めて会ってからギルド設立まで大体二日ぐらいね。だからどうして私に力を貸してくれたのかも分からないし、だからこそ怪しいけどいい人なのよ」
「……確かに、怪しいけどいい人って評価が妥当か」
……だけど俺からすれば、あまりその依頼主の印象は良く無いと言わざるを得ない。
その依頼主が、ギルドの設立の立役者なのだとすれば、その内情だって把握している筈だ。
……そんな奴が、アリスをたった一人であの場に向かわせるか？
仮にアリスの実力があのドラゴンの討伐を依頼するに値する……即ち及第点に達していたとしても、それでも一人では不足の事態に陥った際にどうしようもできなくなる。素人の俺がとやかく言える様な話じゃねえかも知れねえけども、どう考えたって二人以上でやるのがセオリーな筈だ。一人でやる仕事じゃない。
実際あの時、俺があの場に現れなければアリスは間違いなく死んでいた。後一歩遅かったら、本当に取り返しがつかなくなる所だったんだ。
だからアリスにあのドラゴンの討伐を依頼するなんて事は……ギルドの内情を知る物が取る行動にしては、あまりに軽率だ。
アリスはこの依頼の事を、名を挙げる為にやったという風な事を言っていた。そう考えると、ギルドの内面を知っている人間からすれば、助け舟のつもりだったのかもしれないけれど……それでも、

結果がアレじゃ良い印象なんて持てる訳が無いのだ。

「そう、妥当よ妥当」

でもまあ、当のアリスがそう言っているのだったら、きっと俺はとやかく口を挟むべきではないだろう。俺はアリスから聞いた話を纏めた上での印象を持っているだけで、それ以外にその依頼主の事は知らない。だから変に俺がその依頼主に何かを言って、関係を悪くするのは愚策だ。

第一、その時の依頼主が軽率だったとしても……アリスが世話になった相手だという事は間違いないのだから。

だから……もし、何かあった時だけ仲裁に入ればいい。それまで全部アリスに任せれば、それでいいんだ。

「……で、もう昼前……だよな？」

俺は気持ちを切り替える為に、何気なく見た時計を見てそう呟く。十一時五十五分。文字通り昼前だけど……果たして本当にそろそろ来るのだろうか。

俺は昼前としか聞かされていない訳で……俺的には昼前なこの時間も、相手からすれば昼前なのかコレ。

「なぁ、アリス。なんでこんなアバウトな時間なんだよ。もっと細かな時間指定とかできなかったのか？」

俺がそう尋ねると、アリスはゆっくりと視線を逸らして答える。

「良く考えたら、こういう連絡ってのって前日の内に連絡しないと駄目なのよね。あっちも都合があるし。で、それを忘れてたから、

朝目が覚めてすぐに慌てて電話して……半分寝ぼけてたから、昼前なんて曖昧なニュアンスで伝えちゃって……」

……何やってるんだよ。

「……ていうかそれ、依頼主の方には何も突っ込まれなかったのか？　えーっと、昼前って何時？　みたいな」

「うーん。私の記憶が正しければ聞かれてないわ。ずっと、ふぁい、ふぁい、わふぁりまひたって感じの事しか返ってこなかったと思う」

「それ寝ぼけてる！　アチラさん思いっきり寝ぼけてる！」

それ本当に此処に来るのかオイ！

「と、というかアリス。お前、俺が起きてきた時には普通に目、覚めてたよな？　家出るまで結構時間あったんだから、なんで掛け直さなかったんだよ」

「いや、そのミスに気付いたのが、二十分程前でして……」

「此処に入った時か……」

アバウトなのを思い出して、慌てて此処に入ったと。
……本当に大丈夫かよウチのリーダー。
いや、朝の時点でおかしいと気付けなかった俺も俺だけど……大丈夫なのかコレ。
俺が軽くため息を付くと、直後、入口の扉が開いた事を知らせるカランコロンという音がなり、俺達はそちらに視線を向ける。

「あ、来た。良かったぁ」

どうやら今入って来たのが依頼主らしい。アリスは安堵の声を漏らし、胸をなで下ろす。

だが、俺がその依頼主を確認した事によって生れたのは、決して安堵なんて優しい物じゃない。

……一言で言えば困惑だ。

「す、済みません。お待たせしました」

こちらのテーブルに歩み寄って来た依頼主は、地球でいうと中一位の女の子だった。黒髪ストレートで、和服とかを着せたら凄く似合いそうな感じ。

否……似合っていたのだ。

淡い水色に花柄という模様をしたソレは、日本ですらテレビ以外であまり目にする事の無い様な代物。俺が今来ている学生服の夏服は、カッターシャツみたいなもんだしこの世界でも普通に着られているとは思うけど、ソレだけは絶対に浮いていると確信が持てる。今、目の前に存在する事自体がおかしい事だと理解できる。

そんな物を……着物を。目の前の少女は着ていたんだ。

06　その地を知る者

意味が分からなかった。

いや、もしかするとこの世界にもそういった風習があるのかもしれないけれど、それでも中世ヨーロッパ的な風景しか見ていない俺からすれば、完全にその光景は異質だ。

「ううん。全面的にこっちが悪かったわ。ごめんなさい」

「いえいえ、私も適当な受け答えをしてしまい、大変申し訳ございませんでした」

軽く頭を下げる少女に何か言う訳でもなく、俺はただ付きまとう違和感をそのままに少女を眺めていた。実際、何を口にすればいいのか分からなかった。

「えーっと、こちらの方は？」

着物を着た少女は、俺の方に視線を向けつつ、アリスにそう尋ねた。

するとアリスは俺の脇を肘で突きながら言う。

「ほら、自己紹介しときなさいよ」

まあ確かにこのまま黙っていた所で、俺の理解が深まる訳じゃない。だから考えるより先に、やるべき事からやっておいた方が良いだろう。

「えーっと、俺は浅野裕也。昨日アリスのギルドに入った新入りだ。

よろしく」
他に言っておく事もないので、こんなもんで良いだろう。
まさか初対面の相手に、俺は異世界から来たなんて言えないだろう。引かれそうだし……って、アリスには言ったのか。
まあそれはそれでいいとして……俺の自己紹介を聞いた着物少女は、俺に言葉を返さず、何故か凄く優しい笑顔を浮かべてアリスの手を握っていた。
「良かったですね」
「え、あ……うん」
アリスは小さな声でそう言って、ゆっくりと頷く。
良かった……っていうのは、ギルドに人が入ったからという事だろうか。設立に携わった者なら、今までの状態を知っている訳だし、アリス以外誰も居ないという状況を心配してくれていたんだろう。
そう考えると……あまり良く無かった印象が少しずつ良くなってくる。
やっぱり人間ってのは、直前に見た事に影響されやすいのだろうか。印象悪いだの良くなっただの、我ながら意見がコロコロ変わりすぎている。
この分だと、軽率だったとはいえ、仕事を依頼したのは助け舟のつもりだったんだろうな。きっとそうだ。
俺がそう考えていると、少女は俺の方に向き直り、笑顔を見せる。
「アリスさんの事、よろしくお願いします」

まあこういう笑顔を見てると、それは間違いないと確信できる。

「ああ、任せとけよ」

そう言われたらこう返さざるを得ないし、そもそも最初からそのつもりだ。

今の所唯一の仲間なんだから……そりゃ頑張ってやってやるさ。

「えーっと、ところで……お前の名前は？」

俺だけが名乗って、まだ目の前の着物少女の名前を聞いていなかったので、とりあえず尋ねる事にした。

「私はリアと申します。えーっと、今回の依頼主の部下とでも考えていただいて結構です」

「ああ、そう……って、部下？」

えーっと……この子が依頼主じゃないのか？

恐らく漫画だったら頭上にハテナマークなんかを浮かべているであろう俺に、アリスは言う。

「別に、依頼主本人が来るとは言ってないでしょ」

まあ確かにそうだ。アリスは依頼主に連絡するとは言っても、依頼主本人が来るとは一言も言ってない……、

「お前、多分だけど素で言い忘れてただろ」

「……」

アリスは墓穴を掘ったと言わんばかりに黙りこむ。なぁ、本当に大丈夫かウチのリーダー。

「……で、依頼主本人はどうしたんだ？　こういうのって来ないのが普通なのか？」

あくまで依頼主ってのが会社の社長みたいなもんで、業務内容で部下がきているみたいな感じだったら、今の様にこのリアって子だけが来ている形で間違いないんだろうけど……どうなんなんだろうか。

「本来ならししょー……あ、いえ、アルドさんも一緒に来る筈だったのですが……急用ができたらしく、アリスさんが出発する少し前から出はからっているんです。ですので今日は私だけという事に」

「あ、ああ。そうか。大体理解した」

そのアルドっていう人が依頼主で、今日この場に居ないのは急用で戻ってきていないから。

そしてアルドって人の略称がししょーだと言う事。

やべぇ、基本的に落ち着いた喋り方してたのに、ししょーの所だけ間の抜けた感じで、思わず笑いそうになったじゃねぇか。

「アンタ、なにニヤけてんのよ」

笑いそうというか、笑っていたらしい。というかお前も笑い堪えてんの丸わかりだぞアリス。

「あの、お二人共、あまり笑わないでください。外に出るとき以外、

そう呼んでるので、偶に思わず言ってしまうんですよ」
　やや墓穴を掘っている発言を聞いて浮かんだのは、そのアルドとか言う人に、「ししょー、ししょー」と声を掛けるリア。やべえ、想像したら笑いそうになって来た！
「そっか。前にアルドさんと居た時は普通に名前で呼んでたから、普段からそうだと思ってたけど、ししょー……ししょー……ッ」
　アカン。アリス完全にツボ入ってる。いや、分かるよ、ししょーの発音から何まで、物凄くパーフェクトに笑わせて来るもん……ついさっきスマフォ電源が尽きてしまった事が惜しまれるッ！
「……あんまり笑うと私だって怒りますよ？　ししょー直伝の戦闘術をつかっちゃいますよ？」
「わ、分かった。分かったから追い打ちを掛けるな！」
　こんなどうでもいい事で相当深いツボにハマり、しばらく笑っていた俺達だったが、やがて割と真剣にリアが涙目になってきたので、二人で御免なさいして許してもらった。
　とりあえず、もう笑わない。それはリアが自爆しない限り有効だ。……で、一度笑いの渦が鎮火してしまった所で、リアが懐から封筒を取り出した。
　中に入っているのは……お札である。
「とりあえずアリスさん。コレ、今回の報酬です。受け取ってください」

話が脱線していたが、とりあえず今回の目的はコレだ。

「ありがと……って、結構入ってるわね」

果たしてそれ一枚に、日本円にして一体いくら程の価値があるのかは分からないけども、仮に一万円と同等の価値だとすれば、三十万円程入っているのではないだろうか。

「裕也。コレ終わったらご飯食べに行きましょ？」

「お、おう……」

アリスさん、目が輝いてらっしゃる……。

そんな事を思いつつ、俺は報酬受け取りで話が一段落したと判断し、リアに聞きたい事を尋ねる事にした。

むしろ俺にとっては、報酬受け取りよりも本題と言っても過言ではない問いだ。

「なぁ、リア。その服ってどうしたんだ？」

「どうしたといいますと？」

「いや、明らかにこの辺りで着られている様な服じゃねえだろ？」

「そうですね。この辺り……というより、私がし居る限り、この『キモノ』という服装を着ている国や地域というのは聞いた事がありません」

やっぱり……この世界で浮いている存在なんだ。

だとしたら、必然的に俺の疑問はこうなる。

「それじゃぁ、その服は何処で手に入れたんだ？」

何処にも着ている国は無い……即ち売っていない。だとしたら一体どういう経路からリアの元までやってきた？

その問いに、全く躊躇う様子もなくリアは言う。

「何着か持っていますが、全部ししょー作です」

再び間の抜けた単語が出て来るが、今度は笑いは込みあげてこなかった。

「なぁ、リア」

笑う事より、優先すべき事がある。

「そのししょー……いや、アルドって人は、一体何者なんだ？」

流通していない様な着物を作り、尚且つ名前まで日本にあるソレと統一されている。いや、名前に関しては、この世界に来た時から常時起きている翻訳の所為かもしれないが……それでも、ここまで日本の着物と言っていい物を、この全く文明が違うこの世界で作る事が可能なのだろうか？

きっと、少なくとも一度は現物を見ないと作れない代物だ。それを作ってしまうアルドは一体何者なのだろうか。

俺の問いにリアは答える。

「情報屋です」

「情報屋……」

確かにそれだけを聞けば、色々な事を知っていそうだ。

この世界の魔術は、確かに地球のソレよりも発展している。それ故にもしかすると地球の事を知る術があるのかもしれない。

現に地球でも、佐原の爺さんが封印していた魔道書を要いれば、この世界に渡る事は可能だった。同じ様にこの世界にも、異世界へ渡る術があったっておかしくは無いのだ。

だけどあってもおかしく無いというだけで、おそらくそれは無いんじゃないかとも思う。

仮にそういう魔術があったとして、それにしてはこの世界への影響が少なすぎる。

地球の情報を得る事が出来たのなら、きっと科学技術などがもう少し発展していてもおかしく無いんじゃないか？　当然、そのアルドって人だけがその魔術を使えて、それで得た情報を周囲に売ったりしていないってだけかもしれないけれど、こうして着物という異郷の文化を大っぴらに持ち出されているのだから、そういった科学技術やそれに関する製品などを大っぴらに公開していないのは、なんとなく違和感がある。

そういう魔術がこの世界にあっても違和感が残り、無かったとしても着物の存在理由が分からない。

だけどコレを聞けば、少なくともどちらか片方に可能性を絞る事は可能だろう。

俺は思い切ってリアに尋ねる。

「なあ、一つ質問いいか？」

「ええ、どうぞ」

俺はそれを聞いて、一拍開けてからリアに問う。

「地球。日本。この単語に聞き覚えとかねえか？」

本来ならば、こういう質問は、着物を作ったとされるアルドに聞くべきなのだろう。リアが知らないと言っても、アルドは知っているかもしれない訳だから、場合によってはややこしい事になるかもしれない。

だけど仮に聞き覚えがあると答えれば、一つの事実がほぼ確定する事になる。

「……どこでその言葉をお知りに？」

確定だ。

足を運んだ事があるかどうかは不明だ。何かしらの方法で地球を覗いただけかもしれない。どちらにしろ、地球から来た俺が知っていた方が良いであろう情報をアルドは知っている。

そう……確信した。

０７　その名を知る者

「どこで知ったとかそういう事じゃなくてだな、俺はその地球……っつーより、日本から来たんだよ」

俺はあの時アリスに話したように、リアに俺が地球から来たという話をする事にした。さっきは突然変な事を言うのは止めておこうと躊躇ったけど、相手が多少なりとも地球や日本の事を知っているのであれば、躊躇う事など何もない。

俺が一通り話し終えると、リアは少し考え込む様に腕を組み始めた。

「喧嘩をして、得体のしれない魔術を掛け、結果裕也さんを異世界へと飛ばす……日本は相当物騒な所みたいですね」

「佐原を俺の世界の基準にしないでくれ……って、ああ、佐原ってのは俺をこの世界に飛ばしいた……やつで……」

俺がうんざりしたように佐原の名を出した所で、リアが何か思い当たる事でもあったかのようにピクリとお反応したので、思わず言葉が尻すぼみになってしまう。

思い当たったらおかしい筈なのに。

「佐原……ですか」

「え……ちょ、ちょっと待て！　もしかして知ってんのかアイツの事！」

いや、まて自分で言っておきながらそれはおかしい。

アイツは魔術の詳細を知らずに俺に使い、俺をこの世界へと飛ばした。故にアイツはあの魔術を俺以外の相手……即ち自分にも使った事が無い筈なのだ。
それだけは確信を持って言える。

あの時アイツが望んでいたファンタジーＲＰＧの様な世界とは、ほぼそのままこの世界な訳で、もし仮にアイツがこの世界に来ていたならば、帰る必要が無いのだ。
そしてどうやら俺の読みは正しかったらしい。リアは首を横に振ってから続ける。

「いえ、裕也さんをこの世界に飛ばした少年の事は、少なくとも私は存じておりません。ですが、その佐原という名前は、何度かししょーが口にしていたのを覚えています。たしか古い知り合いだとの事で」

「古い知り合い……ああ、そういう事か」

それを聞いて、色々と納得がいった。
きっとリアがアルドの口から聞いた佐原という名前は、ほぼ間違いなく佐原の爺さんの事だ。
あの魔道書は佐原の爺さんが亡くなる時まで封印されていた。そしておそらくその封印は、この世界の魔術を要いた物だ。そして佐原の名を知る者がこの地に居る。

とすればほぼ確定だろう。佐原の爺さんは、どういう経緯かこの世界へとやって来て、アルドと知り合った。そして何かしらの理由で地球へと戻り、おそらくその移動で使ったであろう魔道書を封印した。細かい経緯や理由なんてのは当事者ではないため分からないが、今俺が持っている情報だけで、おそらくこうであっただろうと

いう、確信にも近い憶測が立てられる。
となってくると、アルドが着物の存在を知っているのも頷ける。
その情報を知っている者と知り合ったのだから、知っていたっておかしくは無い。まあ作ったたってのは、かなり無茶な話な気がするが。
「という事は、アルドさんが着物の事を知ってるのは、別にアルドさん自身が地球に来たりした訳じゃなく、そのアルドさんの知り合いの方の佐原が教えたって事になるのか？」
俺は確認の意を込めてリアにそう尋ねる。
「すみません。私はあくまで耳に挟んだだけですので、詳しい話はしょーじゃないとなんとも……」
「そっか。わりいな、無理な質問して」
「いえいえ」
リアはそう言った後、一拍置いてから俺に言う。
「裕也さん。気になる事があるのなら、一度しょーに会われてみてはいかがでしょうか？」
確かに、俺の抱いている疑問を解決するに当たって、この世界で最も頼りになる相手というのは、まだ顔も観た事が無いアルドである事は間違いないだろう。
別に今すぐ帰るつもりはないし、その疑問を解決した所で自分の状況が何か変わる訳じゃないけど、やはりモヤモヤは解決できる時にしておいた方が良いし、そういった情報を知っているだけで、今

後何かの役に立つかもしれない。
そう思ったからこそ俺はリアに話を聞いたんだ。だったら答えは決まっている。

「ああ、よろしく頼む」

「ではししょーが戻り次第連絡させていただきます」

リアはそう言って、笑みを見せた。

……対して笑みとは少し離れた表情をしていたのはアリスである。

「えーっと、途中から完全に置いてけぼりだったんだけど……終わったの？」

そういえば、途中から全く声が聞こえなかった。まあ俺もアリスと同じ立場だったら似たような感じになっていたかもしれない。何しろアリスは、僅かながらに日本の知識を持っているリアや、そもそも日本に居た俺とは違い、あくまで俺が日本という所から来たという事しかしらないのだから。

「とりあえず終わった。なんか悪かったな」

「別にいいわよ。大事な話だったんでしょ？」

「まあそれなりにな」

何度も言うけど、あくまでモヤモヤを取りはらったり、今後役に立つ事があるかも程度の話だ。大事ではあるが、精々それなりだ。
だけどまあ……今の話で、それなりどころじゃない可能性がより

信憑性を増してしまった訳だけど。
佐原が使ったあの魔術……アレはその可能性が高いとかそういうレベルじゃなく、ほぼ間違いなくこの世界へ渡るための物だ。
その事が俺に直接降りかかる厄介事になる可能性は極めて低いだろうけど……やっぱその可能性があるというだけで、気がめいる。
何度も自分に言い聞かせているが、気にしたら負けだ。考えるだけ無駄だ。
そう自分に言い聞かせていると、まるで俺の思考を逸らす様にタイミングよくアリスが立ち上がった。
「じゃあそろそろ行きましょうか」
どうやら此処を出るらしい。
まあ報酬受け取りも終わり、俺個人の話も済んだ。だとすればこの場所にもう用は無い。
「リアちゃん。今回の件、改めてありがとうってアルドさんに伝えておいて」
伝票を手にし、一歩席から離れたアリス。
それに続くように俺とリアも立ち上がり、そしてリアがアリスに返事と取れる言葉を返す。
「分かりました。伝えておきます……あ、そういえばアリスさん」
何か思い出した様にリアはアリスに言う。
「一応大金とも取れるお金を持ち歩いているんですから……帰り道、

気をつけてくださいね？」

気を付けろというのは、スリとかにって事だろうか。だとしたら、地球もこの世界もかわらねぇなあ。

俺がそう思ってると、アリスは少々心外そうに言葉を返す。

「大丈夫よ。私がそんなヘマをすると思う？」

すると思います。防犯方面の事は何も知らないけど、昨日から一緒に居て、ウチのリーダーからはなんとなくそういう事態になりかねない雰囲気を感じました。ついうっかりとか言っちゃいそうだ。

「そ、そうですよねー」

そう言うリアの声も少し棒読みっぽかった。多分考えている事は同じだろう。なんかシンパシー感じるや。

「まあ何か起こらない様に、俺が気を配っとく」

「よろしくお願いします」

「あの、マジな顔でそういう話ししないで。分かってるから。自分がドジなのは充分分かってるから、自分達が何とかしないとオーラを出すのは止めて！」

とりあえずそういう訳で、俺達は報酬を受け取って喫茶店を後にしたのだった。

07　その名を知る者（後書き）

次あたりから、ある程度話が動くかなと思います。

08　追走開始

「どうする？　とりあえずご飯食べよっか」

喫茶店での、俺にとっては濃密に思えた会話も、時間的にはあまり進んでおらず、依然昼時である事に変わりはなかった。

というより昼時じゃなくなったとしても腹は減る訳で、時間がどうであれ飯にしたい所である。

「ああ、そうしようぜ」

俺はアリスにそう返した。

しっかし……異世界の食文化ってのは中々に興味が沸いてくる。

朝食の時のアリス曰く、主食は米ではなくパンらしいけど、それ以外の情報はまるで入って来ていない。一体どんな料理があるのか、結構楽しみだったりする。

「裕也は何か食べたい物とかある？」

「俺はこっちの世界に何があるか分かってねえからな。お任せで頼む」

「分かったわ」

アリスはそう言って、どこが良いかなと考え始める。

「とりあえず、折角お金も入った事だし、ちょっと高いお店にでも入ろうかしら」

「基本的にギルドの報酬って、定期的に入ってくる様な物じゃねえんだろ？　あんまり無駄遣いすんなよ」

「分かってるわよ……でも、お金が入ってから、最初の一回位は贅沢してもいいいと思わない？」

「まあ、そうだな」

確かに給料日は外食してたり、少しランクの高い飯を食っている人が多いって印象はある。お金がある程度あると財布の紐が緩むってのもあるけど、しばらく頑張ったご褒美ってのもあるのかもしれない。

「それに……ほら」

アリスは俺の方を見て言う。

「ギルドに新しい仲間が加わったって事で、その歓迎会みたいなのもしたほうが良いと思うの。まあ会って言っても、私とアンタの二人だけだから、少し高いランチを食べるってだけだけどね」

「え、あ……そうか。ありがと」

まさかそういう事を考えてくれているとは思わなかった。それは素直にうれしい事である。

「……で、どうする？　なにか目星の付く様な店ってこの辺にあるのか？」

「沢山あるからこうして悩んでんの」

アリスは歩きながら長考に入ってしまった。
しかし飯を食いに行く時、どうして人はここまで悩んでしまうのだろうか。
俺自身、休みの日に昼を適当に外で食べる事になって、ラーメンを食うかカレーを食うかで非常に悩んだのが記憶に新しい。人間すぱっと決められないのだ。だってどっちも食べたいし。どっちも選びたいからこそ、どっちも選べない様な状況で悩むんだ……アレ、そう考えると、先週ラーメンかカレーで小一時間悩んでいた俺は優柔不断って事になってしまうのか？　……嫌だなぁ。

「よし」

アリスはようやく店を決めたのか、そう口にした後……俺の方に拳を付きだした。何故に？

「とりあえず二つに絞ったから、後はじゃんけんで決めましょ。私が勝ったらあっちの店。裕也が勝ったら、もう少し歩いた所にある店。それでいい？」

なるほど。最後の審判は運任せって事か。

「分かった、そうしよう」

俺達は足取りを止め、最初はぐーの合図で手を出す。

「俺の勝ちか」

俺がチョキを出し、アリスはパー。

「つーことは、もう少し歩いた所にある店で決定って事でいいのか？」

「そうね……いや、ちょっと待って。もう一回。いや、二回。三回勝負にしましょ」

うわー、優柔不断面倒くせー。

とはいえ、俺も同じ立場だったらそういう風に……いや、流石にもう少し位は決断力がある。

「却下。例えこんな些細な事でも、ある程度はピシっと決めた方がいいと思うぜ？」

まあアリス程ではないにしろ、ラーメンかカレーで一時間も悩んだ奴の言える事ではないがな。

「……そうね。よし、決めたわ。もう少し行った所の店にしましょ」

どうやら決めてくれたらしい。これでまだじゃんけんを継続してこようものなら、どうしたもんかと思ったけど、流石にそれは無かった。

「じゃあさっさと行こうぜ。あんまり並んでなきゃいいけどな」

まあガラガラだったら、それはそれで旨いのか不安になるし、適度に混んでるといいな。

そうやって、適度に混んでいる店のビジョンを脳裏に浮かべつつ、俺達は店を目指す。

そして少し数十秒程歩いた所だろうか。

「あ、見えたわ」

どうやら店のすぐそこまで来たらしい。

といっても、俺にはその店の外貌なんてのは分からない訳で、どうやら外にまで並んでいる人が居ないらしいその店を見分ける事が出来ない。

だけどその代わりに、飲食店と全く関係の無い存在が目に入った。

「……なんだあの子」

俺は恐らくアリスにも聞えていない様なボリュームでそう呟く。

よほど慌てているのか、こちら側に向かって全力疾走している、緑髪でショートヘアーな、リアと同じ位の年頃の女の子。時々転びそうになりながらも、殆どスピードを緩めずに走り続ける。

なんとなく、その内誰かにぶつかってしまいそうだ。危なっかしい。

そう思っていた矢先だった。

「うわっ！」

少女の体がそんな声と共に、勢いよく躓いた。

「え、ちょ……ッ」

そしてその先に居たのがアリスである。

アリスは突然の事に反応できず、結果的に少女がタックルを仕掛けた様な形になってしまった。

そのままアリスを押し倒す様な形になる。

「ったた……」

「……大丈夫か？」

俺はアリスと、そしてアリスにぶつかってきた女の子に対してそう声を掛ける。

「大丈夫です！　すみませんでした！」

まず返ってきたのは女の子の声で、返事を返したと思いきや、すぐさま立ち上がって、こちらが他に何か声を掛ける暇をも与えず、再び走りだした。

「どうしたのかしら、あの子」

「さあ？　本当に、あんなに急いで、何をしたいの……か？」

俺は走り去る少女が手にしている物を見て、思わず背筋に冷たい物が走った。

「アリス！」

「なによそんなに慌てて……」

ゆっくりと起き上ろうとするアリスに向かって、俺は言う。

「報酬の入った封筒、ちゃんと持ってるか！？」

走り去る少女の手には、確かに封筒らしき物が見えた。

考えたくは無いが、喫茶店にて、俺やリアが恐れていた様な事態が起きたかもしれない。

たのむから何事もなく済んでくれ。そう思って掛けた言葉に対する言葉は、あまり聞きたい回答では無かった。

「大丈夫よ、ちゃんとあ……裕也！」

どうやらついさっきの数秒で起きた事をアリスも理解したらしい。そしてアリスが俺に何を求めたのかも、何となく理解した。まちがいなく掬られた。随分とダイナミックな手法だったが、それは間違いない。

「クソ……ッ、冗談じゃねえぞ！」

俺は瞳を赤く染め、肉体強化の魔術を発動させる。
……相手は普通に走ってるだけ。距離は目と鼻の先。
速攻で追い付く！
俺は心の中雄叫びにも似た声を上げつつ、力を解放するかの如く全力で地を蹴った。

０９　朦朧とした意識の中で

地球に居た時とは比べ物にならないほどに強化された、俺の身体能力によって生み出される瞬発力は、それなりに早いであろう少女との距離を一気に詰めて行く。
それに焦ったのだろう。今まではおそらく、盗んだ事をすぐに勘づかれない様に、ぶつかる前と同様のスピードを保っていた少女は、こちらに視線を向けた後、驚愕の表情を浮かべつつも瞳を赤く染めた。
そして状況は一転する。

「な……ッ」

加速した。
恐らく肉体強化の類の魔術を使ったのだろう。少女の走る速度が格段に上がった。
それも……気を抜けば距離を離されかねない様な超スピード。

「……そっち方面に特化してやがんのか」

肉体強化にカテゴライズされる魔術の効果は、その数だけバラつきがある。
俺が使っている、全身の身体能力をほぼ平等にあげる様な肉体強化もあれば、動体視力のみを急激に上昇させる様な魔術も存在する。
だからこの状況下で考えられる可能性は二つだ。
一つは、目の前の少女が、今の俺をも凌ぐほどの強力な魔術の使い手という可能性。
そしてもう一つは……使っている魔術が、移動速度を向上する事

に特化した魔術であるという事。
どちらにしても、ほぼ拮抗したスピードで走り続けているのなら、勝負の分け目はただ一つ。
純粋な体力の差。
魔術を使用する際に集中力も必要になってくるが、こういう状況下でもっとも重要視されるのは術者の体力。何故なら例え魔術を持続できる集中力があっても、体力が尽きてしまえばまともに動けなくなるからだ。

だとすれば俺が追い付けない訳が無い。
魔術が駄目でも、それ以外の事は自信がある。そんな俺が年下の女の子に体力の面で負けているとは思えないし、そして何より、あの魔術が瞬発力に特化した魔術なのだとすれば当然普通の肉体強化を使うよりも、脚に掛る負担が多い。
故に負けるビジョンが浮かばない。

そして俺の体力がまだありあまっている段階で、少女が失速しはじめた。
それでも変わらぬ速度で少女を追い……ってオイオイオイ！

「壁……ッ！」

少女を追う事と、人を避けるのに集中し過ぎて他の事が全く見えてなかった。
前方。何百メートルか先に、全長七、八メートル程の高さの壁が見えた。恐らく何かしらの家屋なのだろう。だけど、それが何かなんて事はなんの問題でもない。
今問題なのは……今更壁に気付いた所で、止まれないし曲がれな

い！
　車が急には止まれないのと同じで、人間だって急には止まれない。なまじブレーキという高速移動状態から止まるための装置が付いているだけ、車の方がまだ止まる。
　つまり目の前の少女が失速しているのは、体力が尽きたわけでは無く、ただ単純にカーブを曲がる為の減速。

「クソ……ッ！」

　どうする。どうすればいい。
　この場で受け身でもとって無理矢理止まるか？　すげえ大怪我しそうだけど壁に激突するよりはマシかもしれない。
　もしくは壁を飛び越えてみるとか……いや、どちらにしろあの子に逃げられる。
　命より金の方が大事だとは言わないが、アリスのお金の管理について任せろ的なニュアンスでリアに言った手前……そしてアリスと共に命掛けで戦った対価でもあるソレを、みすみす他人に奪われる訳にもいかない。

　だったらどうすればいいか。
　一つだけ、案が浮かんだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

　俺はスピードを緩めない所か、気持ち的にもっと加速する様に、走るために必要な筋肉をフル活動させる。
　減速していく少女との距離をどんどん詰め、そして曲がり角がすぐそこになり、最も少女が減速したであろうタイミングで……俺ははち切れんばかりに手を伸ばした。

「ひゃッ」

伸ばした手は、しっかりと少女の右腕を掴んで……そして。

「いくぞおおおおおおおおおおおおおッ！」

俺はその場で勢いよく飛び上がった。

金を取り戻し、尚且つこの場を乗りきるには、少女を捕まえて一緒に飛べばいい。

もっとも、捕まえるとなれば飛ぶタイミングも送れる上、人一人の体重が追加される訳だからジャンプ力だってきっと落ちる。ただでさえ危険極まりない行為が、更に危険度を増す事になる。

だけど……もう飛んでしまったのだから、どうしようもない。

「ひゃあああああああああああッ！」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおッ！」

俺は飛びながら少女の手を引っ張って抱き寄せる。

……行けるか？

一瞬不安になるが、それは徐々に安堵へと変わっていく。

次の瞬間、視界から壁が消えた。

その次の瞬間に右足の先が壁にかすった事から、本当にギリギリのタイミングだった事が伺える。

だけど……確かに飛び越えた。

「よし……」

あとはうまく着地できれば完璧だ……完璧？

良く考えたら、飛んだ後の事……何も考えてねえ！？
依然俺達の勢いは殆ど衰えちゃいない。そんな中で無事に着地できるのだろうか。
下に人が居たら。民家があったら。そう考えると、一瞬で絶望的な展開に早変わりだ。
そして飛び越えた壁……何かしらの高い建物の屋上を超えた先の景色が目に入った。

……随分と大きな川である。

「良かった……」

これで人の上や民家の上に落ちるなんて事は無い。そして地面に落ちるよりは幾分かは安全……って、そういえば。

「……俺、泳げねえじゃん」

運動神経には自信がある。だけどそればっかりは無理だった。

「うおあああああああああああああああああッ！」

「ひゃあああああああああああああああああッ！」

俺と少女は互いにそんな悲鳴を上げながら、水面に叩き付けられる。
一瞬、軽い痛みが全員を駆け巡った。
いくら水で、高度も十メートル無かったとは言え、スピードだけはかなりの物だったのだ。流石にある程度の痛みは伴う。

だけど肉体強化の強弱で生死の分け目になる程の衝撃では無かったらしい。出血している訳でもなく、気も失っていない。見た感じ大丈夫そうだ。
だけど……俺の方は全然大丈夫じゃない。

「グバ……ッ」

着水する際、ほぼ全くと言っていい程に酸素を貯め込む事が出来なかった上、水も飲んでしまっている。全身が酸素を求めるが、そんな物はどこにもありはしない。
そんな状況で……本当にタイミングが悪く、右足の脹脛に激痛が走った。

「アガ……バ……ッ」

俺は激痛に耐えつつも、右足に視線を向ける。
外傷は特にない。だけど……確かに攣ってしまっている。
本当に最悪の状態だった。

泳げない俺が、服を着た状態で水深が深い川に落ち、しかも脚を攣ってしまっている。息を止めているのだって限界で、水だって飲んでしまった。
そして、肺に碌に空気が入っておらず、尚且つ泳ぐ事も出来ない様な状態じゃ、人間は沈んでしまう。

ゆっくりと、水面が遠くなっていくのが分かった。
視界が薄くなり、意識が朦朧としてくる。
俺は半ば無意識に水面に向かって手を伸ばすが、それが届くはずも無く、届いた所で何も起こらない。

だけどその手を握る感触があった。
俺は朦朧とした意識で、その感触の正体を認識する。
俺の手を掴んだのは……緑色の髪をした、中学生程の女の子だった。

09　朦朧とした意識の中で（後書き）

次回あたりで、バトル展開いけたらいいなぁと……

１０　啖呵を切って、拳を握り

閉じていた瞼をゆっくりと開き、まず最初に目に入ったのは青い空だった。

そして次に訪れたのは、背中が擦れる……なんというか引きずられている様な感覚と、両足のまるで水に浸かっているかのような冷たさ。

そもそも俺はどうして寝ていたんだ？　今一体どういう状況なんだろう。

俺はゆっくりと首を後ろに倒す。するとこうなるに至るまでの出来事を鮮明に思い出す事が出来る様な顔が視界に入った。

「……あ」

そこに居たのは、緑髪の少女……アリスから報酬金を奪った犯人である。

俺が口を開いた……というより意識を取り戻した事に気付いた少女は、驚いた様な安心した様な、そんな表情を浮かべ……そして俺は今の状況に少しだけ違和感を覚えた。

意識を失う直前、俺が伸ばした手をこの子は掴んでくれた。

そして今、こうして俺の両腕を掴んで川から引き揚げてくれている。

そうしてくれた緑髪の女の子は、俺を助けてもなんのメリットも無い筈……いや、メリットが無くても人は人を助ける。実際そうした事によってこの世界に飛ばされた俺は、その事を良く知っている。

だからそれは訂正しよう。

だけど……助ける為にあまりにも大きなデメリットがあったとしたらどうだろうか。俺はそういう状況に陥った事は無いけれど、逃げなければいけない相手を助けるというのは、結構致命的な一手だ。同じ状況で俺がどう行動するのかは分からないけれど、躊躇うという人が大多数なのではないだろうか？

なのにこの子は俺を助けた。今も、俺が意識を取り戻したのならばすぐに逃げれば良いだろうに、これからどうすればいいのか分からないといった、困惑の表情を浮かべている。

そしてそういう反応を見せられると……違和感が完全に困惑へと昇格する。

どうしてだろうが、どうすればいいに切り替わったのだ。

俺は一体……この子に、どういう反応をすればいいのだろうか。

だけども結論はすぐに出た。

「……ありがとう」

過程はどうであれ、まずは助けられた事に関して礼を言っておくべきだ。過程の事は、これから清算していけばいい。

返事は無かった。きっとどうすればいいのか分からなくなっているのだろう。

だけど、俺がコレからどうするべきかは、礼を言った時点で決まっている。

俺は引っ張られている両腕を動かして右腕を少女の手から話し、そしてその手で少女の手を掴む。

「……ッ」

少女がビクンと体を震わせる。

そんな少女の目に、俺はゆっくりと体を起しながら視線を向けた。礼は言った。実際に感謝している。だけど感謝しているからと言って、アリスの金を取った一件とはまた別の話だ。

ちゃんと清算は付けなければいけない。『助けてもらったから、お金さえ返してくれればそれでいいよ』といってこの手を話す事なんて出来やしない。やるべき事はちゃんとしておかなければならない。相手が子供でも……いや、子供だからこそ。

俺は少女に向けて、落ち着いた口調で言う。

「とりあえず、話を聞かせてくれ。どうして人の金を取る様な真似をしたんだ？」

「……え？」

少女は呆気に取られた様な表情を浮かべた。もしかすると、この子は問答無用にキレられるとでも思ったのかもしれない。そのまま、話しすら聞いてくれずに、何処かに連れて行かれると思ったかもしれない。とにかく自分にとって不都合でしかない事をされると思ったのかもしれない。

だけど……少なくとも俺はそうしない。

「とりあえず肩の力抜いて、落ち着いて話してくれ。別に急かしはしねえから」

当然、大の大人がやったのならば、俺は容赦なく日本でいう通報に値する様な事をしていただろう。だけどこの子は子供だ。

別に子供だから何でも許されるだなんて、頭の悪い事を考えている訳じゃない。ただ単に、子供のこうした行為には結構裏がある場

合が多いからという話だ。

一言で言えばいじめ。具体的に言えば、その気が無い子に無理矢理万引きをさせるという事。それがフィクションではなく現実で起こり得るという事は、俺の経験則が物語っている。そういうクソ野郎は何処にでも居るんだ。だから盗んだという事実だけで全てを解決に運んでいい訳が無い。

少なくとも……俺はそうしたくない。

自分が危険な立場に置かれると、きっと分かっていた筈なのに俺を助けてくれた女の子を……信じてみたい。

だからその為にも、この子にも俺を信じてほしい。

……だけど少女は中々答えてはくれない。

まあ仮に俺の説が正解だとして、正直に言っても虐めていた側に睨まれ、自分の無実を主張しなかった場合でも、自ら進んでやったというレッテルを張られてしまう。

きっとどうすればいいのか分からない。実際そういう立場に置かれた事が無いから憶測上の話でしかないけれど、そうなのではなかろうか？

まあそういう事も考慮して話を進めて行くべきかもしれない。仮定に仮定を重ねた末に生れた案だけれど、外れていた時は外れていたときだ。

俺は軽く頭の中で文章を構築してから少女に言う。

「もし、誰かに言われてこんな事をしたんだってなら、別にお前を責めたりしねえよ」

少女の表情が、一瞬ピクリと変わった気がした。
どうやら俺の仮定は正しかったらしい。まだ確証は持てないけど、きっとそうだ。
だから後は確証を作れ。少女の言葉で自分のした事を否定してくれ。
その為に、俺は言葉を紡ぐ。

「もしお前がそういう理由でしていたんだったら、その元凶をぶっ壊してやる。ぶっ壊して解決しない問題なら、それでも何か手助け位はしてやる。だから……教えてくれねえか？　なんでこんな事をしたのか」

もし俺の仮定、憶測が外れていた場合、ただ逃げ道を作ってやっただけになってしまうだろう。だけどきっとそれは無い。
俺は、ちゃんとこの子が正しい事を言ってくれると信じている。

俺は少女の言葉を待った。
しばらく待って、少女は何かを言おうとゆっくりと口を開く。
だけどその言葉は発せられる事は無く、代わりに聞き覚えのない男の声が耳に届いた。

「何をしている、ミラ」

その声に、少女がピクリと反応して……そして少しだけ、震えているのを感じた。
そしてそうさせている声の主……ゆっくりと河川敷に降りてきた、黒いロングコートを来た男に視線を向けた。
年齢は二十代後半位だろうか。黒髪で長身。表情は何を考えているのかまるで分からない様な無表情。声を聞いただけでミラという

名前らしい少女が震えた事もあって、いい印象などは当然得る事ができない。
そしてゆっくりとこちらに歩み寄る男は、俺達……いや、恐らくはミラに向かって言葉を発する。
「お前ならこの状況位簡単に打開できるだろ？　さっさとこっちに来て奪った金を渡せ」
奪った金を渡せ……その一言だけで、俺の憶測は現実味を増していく。
同時に全く別の違和感が発生し始めていたが、そんな事はどうでもよかった。
「……おい、アンタ」
俺は警戒の為に肉体強化を発動させつつ、男に言う。
「俺の憶測でしかねえが、多分この子は自分の意思でこんな事をしやしねえ……さっきの言葉から察するに、全部アンタがやらせているって事なのか？」
俺の声には、きっと怒りの声色が籠っていたんだと思う。
もしこの男がそうさせていたのだとすれば、それは子供同士のイジメの加害者側なんて生易しい物じゃない。
正真正銘……ただのゲス野郎だ。
そして男は口を開く。
「そうだが、何か？」

全くの無表情で、何一つの感情を見せない様な凍りついた声で、男は堂々とそう口にした。

「何かって……てめぇ、自分が何やってんのか分かってんのか！」

「分かってるさ。俺が奪った物を返してほしかったら、それに見合った金を用意しろと指示をした。用意できないなら奪って来いと指示をした。そして奪った金を受け取るために此処にやってきた。ただそれだけだ」

そういう事を聞いた時点で、もう男の話を聞く気は無くなった。その代わりに俺は、俺に捕まっている状況を打開できると言われたにもかかわらず、そうしなかったミラに、一言だけ尋ねる。

「今の話……本当か？」

ミラはどうするべきか少し躊躇いを見せたものの……それでも首を縦に振った。

……決まりだ。

俺はミラの手を離して一歩前に出る。

目の前の男には、反吐が出そうなほどの軽蔑の感情と怒り。そして違和感を抱いていた。

奪った金を、何故被害者の目の前で受け取りに来るのか。

後から合流して受け取ればいい。仮に捕まってしまったのならば、トカゲの尻尾の様に切り捨てれば良い。男のやっている事は、あまりにも大きなリスクを被る、愚策中の愚策だ。まともな神経をしていれば、絶対にそんな行動はしない。

だけど……このゲス野郎の狂った思考回路の事なんかどうだって

よかった。
　俺は目の前の男を見据えて口を開く。
「てめぇには言いたい事が沢山ある。だけど言った所で聞きはしねえだろうし、そんな長々とした説教をしていられる程、俺にだって余裕はねえ。だから……歯ぁ喰いしばれ」
　拳を握りしめ……言い放つ。
「とりあえずてめえをぶっ飛ばす！　説教は後で警察にでもしてもらえ！」

１０　啖呵を切って、拳を握り（後書き）

次回、久々の戦闘回です。

１１　重力変動

「警察というのが何かは知らん。だが俺にとってあまり都合の良い存在ではなさそうだ」

そう言った男の瞳が赤く染まる。手に皮手袋を付けている所為で何の魔術かは分からないが……少なくとも、瞳の色が戦える力を保持している事を告げている。

俺はどう動くべきかを考えると同時に、少しだけ力を抑える事に集中力をそそぐ。

あのドラゴンとの戦闘で、今の状態の筋力が相当な物になっている事は分かった。

仮にあの力を使って生身の人間を殴ったとすれば、それは確実に死を齎す。仮に肉体強化を覚えていたとしても、例えば本来の俺程度の力の場合は同じ結果を辿る可能性が高い。

別に不殺主義を謳おうって訳じゃないが、人を殺すという事はこの程度の事で踏み込んでいい領域ではないだろうし、そもそもどんな状況であれ、踏み入れる勇気なんてのは持ち合わせていない。だから今は死なない程度にぶっ飛ばす。それがベストな選択だ。

俺は力を抑えつつ、男に向かって跳びこもうとするが……力を抑え込むというワンクッションを置いている間に、既に男は動きだしていた。

「……ッ」

一瞬で男は俺との間合いを詰め、裏拳を放つ様に右手を構え……

次の瞬間、目の前から男の姿が消失した。
そして視界の端……右方に、黒いコートが移る。
明らかに普通の移動方法を使っていない……まさか、転移術式かッ！
そして俺が対応するよりも早く裏拳が放たれる。

「グ……ッ」

右肩に強い痛みが走り、その裏拳の勢いに俺の足は地から離れ、そのまま弾き飛ばされる。
だが、何かおかしかった。

「なん……ッ」

謎の浮遊感が全身を襲った。
なんだこれまさか……落ちてるのか？

「嘘だろ……ッ！」

まるで高い所から叩き落とされた様に、俺の体は地面と平行に落ちて行く。
まさかアイツ……重力でも操ってんのか！？

「……ッ！」

俺が一つの仮説を立てた刹那、まるで重力が元に戻ったかのように俺は地に落ち、勢いそのままに地面を転がる。
戻った……のか？
しゃがみながらなんとか耐性を立て戻し、男の方を見据える。だが俺と男の間に一瞬、何かがチラついたかと思うと、次の瞬間、左

肩と腹部に激痛が走る。

「グァ……ッ！」

激痛に思わず俯き、何かが当たった腹部に視線を向けた。
俺の腹部、そして左肩に抉りこむように突き刺さっていた何かは、急に勢いを失ったかのように、俯いた俺の眼前へと転がる。
これは……拳銃の弾？　いや……少し違う。

……ゴム弾だ。

前にインターネットでちらりと目にした事がある。
殺傷力はほぼ無い物の、護身用としてはある程度の効果を発揮する、拳銃の弾をゴムで作った様な代物だ。当然空気抵抗や素材がゴムである事から、実弾と比べるとその威力は大きく劣り、殺傷能力はほぼ無いと言ってもいい。

少なくとも、肉体強化を発動させている今、まったく効く筈の無い攻撃の筈だ。
だったら今のはなんだ……この貫かれる様な痛みは。
俺は痛みを堪えるように歯を食いしばり、男に再び視線を向ける。
すると男は既に動きだしていた。

ゴム弾を撃ったと思われる銃などはその手に無かった。だが男が腕を振るうと、握られていた右手から複数のゴム弾が一斉にこちらに向かって飛ばされてくる。
明らかに腕は軽く振られていたにも関わらず、弾速は肉体強化で動体視力もある程度向上している俺が、辛うじて見える程度のレベルまで加速していた。

どう考えたって、何かしらの魔術が作用している。
俺は左方に飛んでゴム弾を交わし、すぐにでも男の方に飛びこめるように右足に力を込める。
恐らく、あのゴム弾に掛っているのは重力を操作する様な魔術だろう。さっきの落下の事。そしてさっき俺に着弾してから、少しの間だけ俺に抉りこむ様な形になった事を考えると、信憑性は高い。
重力の掛る向きを俺の方へと向け、掛るGの強さを操作して勢いを付ける。きっとそれがあのゴム弾のカラクリだ。

だとすれば……非常に厄介だ。
別にゴム弾が厄介な訳ではない。確かにゴム弾にも関わらず、正体不明の激痛を齎してくるから、危険である事に変わりは無い。だけど、まだ耐えられる。問題は、ゴム弾を打ち出している力の方だ。
肉体強化の恩恵も殆ど得られない様なスローイングで、素人目で見ても拳銃を要いた時の弾速に近いんじゃないかと思わせる程のスピードを出させている重力操作。
それがもし人の体に作用したらどうなる？

さっきの裏拳の際は、恐らく重力の向きを変えられた程度で終わっている。
だけどもし真下に強力なGを掛けられたら？　動ける動けない云々よりも、体が持つか？
もった所で動けなければそれは無防備で突っ立っている事と同義だ。どうしようもない最悪な展開である事には変わらない。

……いや、でもちょっと待て。そういう選択肢があるのなら、どうして重力の掛る咆哮を変える程度の事しかしてこなかった？　あの場面、充分に俺にとって最悪な状況を齎す事は可能だったはずだ。
そうしてこなかったという事はつまり、それは出来ないという事

なのか？
だとすれば……これ以上深い事を考える必要な無い。
「……次はこっちから行くぞ」
例え重力の向きを変えられようが、最悪な展開に持ちこむ一手を打たれないのであれば、対処法は至って単純だ。
俺は全力で地を蹴って男の方に飛びこむ。
次のゴム弾が撃たれる前に、一気に間合いを詰めて、そして手を伸ばす。
「……ッ！」
男が転移術式で逃げるよりも早く……その右腕を掴む。
男が使った転移術式が、一定の範囲内の者を転移させる様な代物でなかった場合、こうして掴んでおけば、男が転移した際に俺も転移する。
基本的にその手の術式は対象が触れている物も纏めて飛ばす。でなければ人だけを飛ばして服はその場に残していくみたいなギャグ漫画の様な構図ができ上がってしまうからだ。
だからこれで転移による不意打ちは事前に防いだ。
そして重力の方向を変えられても、コイツを掴んでいる限りは飛ばされない。
だから後は……左腕の中に無いとは言い切れないゴム弾が撃たれる前に……叩きこめ！
「おらッ！」
俺は右手の拳を握って振り下ろす。全力では無く……力を抑え込

んで。
　そうして放たれた拳は……、
「……ッ！」
　男の左手でいとも簡単に受けとめられた。
　そして攻撃の権利は男へと譲渡される。
「……」
　男は無言でソレを発動する。
「ぐぁ、アァッ！」
　男に拳を止められた次の瞬間、拳を掴む掌から発せられた突風に押し込まれ、肩に激痛が走る。
　……脱臼。それ故の激痛。
　飛び込んだ事によって発生したエネルギーは、左腕を中心に浴びた突風によって勢いを落とされ、俺は風の煽りによって不自然な回転をしながら地面に叩き付けられる。
　一方の男は、俺の攻撃による勢いも、自らが起した突風による衝撃も、うまく受け流す事が出来たのか、少し俺との距離を開ける程度の位置に、滑る様にして停止していた。
「……何をしている」
　男はこちらに一歩近づきつつ、口を開く。
「確かに充分な威力を持った拳だった。だが、他人の問題に首を突

っ込んでおいて、手加減で乗り切ろうなんて甘い考えは捨てた方が良い」

そして一拍開けてから男は言い放つ

「……早死にするぞ」

俺はその言葉を聞きながら、ゆっくりと起き上った。
右肩は依然脱臼したままで、ブラリと垂れ下がっている。無理矢理治そうと思えば治せるかもしれないが、脱臼なんてした事が無いから、治した事だってない。正直に言って、ちゃんとした医者に診てもらいたい。
だから……今はこの激痛に耐えろ。

「それで、どうする。まだやるのか？」

男は俺に問う。

「はっきり言って、俺はお前に興味が無い。お前が引くなら追いはしない」

まあそれはそうだ……コイツの目的は、ミラがアリスから奪った金を奪う事なのだから。
だけど……そう言われて引けるようならば、この世界になんて着ていない。

「わりぃけど、その気はねえよ。お前みたいな奴を目の前にして、黙って見過ごせる程利口じゃねえからな」

そう言って俺は左手だけで構えを取る。

そして……今度は左手に全力で力を込めた。

「とりあえず……此処からは本気だ」

手を抜いていたら勝てない。本気を出さなければ、コッチがやられる。

だから……ちょっと本気出す。

俺は正面に倒れるように重心を傾け、そして勢いよく地面を蹴った。

右肩に激痛が走るが、それに耐えて左手による攻撃態勢を取り、そして全力の拳を放つ。

だがその拳は空を切る。右肩の脱臼による激痛が邪魔をして、速度が足りなかったのかもしれない。ギリギリのタイミングで男の姿が消失した。

そして今度は背後に、殴られた様な痛みが走る。

それだけで十分なダメージであるにも関わらず、男の攻撃はそれだけでは終わらない。

重力変動

俺の体は再び落下を始める。

此処までは読んでいた。そしてこの流れで行くと、再びあのゴム弾が放たれる事も。

だから……落ち始めた瞬間に、その前に手を打つ。

「うぉらああああああああああッ！」

俺は落下しながら、男にある物を左手から放つ。
発火術式のよる炎ではない。
もっと物理的で……それでいて、場合によっては同等の威力を誇るかもしれない物。
即ち投石。さっき倒れた時に拾っておいた石を全力で投げる。

一見、落ちている石を投げるなんて行為は魔術による攻撃と比べて見劣りするかもしれない。だがしかし……石というのは充分に凶器だ。
まだ距離もさほど離れて無い段階で放たれた投石は、男の腹部に直撃し、男を大きくよろめかせる。
そうしている間に、地面を転がる様に着地して、再び男に接近した。

だがおそらく、投石である程度隙を作ったとしても、今度も交わされる。
拳の速度も足りなかったが、さっきの攻撃の際、明らかに跳びかかる勢いも落ちていた様に感じられた。きっと右肩の脱臼がそういう所にまで枷を掛けてしまっている。
だからそれを頭に入れて、攻撃パターンを組み立てろ。

「ったれ！」

俺は拳の射程距離まで接近した後、ある程度力をセーブした拳を放つ。
これで、受けとめられるならばそれでいい。
そう思って放った拳は空を切る。
今度は攻撃を受けとめるのではなく、交わして来た。さっきは俺に掴まれていたからああいう行動を取ったのであって、本来は攻撃

を受けとめて攻めに転じる様なタイプではないという事だろう。相手を撹乱する様な転移術式がそれを物語っている。
撹乱した上で、重力の方向を変える拳により、ダメージと共に距離を離す。おそらく今度もそう来ると……俺は山を張った。
まだその山が当たっているかは分からない。
拳を振るった勢いで体の向きが傾き、右方に男が居ない事を確認する。そして視線の端。その全貌が見えた訳ではないが、さっきまで背後だった場所にも、男は多分いないであろうという仮説を立てる。
だとすれば、俺の山が当たり、そしてその仮説も正しければ……男が居るのは、殴る前の時点での、俺から見て左側。
当然、この状態じゃそっちまで視線を向ける事は出来ない。だけど、向かなくたって別にいい。
ぶらりと垂れ下っている右手がそちらに向いていれば……それでいい。
そうして俺は、右手の甲に赤い魔法陣を展開した。

発火術式。

ドラゴン、そしてトロールとの戦闘で要いた巨大な炎を掌に出現させ、そして放つ。

「グアアアアアアッ！」

男の呻き声が聞えた。どうやら山は当たってくれたらしい。
……後は一気にたたみこむ。
俺は土の上を滑りながらも、なんとか男の方に向かって切り返し、再び男に席巻する。

「とりあえず頭冷やせこの野郎！」
そして炎を振り払おうとしている男に向かって、勢いよく蹴りを放った。
「グハッ！」
男の体はくの字に折れ、勢いよく川へとダイブする。
大きな水しぶきが上がり、一瞬場に静寂が訪れた。
「……やったか？」
俺は荒い息をしながらそう呟いて……そして、俺はようやくある事に気付く。
「っていうかヤバイ……やってたら困るじゃん」
もし今の蹴りで気でも失っていたら、当然泳げないだろうし、水の中に沈んで行く。イコール、それは死に至る可能性だってあるわけだ。
だがその心配は必要が無かった。
つまりは……まだ、やってはいなかった。
水面から大きな水しぶきと共に、男が飛び上がる……いや、空に向かって落下していた。
男はその後、陸に向かって落下を始め……そして着地を失敗し、河川敷の上を勢いよく転がる。
男はゆっくりと立ち上がろうとするが、相当ふら付いており、や

がてその場に崩れ落ちる。
どうやら……今の水面からの脱出が、最後の力という奴だったらしい。
「とりあえず……あとは警察的な奴に付きだせばいいって事か」
最初の男の反応をみる限り、この世界の警察的なポジションの名称は警察では無いらしい。まあその辺の事に関しては、アリスにでも聞くとしよう。多分追ってきてるだろうから、そろそろ来ると思うけども。
「まあそう言う訳だ。観念しろ」
俺はそう言いながら、男に近づいて行く。
とりあえず縛っておけばいいのか？　いや、でもそんな都合よく縛れる様な物は無いし、とりあえず気絶でもさせとくべきだろうか。
そう考えながら歩いていた、その時だった。
「その人からァァァ離れろおおおおおおおおおおおおおおおッ！」
背後から、突然そんな声が響き、思わず振り返る。
するとそこには、鬼気迫る表情の、同い年程の金髪の青年が……勢いよく拳を構えてこちらに跳んでくる姿があった。
俺は思わず右方に跳んで青年の拳を交わす。だがそれにより男との距離が離れてしまう。
「これ以上この人には、指一本触れさせねえぞ！」
俺の前に躍り出た青年の瞳は赤く染まっており……そして右手の甲には白い魔法陣が展開されている。

……肉体強化だ。

今の動きからして、相当の実力者である事が伺える。

そして口ぶりから、この男の仲間だという事も。

つまり、言える事は一つ。

……そう簡単に、この一件は終わってはくれない。

１２　例え間違いだったとしても

「……お前はこの男の仲間なのか？」
もう分かりきっている事を、俺は目の前の青年に問う。
「そうだ！　だからどうしたってんだよ！」
「どうしたって……少し考えて喋れよ」
俺はチラリと、俺の背後に居るミラに視線を向け、そしてすぐに青年の方に向き直した。
「お前がそのクソ野郎の仲間だったら、ソイツがミラに何をしていたか知っているはずだ。そして仲間であるなら、お前もソレに加担していた。違うか？」
できれば否定して欲しかった。
集団で行動する者達も、時に単独行動も行う事がある。男の行動が目の前の青年が知る由の無い所で行われた事だとすれば、青年は何も悪く無いと言ってもいい存在となる。そうであるに越した事は無いんだ。
そして青年は一拍開けてから言葉を返す。
「違わねえよ」
青年は否定しなかった。なんの言いわけもせず、真正面から俺の言葉にそう答えた。
「俺はこの人のしている事を知っていたし、加担もしていた。それ

は間違いねえよ」
それはあまりにも堂々と、そして清々しい自白。
青年はその調子のまま、言葉を紡ぐ。
「そして、この人が……いや、俺達がやってる事が、クソ野郎だとか、そういう風に罵倒される様なゲスい事だってのも分かってる。全部……分かってるさ」
「分かってんなら……なんでこんな馬鹿みてえな事をやってんだよてめえらは！」
「……そうだな。俺達にも理解は出来ねえよ」
何を言いたいのか分からなかった。俺の理解が済む前に、青年は話を進めていく。
「俺にこの人の考えている事は何一つ理解できねえ。この人の考え方は歪み切ってるし、やっている事だって無茶苦茶だ」
「分かんねえんなら、なんでお前はそれに加担してるんだ！　それがどういう事か分かってんだろ！？」
「……分かってるさ」
そう言って青年は拳を構える。
「分かってやっているから、俺にお前の罵倒を否定する権利なんかありゃしねえよ。お前らや、これまで関わってきた奴らが俺達に抱いている感情は、きっと間違ってなんかない。だけどな……」

そうして青年は、怒りを押し殺すように言う。

「それでも、この人の事を他人に悪く言われるのは……我慢ならねえんだ」

本当に、目の前の青年が何を考えているのか、俺には理解できなかった。

自分でも男の非を認めていて、それでいて他人に非難される事も分かっていて……それでも非難される事を拒んでいる。そして間違っていると分かっていて、それでも男に加担している。

……まったくもって、理解できない。

そして理解が出来ないまま、その青年は交渉を持ちかける。

「とりあえず、俺がキレてお前と戦う様な事が起きる前に……取引をしよう」

「取引？」

「簡潔に言えば、返すもんは返すから、この場は見逃せって事だ」

……どう返答すべきか迷った。

正直に言って、あの男をこのまま見逃すわけにはいかない気がする。本人達は、どういう事か分かっていて、あんな無茶苦茶な事をしているんだ。だとしたら、ここで見逃したらきっとそれは続いて行く。そして見逃せば、その後で介入しようとしても、そもそも出くわさない可能性が高い。止めるなら今なのだ。

だけど……今動くには、不安要素がありすぎる。

そしてその不安要素を青年は理解している様だった。

「みたところ、お前、右肩やってるだろ」

……それが一番の不安要素だ。

目の前の青年が一体どの程度の実力を持っているか分からない以上、こんな状態で戦いになって勝てる保証なんて無い。だとすればアイツらが奪った大切な物だけでも取り戻しておく方がいいのではないだろうか？

確かに根源を止める事は大切だ。だけど、それに拘って、取り戻せる物まで取りこぼしてしまえば本末転倒だ。

俺は左手の拳を握りしめ、恐らく苦い表情を浮かべながら青年に返答する。

「……分かった。それで手ぇ打つ」

……苦渋の選択だがな。

「わりぃな」

そう言った青年は倒れている男の懐から何かの紙袋を取り出す。それをこっちに投げてきた。

「……っと」

俺はそれを左手で掴み、ミラにその紙袋を見せて確認を取る。するとどうやら本当にそれがミラの奪われた物だった様で、ミラはそれに頷いた。

「じゃ、こっちは退散するわ……マジでこのタイミングで襲ってくるとか勘弁しろよ」

……なるほど、その手があったか。

一瞬素直にそう考えてしまい、どうしたもんかと思考を巡らせたその時だった。

「まあ、させねえけどな」

青年はそう言ってから……上空に向かって声を張り上げる。

「頼むぜ！　エリィ！」

次の瞬間、何もなかった上空に一人の少女が突然出現した。

俺と同い年位だろうか。やや背が高めのその少女は、無表情のまま地面に着地すると同時に、青年と男をギリギリ覆う様に魔法陣が展開させる。

「じゃあな。何処かで会っても、突っかかってくれるなよ」

「ちょ、おい！」

俺がそう声を上げた瞬間、魔法陣から眩い光りが放たれ……その光りが消え去った頃には、もう既にそこには誰も居ない。

……転移術式。

突然現れたあの少女は、マナスポットの恩恵を得ていない素の力で、三人の人間を飛ばしてこの場から去ったという訳だ。

転移術式は回復魔術同様に、扱いが難しい代物だ。にもかかわらず三人も同時に飛ばしたとなれば、あの少女も相当な実力者だったという事になる。
もし、仮にこの場であの青年と戦闘を始め、あの少女が乱入してきた場合、果たして今の状態の俺で勝てただろうか？　やってみなけりゃ分からないが、今はやらなくて良かったかもしれないという思いが結構強くなってきた。

「……あの」

俺が戦っていた場合の事を考えていると、リラが恐る恐ると言った風に近づいてきて俺に声を掛けてきた。

「ああ。わりぃ。考え事してた。とりあえずこれ、お前の盗られた物な」

俺は手に持っていた紙袋をミラに手渡すと、それを受け取ったリアは一瞬間を開けた後、深く頭を下げる。

「あ、あり、ありがとうございます！」

「いや、別にいいって……あと、今回の事もな」

全部悪いのはあの男だ。普通に法律的に考えればこの子は悪いのかもしれないが、それにしたってこちらが許せば示談が成立したみたいなもんだ。多分、アリスも理由を説明したら分かってくれるだろう。いや、分からせる。

「……いいんですか？」

ミラは不安そうに尋ねてくるので、俺は少しだけ前の事を思い出しながら答える。

「言っただろ？　誰かに言われてやったんなら、お前を責めたりしねえって。俺はお前を許すよ。だからそんな顔すんな」

俺がそう言うと、少しだけミラの表情が和らいだ気がした。そしてしばらく間を開けてから、ミラはゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……ありがとうございました」

「どういたしまして」

俺がそう返した時だった。

「あ、やっと……見つけた！」

河川敷の上に、荒い息で俺達に向けてそう言う人影を見つけた。当然の事ながら俺達を探しに来た人間というのは、まだ事情も何も知らない完全なるスリの被害者、アリスである。

「とりあえず、事情は俺の方からちゃんと説明してやる。だからとりあえず……謝ろうな」

「……はい」

こうして俺は、こちらに小走りで向かってくるアリスにうまく事情を伝えられる様、文章の構築に掛るのだった。

１３　黒点病

「……まあそういう訳なんだ」

「本当に済みませんでした！」

　俺が事情を話し、ミラはその合間を縫う様に謝罪の言葉を述べて、何度も頭を下げる。

　そうした一連の流れを見聞きしたアリスは、俺の説明が終わったと判断すると、そのまま即答する。

「うん、この子何も悪くないじゃない」

　その言葉を聞いてとりあえず胸を撫で下ろしたくなった。分かってくれるとは思っていたけど、実際に聞くと安心感が違う。

「だから少なくとも、私にこの子を責めようって気は無いわ。だから、えーっと……ミラちゃん、だっけ？　とりあえずもう頭下げなくていいから、頭上げて」

「……はい」

　言われたミラはそう言ってゆっくりと顔を上げ、そうして向けられた視線にアリスは笑みを浮かべて答える。するとミラの表情がまた少し和らいだ気がした。

　だけどそれとは反比例するかの様に、アリスの表情が少しだけ険しくなった。

　アリスはその表情のままで、ミラに一つの質問をする。

「ねぇ、ミラちゃん。ちょっと一つ、聞いてもいい？」

「なんですか？」

「ミラちゃんにそんな事をさせてたのって、もしかしてだけど……ロベルト・スローンって名前の人じゃないかしら」

出てきたのは聞き覚えの無い名前だった。まあ俺が知っている筈が無いのだが、しかしミラはその名前を知っているようだ。

「……はい」

そして頷く。その行為があの男がロベルト・スローンという名である事を決定付けさせる。

「……知ってんのか？　あの男……いや、ロベルトって奴の事」

「え、知らないんですか？　……そういえば、なんだかあの人達の事を初めて見る様な反応でしたし」

アリスが答える前に、不思議そうにミラは僅かに首を傾げる。

「えーっと、裕也は此処に来たばかりだから。知らないで当然よ」

「逆に言えば、此処に住んでる連中の中じゃ有名人って事か？」

「悪い意味でね」

そう言ったアリスは、ミラが持つ紙袋に視線を向けて、ミラに尋ねる。

「ミラちゃん。その袋の中身って……もしかして薬か何かだったりする？」

「はい。それで合ってます」

ミラは自分の持つ袋に視線を落としながら呟いた。

薬……まぁ一瞬連想する様な、所謂所持しているだけで逮捕される様な薬物的な物ではないだろう。この子の雰囲気からして、そういうのを持っているとは思わないし、思いたくは無い。

……となれば、あとはアレくらいか。

「薬っていうと……風邪薬みたいな奴？」

「はい。黒点病の特効薬です」

黒点病自体には聞き覚えが合った。確か親戚の農家の爺ちゃんがカンキツとかに出る病気って言ってた気がする。黒い斑点ができるんだったたか。

でも風邪薬という問いに頷いたという事は……おそらく、こっちの世界に存在する人に感染する病気の類なのだろう。だとすると、俺の認識がおかしいまま話が進んで行って、途中で訳が分からなくなるかもしれない事を考えれば、一応詳細を聞いておいた方が良い。

「えーっと、アリス。黒点病って？」

そう思って尋ねたのだが、コレに最初にリアクションを見せたのはミラの方だった。

「え……黒点病も知らないんですか？」

その表情は、驚愕の色に染まりきっていた。その反応だけでこの病気が地球で言うインフルエンザ並に有名な病気であろうと予想が付く。
そして、その予想はどうやら当たっていた様だ。
「春から夏にかけた季節性の感染症。感染すると、腕に黒色の斑点が現れるのが特徴で、徐々に感染者の体力奪って行って、挙句の果てに色々な免疫力も低下していく。コレ自体で死んでしまう様な事になるのは滅多にないけど、他の病気と複合すると結構ヤバイ。そう言う病気よ」
免疫力の低下か……それは地球で言うと、なんの症状に似ているのだろうか。それは分からないが、その危ない病気が、季節性って事は空気感染かなんかで広がっている。そういう認識で正しいのだろうか。
「えーっと、それの特効薬を持ってたって事は、ミラはそれにかかってんの？」
俺がそう尋ねると、ミラは頷いて自分の腕を俺に見せる。
確かに小さいがはっきりと、黒い斑点が浮かびあがっていた。
「……治るんだよな、コレ」
「その為に特効薬があるんでしょ？」
まあそうだ。治らない薬なんて存在価値がねえもんな……価値？
「なぁ、良く分かんねえんだけど、この薬って態々大の大人が奪う

だけの価値があるのか？」

そして奪って、それを取り戻す為に言う事を聞かなければならない程の価値が、この薬にはあるのだろうか？

奪われたという事はミラが所持していたという事になる。大体中学生位の女の子が入手できる様な物に、そこまでの価値があるのだろうか？　普通に薬局とかで売ってねえのか？

「まあ微妙な所だけど、今年に限ってはそうなのかもしれないわ」

「今年に限って？」

「元々この病気は感染率が凄く低い上に、十五歳以下しか感染しないという性質があるの。その上、薬を作る際に必要な材料がある程度入手が難しい上に、薬にしてから一定期間が経過すると効力を失ってしまう。だから毎年、必要と予想されるプラスアルファ分の量しか生産されていないわ。それ以降は、足りなくなるたびに追加生産って所ね」

まあ確かに、大量生産して余った大量の薬が翌年使いまわせないのであれば、ある程度生産数は抑えるだろう。必要とされる分のプラスアルファ。足りなくなれば追加生産。その判断は素人目で見れば妥当だと思えてくる。

「だけど……つまり今年は、そのやり方に何かしらの支障が出たと」

「そう。ウイルスがちょっと変異しちゃったのよ」

「……変異？」

「今まで一度の服用で治っていたにもかかわらず、今年のは一度服用しただけでは治らないケースが多くなったの」

「……つまり、それで需要と供給のバランスが崩れた。そういう事か？」

「そういう事。だから今急いで生産しているらしいけど、元々大量生産できる様な物じゃないらしくてね。少ない感染者に配れるだけの薬を用意できていない。だから正規販売はすぐに売り切れて、裏ルートでは高値で捌かれてるわ。いつ黒点病が進行して、取り返しのつかないことになるか分からないから、皆必死で手に入れようとするし……買い手は沢山いるから。転売屋は大儲けよ」

成程……確かに、ある程度価値はあるようだ。

絶対数が足りないのであれば、その価値は大幅に向上する事間違いなしだろう。

つーか、その少ない患者に配りきれないって、どんだけ貧弱な生産体制なんだよオイ。そう考えると、生まれ育ったのが地球の日本で本当に良かったと思う。いや、日本は日本で、新薬の認可が下りてねえから使えないとか、そういうパターン結構あるけども。

まあ地球にしても……そして、この世界にしても。どうやらこういった病気に対して、魔術の出る幕は無い様だった。

新しい魔術の開発にはかなりの時間が掛る上に、回復魔術という難しい分野だ。対ウイルス用の回復魔術を作り上げた所で、その頃にはウイルスが変異してしまっていて無意味になる。

そしてそんな事情に加えて、薬という存在があるのだから、誰も個々のウイルスに対する治癒用の魔術を作ろうとせず、僅かに居て

も実用化には踏み切れない。
地球より魔術が発展しているこの世界でコレなのだから、恐らくは地球の魔術が今の段階から進化しても、おそらくこういう類のこういう回復魔術は完成しないだろう。テレビで特集されていた医大の教授が哀れでならないな。
……まあそれはさておき、そうした魔術に頼れない現状で活躍する黒点病の特効薬は、随分と価値が上がっている訳だ。
だからロベルトは、ミラから特効薬を奪ったって事か……って、いや、ちょっとおかしいぞ。
「なぁ、裏ルートの相場ってどの位だ？　今回の俺達の報酬でどうにかなるレベル？」
「ん……どうだろ。多分大丈夫だと思うけど……」
多分……か。
アリスが目を輝かせていた位の大金で、多分購入できる。つまりはやはり結構値が張る訳だ。
「ミラ。ちなみに聞くけど、俺達を狙ったのって、単なる偶然？」
俺の問いに、ミラは答え辛そうに、だが勇気を振り絞る様に答える。
「……はい。偶然です。いくら持ってるとかは考えずに、なんとなく捕りやすそうな雰囲気の人から取ろうと思って……」
ふとアリスをみると、まるで心臓に何かがザクっと刺さった様に

のけぞりそうになっているが、まあそれは別にどうでもいい。大事なのは、俺達が大金を持っていたから狙った訳じゃないという事だ。

「……何もかもが穴だらけだ」

ロベルト……いや、ロベルト達と言うべきか。あの場に現れたりした時点で、デメリットしかない謎の行動といった感じだったのに……その行動が、今のミラの回答で更に訳が分からなくなった。
あの薬を代償に、ミラにスリをさせた。そんな事をしなくても、あの薬を裏から流せば、より確実に金を入手できるのにだ。
あの男のとった行動からは、いくら考えてもメリットが浮かびあがってこない。何度も言うが、愚策中の愚策。愚策すぎて逆に思い付かないレベルだ。

「なんで薬を裏で回さなかったんだ……マジで意味が分からねえ」

「分からなくても仕方が無いと思うわ。きっと、正しく認識している人なんて誰も居ない。今までも色々世間を騒がせる様な事をしているけど、結局その意図を掴めたことなんて一度も無いもの」

……つまりは、今までもロベルトは、同じ様に何かをして来たんだろう。

「今回もそう。黒点病の薬を持った人を狙って、奪って、それを返す事を代償にミラちゃんにさせた様な事をさせている。実際に立ち会ったのは初めてな私でも、状況を聞けば名前を挙げられる位の回数をね。そして、それだけ被害者が増えても誰も、その意図は掴めない。だけど、彼が今までして来た事。そして今回の事。それを全部ひっくるめて、皆が口を揃えて彼の事をこう言うわ」

アリスは一拍開けてから、それを口にする。

「……悪意の塊ってね」

悪意の塊……か。

ロベルトがこれまで何をやってきたのかは知らない。だけど、今回の一件に立ち会っただけでも充分に頷ける。

ミラにした様な事を別の誰かにもやっている。そして、それに準ずるか、あるいはそれ以上の事を今までやってきた。その意図はまるで不明。不明すぎて、人が苦しんでいるのを見るのが楽しいからやっているんじゃないかと思えしまう。それを見るために、態々俺達の前に躍り出てきたんじゃないかと考えてしまう。

だとすれば間違い無く……悪意の塊だ。

だけどそう考えると……やはりあの言葉が引っかかる。

『それでも、この人の事を他人に悪く言われるのは……我慢ならねえんだ』

これは完全に俺の直感の話で、なんの信憑性もありはしない事だけど……俺には、あの青年があまり悪い奴に思えなかった。特に明確な理由なんてのは無い。実際に加担していたのは確かだし。だけど……纏っていた雰囲気ってのが、なんとなく悪人とかのソレとは違う気がしたのだ。そもそも悪人らしい悪人と対峙したのが佐原とロベルト位な物なので、違うも何もないのかもしれないけれど……もし、アイツが俺の感じた通り、悪い奴では無かったとすれば。

どうしてアイツは、間違っているのを知っていて、ロベルトの考えを歪んでいるとまで称して、それでもロベルトに加担するのだろ

うか。
どうしてそれでも……ロベルトが非難されるのを、ああして拒んだのだろうか。
それはただ純粋に、弱みでも握られているのかもしれない。だけど、そういった風にも見えなかった。だとすれば……アイツは、俺達が知り得ない意図を知っているのかもしれない。
たとえ考えを理解でき無くても、その理解できないほどに歪んだ考えの先にある意図を、あの青年は知ることが出来たのかもしれない。
知った先に……何かがあった。だから加担した。その何かは、そうさせるだけの物だった。
だとすれば、その何かとは一体何なのだろうか。
……まあそもそも、この考え自体が、あの青年が善人であると仮定した、仮説の上に建てられた仮説でしかない。これ以上考えた所で、俺の持つ情報だけでは、正しい答えを導き出す事は不可能だ。
「悪意の塊……か」
俺もそう思っているけれど……本当に、そう思われるべき人物なのだろうか？
結局この後、その鍵を握るであろう青年の話も少しだけ話題に上がったが、ロベルトと行動を共にしている人物程度しかアリスも知らないらしく、ミラに至ってはロベルトと同じ様にしか見えちゃいない。だから、結局何も分かりはしない。
モヤモヤだけが残り、あまりにも不完全燃焼な話だが……これ以上、今の俺達が踏み込める事じゃ無い。そう判断した俺は、一旦諦

めて話の舵を切る事にする。

「まあ何にしても、その薬を取り戻せてよかったよ」

ロベルトや青年がどういう考えで動いていようが、ミラが被害者だったという事は変わりはしない。薬が戻ってきたという状況は、好転以外の何でもない。

「はい！　ありがとうございます！」

ミラはもう何度目か分からない様な感謝の言葉を述べる。アリスにも許されたからだろうか、なんとなく元気になった気がする。

「……あ、そうだ」

取り戻すといえば、俺達も大切な物を取り戻す為にミラを追ってたんだった。

「とりあえず、お金、返してくれるかな？」

俺は右手を差し出す。

例えロベルトという大本の問題は解決していなくても、ここでお金を返してもらえば、ミラとの一件は無事解決だ。

「……あ」

そこでアリスは何か思い出したように、声を上げ、少しだけ嫌な予感でも感じたかの様な表情を浮かべて俺達に問う。

「裕也達……川に落ちたんだよね？」

「ああ、そうだな。おかげで全身水浸しで……」

なんとなく、途中で察した。そしてどうやらミラも察した様子。

そして俺達の心中を、アリスが代表して言葉にする。

「封筒……というよりお金、大丈夫？」

全身びしょぬれなのに、冷や汗が拭き出てきた瞬間だった。

14　小さな決意

お金の入った封筒を持ったまま、川へとダイブした。
その事実は、考えてみれば相当に恐ろしい事なのではないだろうか。
場合によっちゃ札束が……いや、封筒ごと消えてなくなっているかもしれないし、そうでなくても中見が水でぐちゃぐちゃになっているのは明白だ。
乾かして使えるなら良いけど……使えなかった場合、この世界の銀行的な場所で新札との交換はできるのだろうか。

「あ、いや、あの……」

ミラが顔を青くして、一歩一歩と後ずさる。

「だ、大丈夫大丈夫。例えアレな事になってても、俺達今更怒ったりしないから……なぁ、アリス」

「え、あ……うん」

「なんで一瞬言葉詰まらせた」

いや、まあ気持ちも分からなくもないけどな。死に掛けたもんな、報酬を得るまでの過程で。

「まあ不可抗力とはいえ、跳び込んだのは俺の所為だし……ミラは悪く無い。俺が保証する」

「あ……それってつまり裕也が悪いんじゃ……」

「不可抗力って言っただろ。そこ考慮してくれません？」

そもそもあの場で飛びこまなきゃ、取り戻す事自体が出来なかっただろうに。

「第一、まだ駄目になってるって決まった訳じゃないだろ。ミラ、封筒はちゃんと持ってるか？」

「は、はい。それは大丈夫です。走ってる時に服のポケットに入れてたので」

確かに、服に付いてたボタン付きのポケットが結構膨らんでいた。どうやら水の底という事は無いらしい。良かった良かった。ついでに俺も沈まなくてよかったよ本当に。

「で、でも……封筒はあっても、見るのは怖いです」

「でも、見ない事には始まらないだろう」

「う、うん。大丈夫。怒らないから。どんな状態でも怒らないから、とりあえず見せてくれないかしら」

アリスのその言葉の後、観念した様にミラはゆっくりとそれなりに分厚い封筒を取り出す。

「……おぉ！？」

目に入った光景に、思わず変な声が漏れ出してしまった。

何しろ取り出された封筒は、湿り気一つない、俺達が受け取ったそのままの状態だったからだ。

「あ、あれ？　なんで濡れて無い……」

ミラも安心した様な、でもどこか腑に落ちない様な表情で首を傾げる。

「ちょっと貸して」

アリスはミラから封筒を受け取って、中のお札を取り出し、扇状に広げて行く。どうやら中身のお札も濡れていない様だ……って、ん？

「なんか挟まってね？」

札束の中に、白い紙きれが混じっていた。まさかとは思うが、かさ増しでもしたつもりなのか？

……と一瞬思った物の、たかが紙きれ一枚でそう厚さが変わる訳が無い。アリスが札束から抜き取ったソレには、黒いペンで文字が書かれていた。

恐らくはリアが何か書いて挟んでおいたのだろう。何が書いてあるかと言うと――、

「……なぁ、なんて書いてあるんだ？」

――俺には全く読めやしない。

少なくともアルファベットではないその文字列は、日本語と、漢字のおかげで何となくぼんやりと読める中国語、そして簡単な英語ぐらいしか理解できない俺では、全く読む事が出来やしない。おそ

らく、地球にあった様な文字では無いのだろう。
喫茶店のメニューなんかを見る限り、数字ですらこの世界の者と地球の者では違っている。これは全く読めないという現実を直視して、真剣に勉強しなければならないのかもしれない。でないと生活していける気がしないぞオイ。
そして……文字も読めないのかよといった風に、ミラが戦慄を覚えた様な表情を浮かべてこっちを見ているのが痛い。そろそろ、俺の事情説明した方が良いんじゃないですかね。
まあ事情を知っているアリスは特に変な表情を浮かべるわけでも無く……いや、少しだけ参った様な表情を浮かべてその分を読み上げる。
「『浮かれて不注意になったアリスさんが何かやらかした時の為に、一応魔術で防水加工された者を使わせていただきました。お役に立ったでしょうか？』……だって」
なんというか……リアの気が利き過ぎる！　もう気が利きすぎて、かえって相手を怒らせちゃうレベル！
……いや、助かったけども。助かったんだけども……良く考えるとこの文普通にアリス煽ってね？　俺の気の所為？
「ま、まあ金が無事だったんだし、いいじゃねえかよ」
「う、うん……」
その言葉の後、俯きながら小さな声で「私、そんなにダメかなぁ」という呟きが聞えたけど、そんな心配されるって事は駄目なんじゃないですかねぇ。

……まあ、少なくとも、その分いい所も両立しているんだと思うけど。

俺がそう考えていると、アリスは突然思い出したように顔を挙げて、今更な事を口にする。

「そういえば封筒で思い出したんだけど……昨日の念写魔術の写真と、ドラゴンの皮膚。どっちも渡すの忘れてたのに、報酬貰っちゃってる」

確かにそうだ。良く考えると、折角証拠取ってきたのに、渡してねえ。

そういえば、今朝出かける前に、机の上にでかめの封筒がおいてあった気がするけど……アレがそうなのだろうか。

「これはアレよ。貰う物を貰い忘れてるのに報酬を渡してしまう様なリアちゃんに、私をどうこういう権利なんて無いって事よ」

「……」

いや、ただ単にお前が忘れてきた事を察して黙ってくれたんじゃないかなぁと思うんだが。そしてそもそも家に忘れてきたお前に何かいう権利もねえけどな。

……やっぱり駄目なんじゃないですかねぇ。まあ今この時まで昨日の証拠の事をすっかり忘れていた俺にも言える事じゃ無いのかもしれないけれど。

「えーっと、ドラゴンの皮膚……それに報酬って、そのお金の事ですよね？　あなた達はもしかして……ギルドやってたりするんですか？」

「うん、そうよ。昨日倒したの」

アリスは胸張ってドヤ顔でそう言う。ほんと、効果音にどやぁぁぁとか入れたい位清々しい。

「す、凄いじゃないですか！　アリスさんも強いんですね！」

俺達の会話の中で、俺達の名前を理解したのだろう。ミラはドヤ顔のアリスを更に持ち上げる。

も、っていうのは、俺も強いと言ってくれているのだろうか。まああんだけ追いかけまわしたり、目の前でロベルトと戦ったりしたからなぁ。しかし強いとか言われるのは悪い気がしない。

俺も少しだけ優越感に浸る事にしようか。

……まあ流石にドヤ顔とかは浮かべないけどな。

「うん。私は強い！」

まるで自分を鼓舞する様にそう言った後、一拍開けてからこう続けた。

「まあ……私なんかよりも、本当に強いのは裕也なんだけどね」

アリスはドヤ顔ではなく、薄っすらとした笑みを浮かべて俺にそう言ってくれる。その言葉は嬉しいけど……本当にという言葉がどうしても引っかかって、浮かれた気持ちが冷めていく。

……多分本当の力じゃないんだよな、コレ。

きっとアリスのその実力は、ある程度の努力の賜物なのだろう。そのアリスに、偽りと言っても差し支えない俺の力の方が凄いと言

われるのは、ほんの少しだけ、後ろめたい気分になる。
俺は今までの人生の中で、一般的な高校生と同等程度の努力はして来た筈だ。だけど、面と向かってアリスの言葉を受け入れられる様になるには、きっとそれだけでは足りない。
だから俺はもう少し、前に進むべきなのかもしれない。アリスの言葉に胸を張って返せる様に。
俺が想定している、最悪な事態が起きた時。それを対処できる様に。
この状態になった事はきっと喜ぶべきなのだろうが、それに慢心してちゃいけないんだ。

「……どうしたの？　裕也」

考え込んでたのが表情に出ていたのだろうか。アリスが声を掛けてくる。

「いや、何でも無い」

本当は、何でも無くは無い。
でもそれはマイナス的な方向では無く、寧ろプラスだ。
自分のやるべき事が少しだけ見えた。魔術が日常生活で殆ど活用されていなかった日本ではあまり感じられなかった向上心が、アリスの言葉で、少しだけ上を向いた気がする。

「ならいいけど」

図らずとも俺にそんな向上心を与えてくれたアリスは、そう言った後に少し安心した様に言う。

「それにしても……色々会ったみたいだけど、目立った怪我が無い様で良かったわ」

目立った怪我が無ぃ……ねぇ。

確かに目立った怪我は無いだろう。だけど裏を返せば目立たない怪我はあるという訳で。

「いや、実はな……右肩脱臼してる」

結構平然としているけども、相当痛いからな。物凄い痛いからな。必死に我慢してるからね俺。

「え、ほんと？　そういえば右手がぷらーんてしてるわね」

「とりあえずはめねえといけねえんだけど、やった事ねえしな」

基本的に回復魔術で脱臼を治す事は出来ない。少なくとも、俺が覚えているものではだ。

そりゃ折れた訳では無く、外れているだけだからな。合ってるかどうかも分からない例えだが、回復魔術では砕けて壊れたおもちゃのブロックを治す事は出来ても、ブロックを積み上げて出来た作品は治す事が出来ないといった所か。

はめた後のケアなんかは回復魔術でやれるらしいけど……そこまでは、自分の手なり医者なりにやってもらう必要がある。ちなみに医者推奨だ。

だがまあ……医者に診てもらえば金が掛る。それにそもそもこの世界にはあるかどうか分からないが、健康保険的な物を持っていない訳だし、いくら掛るか分かった物じゃ無ぃ。

しかも俺の財政状況はおそらく不安定と来た。となれば、まずは自力でやってみるべきか。

「はめれるかな……」

正直すげえ怖い。失敗したらすげえ痛そうだもの。

俺が恐る恐る肩に手を伸ばそうとしたところで、救いの手がさし述べられた。

「私がやってあげようか？」

アリスがそう提案してきたのだ。

「ま、マジで？　できんのか？」

「うん。多分ね」

「ごめん。自分でやる」

絶対に乗ってはいけないと脳が全力で警告音を放っていた。なんとなくだが、身を任せれば今より悲惨な事になるのではないだろうか。

「あ、あの……」

そこで遠慮しがちに手を挙げたのはミラだった。

「私、そういう治療の本を読んだ事があるんで、とりあえず知識だけはあるんですけど……」

「マジで？」

これはなんだろう。強引にはめるしかないという選択肢の俺。多分大丈夫と自負してるアリス。知識だけはあるミラ。この状況下でもっとも安全に肩をはめられるのは、ミラなのではなかろうか。

「じゃ、じゃあお願いしてもいいかな」

俺は恐る恐ると言った感じでミラに頼んだ。結局の所、誰がはめようが怖いものは怖い。

「わかりました」

そう言ってミラは、自分の記憶を掘り起こす様に、過去に読んだであろう本の内容を暗唱しはじめる。

「……腰を入れてまっすぐ突き出す」

「なに？　正拳突きでも入れたいの？」

その本……大丈夫？

「や、やっぱいいよ。やっぱいい。後で決心付いたら自分で入れるから」

もう絶対に自分でチャレンジする方が安心だぜこれ。絶対にそうだ。

「自分でやって……大丈夫？」

「少なくとも二人に任せるよりは大丈夫な気がする」

失礼だが事実である。

「……まあ裕也がそう言うなら仕方ないわね。折角私の敏腕テクを見せようかと思ったのに」

「敏腕テクを持ってる人は、多分とか使いません」

「じゃあ多分とか使わない人の所に素直に行きましょ。その位の治療費位なら、報酬金から充分に捻出できるから」

「おう……じゃあ、そうする」

自分じゃ踏み切れなかったが、そう勧められると踏ん切りが付いた。まあきっとコレが正解なのだろう。

「……で、その脱臼以外に怪我は無いの？」

「ん？　ああ、まあな。一応殴られはしたけど、怪我ってもんじゃなかったし、良く分からねえゴム弾も喰らったけど、アレも痛いだけで怪我はねえ」

「ゴム弾？」

「ああ、ゴム弾。なんか貫かれる様な、妙な痛み方だったたな」

俺がそう言うと、アリスは少しだけ考えを巡らせる様に黙りこみ、そして何かに思い至った様に口を開く。

「それ、多分暴徒鎮圧用の魔術弾ね」

「魔術弾？」

「そう。着弾した時に魔術を発動させるの。裕也の世界には無かった？」

「無かったよ。どうも俺の居た世界の魔術は、この世界の物より遅れているみたいだしな」

故に暴徒鎮圧様のゴム弾なんて打ち込んでも牽制程度にしかならない。それどころか、全く動じないまである。

「にしても……暴徒鎮圧用ね」

アリスはその弾を、その効力を、直接見て体験した訳じゃないから、その推測が正しいかどうかは分からない、だけどそれが正しいのだとすれば、少なくともあの悪人は、俺を殺す気など毛頭も無かったという事になるんじゃないだろうか。

……また訳のわからない要素が増えたぞ。答えに辿り付けねえ様な、こんな半端な情報ばっか出てくるんじゃねえよ。モヤモヤしか出てこねえだろうが。

俺は軽くため息を付く。

そして俺達の会話が途切れた事を見計らってか、ミラが不思議そうに俺に問い掛けてきた。

「あの、さっきから裕也さん、ちょっと知らない事多すぎじゃないかなと思ってましたけど……その、俺の居た世界ってのは一体……」

……説明するにはいいタイミングか。

俺は軽く文章を組み立てて言う。

「まあ簡潔に言えば、転移術式でこの世界に飛ばされてきた、違う世界の人間って事だよ。だから文字も読めねえし、黒点病もロベルトの事も何も知らなかった。そういう事だ」

「え……ん？」

ミラはイマイチ理解できないといった風に首を傾げる。
言われてみれば、コレが当然の反応なんじゃねえの？　既に日本の存在を知っていたリアならともかく、よくアリスは俺の言葉を信じたな。異世界の存在とか普通信じねえよ。

「……まあ証拠なんかも何もないわけだし、信じてもらえなくても仕方ねえんだけどさ」

「証拠ならあるわよ」

アリスはそう言って、スマートフォンを取り出した。そういえばアリスに貸してたな。充分に証拠になりそうだ。

「ちなみに……まだバッテリー残ってるのソレ？」
「一回何も映らなくなったんだけど、魔術で電気流したらもう一回使えるようになったわ」
「危ねえ！　でもすげえ！」
なにその原始的な充電方法。そしてそんな無茶苦茶な充電方法を行っても、現状起動できるスマフォすげえ！
……いや、でも取扱説明書に魔術の電流を流すなとか書いてあった気が……まあいいや。これもまた、地球と異世界の魔術の微妙な違いなのだろう。

「えーっと、コレは？」

「いいから触ってみて」

「はい……うわっ！」

「どうどう、凄いでしょ」

「なななんですかコレ！」

そんな風にワイワイやっているのをみながら、俺はその声に掻き消される様に小さく自分の腹が鳴った音を聞いた。

こうしてびしょ濡れで汚れてしまっている服装で飯を食いに行く訳にもいかないだろう。この際どっかで服を何着か購入しておくべきだな。

「ほら、ここをこうすれば……」

「す、凄い……凄いですよコレ！」

もう完全にミラもスマフォに夢中になっている。

……凄い楽しそうだ。すんげえ笑ってるもんな。

元々、明るい子なのだろう。それがさっきまでは暗い顔をずっと浮かべてたんだからさ……ミラがどんな思いで俺達から金を取ったのか、痛いほどに伝わってくる。

そしてそういう事を考えると、やっぱり一つだけ確信が持てる事がある。

ロベルトやあの青年の事は分からない事が多すぎるけど……でも、

間違っているという事だけは間違いない。ミラにあんな表情を浮かべさせて、正しい事の筈が無いんだ。
まあ正しい事や間違っている事の判断基準は、主観の問題だ。だけど……俺が正しいと認識しているなら、やる事は決まっている。

あの青年は言った。何処かで会っても突っかかって来るなと。

……知らねえよ。

ロベルトの目的や、青年の思惑。そういう事は一旦頭から外して簡単に事を捉えろ。
アイツらは間違った事をしている。だったら……それを止める。当然此方から探すなんて熱心な真似はしない。別に世界の平和を守るスーパーヒーローにでもなりたい訳じゃないからな。

ただ……何かした所を見つければ、容赦無く突っかかる。無理矢理にでも首を突っ込む。
疑問の解を知るのは、きっとそれからでも遅くは無い。
俺はワイワイやってる二人を視界にとらえながら、静かにそう決意した。

15　自尊心を守る壁

「今日はえーっと、ありがとうございました、でいいんですかね」
「謝るよりもいいんじゃねえの？」
しばらく続いたスマフォ祭りも終焉を迎え、ここで俺達はミラと別れる事にした。
ミラはそろそろアルバイトの時間らしいし、俺は脱臼の治療に行かなければならない。ちなみにミラのバイトは運び屋だそうだ。確かに足超早いし、荷物運びとか凄い有能そう……って、駄目だ。運び屋って聞くと、どうしてもあのおっさんを思い出す。実は昨日夢で引き殺された。
まあとにかくそういう訳で、俺達はこれで分かれる事に。
「じゃあ改めて。今日はありがとうございました」
そう言ってミラはニコリと笑う。本当に初めて出会った時とは大違いだ。
「今度、また会う事があったら、その時は日本の話、聞かせてください ね」
「おう、いつでもいいぜ」
「あと、それから……」
ミラは一拍開けてから俺達にこう頼み込む。

「何か困った事があったら、その時は裕也さん達に依頼してもいいですか？」

「いつでも来なさい。安くするから」

「……はい。よろしくお願いします！」

アリスの言葉にミラは笑ってそう答えた。

「じゃあ、また今度な」

「はい。それでは！」

そう言ってミラは小走りで駆けて行く。スピードを見る限り、魔術は使って無さそうだけど、小走りというには無茶苦茶早い。アレ、スポーツやったら上狙えるぞ。

「……さて」

アリスは視線を此方に向ける。

「とりあえず病院行きましょうか。あ、でも先に服とか買いに行く？　結構汚れてるからこれを期に」

「まあ買わなきゃ行けねえのは間違いねえよ。俺、服コレ一着しか持ってねえわけだしな」

だから出来る事なら今日中に買っておきたい。正直出来る事なら着替えてから医者に行きたいもんだ。

「でもまあ……服は後だ」

「どうして？」

「こんな状態で戦っておきながら言うのもなんだけどさ……右肩脱臼したまま着替えるなんて恐ろしい事出来ねえよ。動かしたくねえもん」

今でも充分に痛いのに、それより更に痛いとかマジ勘弁してくれ。戦ってる時は緊張感とかで我慢できても、こんな普通の雰囲気でこれ以上の激痛とか耐えられないからな？

「……本当によくそんなんで戦えたわね」

「ほんと、人間成せばなるもんだな」

「じゃあ着替えも成せばなるかもよ？」

「……ならない」

「成す前に諦めてどうすんのよ……」

アリスは呆れた様にそう言ってため息を付くが、無理なもんは無理だ。

「……ま、私はどっちが先だろうが、別にいいんだけどね」

そう言って話を切った後、アリスは一拍開けてから俺に言う。

「とりあえず、お疲れ様」

「……おう」

確かに、本当に疲れた。
今は肩の痛みにばかり頭が行っているが、この痛みの事がなければ、多分疲れにばかり頭が行くだろう。

「ねえ、裕也」

「なんだよ」

「裕也は……本気で戦った？」

アリスは俺の垂れ下がった右腕に視線を向け、そう尋ねてくる。
……アリスが言わんとしている事は、なんとなく理解できた。

「途中からな。最初は手ぇ抜いてたよ。俺の世界じゃこんな力を人に振るった事はなかったからさ……本気でぶん殴ったら殺しちまうんじゃないかって思ったしな」

その考えが脱臼を招いた。今回は脱臼で済んで良かったが、今後同じ様に誰かと対峙して、俺が手を抜けば……そのまま俺が殺される可能性だってある。
アリスが伝えたい事も、きっとそういう事だ。

「裕也の気持ちも分かるけど……絶対に勝てるって確信でもない限り、手を抜いちゃ駄目よ。じゃないと……裕也が死んじゃうかもしれないから」

自分で理解したつもりの言葉でも、こうして改めて言われるとそ

の重みがより伝わってくる。

「心配しなくても、魔術を使って戦わなければならない相手は、そう簡単に死んだりしない。だからこれからは全力で戦って。例え今日みたいに治せる怪我で済んだとしても、辛そうな表情なんて、好んで見たいものでもないから」

「……ああ」

きっと実際にこうして大怪我を追うまで、俺は学生の喧嘩のレベルを超えた魔術師同士の戦いを、まだ喧嘩と同じ様に考えていたのかもしれない。

勝とうが負けようが、大半は一線を超えない。だけど、地球だろうがこの世界だろうが、喧嘩の範疇を超えれば、その一戦はゆうに超えてしまう。

まるで違うんだ……俺が、人の問題に首を突っ込んでしてきた喧嘩とは。

「今度からは、そうする」

こんな無茶苦茶な力を人に向かって全力で振るう事に対しての抵抗感は、そう簡単に拭えやしない。だけど……きっと次は無い。次は肩だけで済みやしない。

手を抜ければ負ける。俺は地球に居たころと比べて遥かに強くなっているが、まだ精々そのレベルなのだ。そんな、戦った後の事なんて考えていられない段階なんだ。

その事実を胸に刻め。そんな甘い考えを実行したければ、もっと強くなれ。

その為にも……俺はこの痛みを忘れない。

「次からは全力でやるさ」

「うん、それでいい」

アリスは少し安心した様にそう返してきた。
大丈夫……もう変な心配はかけたりしない。

「でも、今の会話でようやく一つモヤモヤが解けたわ」

「モヤモヤ？」

「裕也は喧嘩に負けてこの世界に飛ばされたんでしょ？　そんなに強いのに、どうして負けたのかなーとか、一体どんなに凄い人と喧嘩したのかなーとか。でもきっと裕也は、そんな事を考えて、手を抜いていたのよね」

……それは違う。全く違う。
あの時の俺は全力だった。肉体強化を発動させ、全身全霊の力を込めて佐原に拳を叩きこんで、それを受けとめられたんだ。だから俺は此処に居る。手なんか抜いていない。

アリスが抱いている俺の強さは、所詮幻想にすぎないのだ。
だけどその幻想を壊してしまうだけの勇気もまた、弱い俺は持ち合わせていない。

「まあ……そうだな。手ぇ抜いてて負けた」

平然と嘘が零れ出す。ちっぽけな自分を隠す為の、壁を築き上げる。

「やっぱりね。そうだと思った」

アリスはそう言って笑う。
そんなアリスに、俺は少しだけ目を合わせづらかった。
少なくとも、今の俺じゃ胸なんて張れやしない。

「こうなったのが裕也にとって良かったのかどうなのかは分からないけど、手を抜いたから異世界に飛ばされるなんて事になったの。だから……本当に、気を付けなさいよ」

心配してくるアリスの声を聞いていると、無性にこう思う。何度だってこう思う。
アリスに俺は強いんだって、胸を張れる位に……俺は、強くなりたい。

「分かってる。心配してくれてあんがとな」

「当然よ。私達は仲間なんだから」

そう言ってアリスはまた笑ってそう言う。
……仲間、か。
俺はそんな仲間に今日、一つ嘘付いた。
自分の自尊心を守るために、その信頼に縋りつつ居た。
その嘘を告白できる日が、いつか来るのだろうか。

「じゃ、行きましょ？」

「ああ」

俺はそんな思いを抱きながら、アリスと共に病院へ向けて足取りを進める。
アリスの隣を歩く足取りが、ほんの少しだけ重かった。

15　自尊心を守る壁（後書き）

次回から、本格的にギルド活動の話をやって行けそうです。

16　ギルドランク

結局、あの後病院へ行く事は無かった。
たまたま休みだったとかそういう訳じゃない。ただ単に、躓いて転んだ際に地面と右肩が直撃。奇跡のドッキングを果たしたので、行く必要がなくなっただけである。

とまあ言葉にするだけなら簡単だが……正直死ぬかと思った。

この世界に来て、ドラゴンと戦い、トロールと戦い、そしてロベルトと戦い、特に最後の戦いでは脱臼を含めそう問う名ダメージを負った筈なのに、実感的に一番酷いダメージだったのは肩が嵌った時ってどうなのよ。マジで多分、一瞬気絶してたぞ。

でも流石にそれで死にはしない。その後、しっかりと回復魔術でケアを行い、終われば服を買いに行き、そして結局食べそこなった昼飯を兼ねた晩飯をアリスと共に食べに行き、就寝。
そうして、また朝が来る。
目覚めは……最悪だ。

「……あのおっさんも、脱臼も完全に俺のトラウマになってんなオイ……」

本日の夢は、例のおっさんに撥ねられ、一命を取り留めたものの右肩を脱臼するという物だった。頼むから、明日の夢には出てこないでほしい。体は楽になっても、精神的に回復しない。

「まあいいや……とにかく、起きよう」

俺はアリスから借りてる部屋のベッドから降り、昨日買って用意してあった服に手を伸ばす。
一応現代日本のポピュラーな服装とはズレた異世界ファッションな訳だが、あまりにもズレているという訳では無いので、あまり着る事に違和感は無い。
にしても俺がこうして中世風だと思ってる服装って本当に中世風なのか？　俺が読んでるファタジー漫画の服装が中世風と呼べるのであれば、そうなのだろうが。
そんな事を考えながら服を着て、リビングへと向かう。

「あ、おはよう裕也」

リビングには既にアリスがいて、昨日の様にコーヒーを呑んでいた。

「アンタも飲む？」

「頼む」

昨日と同じ様な流れでコーヒーを淹れてもらう事になった俺は、アリスの前の席に座る。

「……もう十時じゃねえか」

文字が読めない俺でも、時計位は理解できる。
部屋に掛けられた時計の針は十時を示しており、俺が日曜日でもなければ寝坊と評される様な時間に起床した事を告げていた。

「一応八時半位に起しに言ったんだけどね、なんか楽しそうな夢で

も見てるんじゃないかって思わせる様な寝事喋ってたし、起すに起せなかったの」

そう言いながら、アリスはコーヒーを淹れ、俺の元へと持ってきた。

「あ、ああ、そうか……」

そういえば、どんな夢かは思い出せないが、おっさんに撥ねられる前までは楽しい夢だった気がする……起せよ、悪夢に変わる前に。

「あ、そうそう。アンタが楽しい夢を見ている間に、こっちにもいい事があったわ」

「いい事？」

「依頼の電話が来たの」

アリスは嬉しそうに笑ってそう言う。

「連続で仕事が回ってくるなんて、なんかこう……軌道に乗った気がする！」

そう言ってアリスはガッツポーズ。ほんと、今までどんだけ仕事無かったんだよと、同情すると同時に、今後の先行きが不安になってくる。

「ちなみに、どんな仕事だ？」

俺がコーヒーを啜った後にそう尋ねると、アリスは少しだけ悩む

様に答える。

「護衛……いや、この場合警備なのかしら？」

「まあ何にしても、何かを守る仕事って事か？」

「そんな感じ。とある大企業のお偉いさんに誘拐予告が出されちゃってね。それを阻止する為に、複数のギルドに依頼を出して厳重に警備するらしいわ。で、それがウチにも回ってきた」

……なるほど。

「……まあ大体分かったんだけど、大企業って事は相当金とか持ってんだよな？　で、ウチのギルドはお前と俺しかいない、言っちゃなんだが弱小ギルド。お金持ちが雇う対象になるのかよ」

おそらくは有名なギルドを集める事だろう。だとすれば、どうしてその中に俺達を加えるなんて事になるのだろうか。

「まあ普通はならないでしょうね。規模はどうであれ、ギルドってのは結構乱立しちゃってるから数はある。私達を呼ぶくらいならランク持ちのギルドを呼ぶでしょ」

ランク持ちという聞きなれない単語は出てきたものの、話の腰を折ってまで聞く事でもない。今聞きたいのはそこでは無い。だからそれは後だ。

「じゃあ結局、なんで俺達が選ばれた」

「裕也のおかげとでも言っておこうかしら」

「俺のおかげ？」

「そう。昨日のロベルトとの戦いを目撃した人がいたみたいで、偶然裕也の情報が依頼主に届いたの。そこから情報屋経由でウチのギルドに辿りついたってわけ」

多分俺の事を把握してそうな人って、リア位から、そこに調査依頼を出したら知人だったたって事だろうか。
まあ俺の情報の出所は別にいいんだ。

「でもそれだけで、そんな無名のギルドを探し当ててまで依頼するのか？」

「ま、そこは普通なら微妙な所でしょうね。でも……今回に限っては、裕也にそうするだけの価値があったのかもしれないわ」

「というと？」

「その誘拐予告を出したのが、ロベルトなのよ」

……ああ、そういう事か。
俺はアイツを返り打ちにした。つまりはロベルトより強いと認識されている訳だ。
そんな中でロベルトが誘拐予告を出せば、依頼が来るのも一応頷ける。

「だから依頼主は裕也目当てで私達に依頼した。一応受けるとは言ったけれど……良かったわよね」

「当然だろ。断る理由はねえよ」

このギルドのトップはアリスだ。アリスがやると言ったらやる。それに……もしかするとこの一件に関わる事で、俺の中のモヤモヤが解決するかもしれない。

だとしたら断る理由なんてどこにもねえよな。

「で、色々と詳しい詳細は？」

「詳細っていうと待遇とか？　それはもう、結構な額を提示されたわ。流石大企業」

「いや、そういう事じゃなくてだな、当日の動きだとかの、警備を行う上で必要な情報の詳細な」

「ああ、そっちね。それは後で律儀にも、説明に来てくれるらしいわ。電話で伝えられても、警備に付く前に口頭ででもどっちでもよかったんだけど、あっちが一度お伺いしたいって」

「いつ来るんだ？」

「二時頃」

……まだ結構時間があるな。

「それまでどうする？　案内兼ねてまた何処かに行く？」

「いや、また何かに巻き込まれでもして間に合わなくなったらまずいだろ」

まあそうそう何かに巻き込まれるもんでもないと思うが。

「そうね。じゃあ昨日一昨日と色々あったんだし、ゆっくりしてましょうか」

「そうだな。」

本当に、この世界に来てから色々ありすぎたよな。睡眠時以外にまともに休んだ記憶がねえ。

時間が空いたからと言って、無理に動き回る必要なんてない。きっと日曜日のお父さんは大体こんな感じ。

「……そうだ」

まあこうして暇な時間ができた時こそ、さっきの疑問を解決しておくべきだ。

「ん？　どうしたの？」

「ああ、ちょっと気になったんだけどさ……さっき話に出てきた、ランク持ちって何の事だ？」

まあなんとなく意味合いはあ予想できるが、それでも詳しい事が分からないのなら、ギルドに所属している身としては聞いておくべきだ。

「そういえば話してなかったわね……じゃあ簡単に説明してあげるわ」

「よろしく頼む」

難しく説明されても困るからな。

「まずギルドとして活動するには、ギルド協会に申請しなくちゃいけないの。そして登録した際に基本的にはDランクの称号が与えられる。そこから功績などに応じて、ランクは最高Sランクまで上がって行くの。ここまで聞いて分かったと思うけど、ランクっていうのはギルドの格付けみたいな物よ」

うん……まあ、大体予想通りの回答だったよ、ただ一か所を除いたら。

アリスの説明によれば、登録する事によってDランクが付与される。即ちDランクが最低ランクという事になる。

だけどさっきまで俺は、最低ランクはそのランクすら貰えていない状態の事を指すと思っていた。なぜなら、アリスの言葉を考えるに、ウチのギルドはランクが与えられていないであろうからだ。

つまり……どういう事だよ。

「えーっと、アリス。なんで俺達にはそのランクが与えられていないんだ？」

俺が単刀直入にそう言うと、アリスは言いにくそうに答える。

「言ったでしょ、基本的にはって。その基本から外れる例の一つが……そもそもギルドを構成する為の最低人数に達していないとか」

「何人いるんだ？」

「最低四人」

……二人足りねえ。

「まあ協会の方が回してくれる様な仕事はDランクもランク無しもそんなに変わらないけど……協会を通さず直接依頼してくる人は、やっぱりランク付きに頼むでしょ」

……だからあまり仕事が無いのよ、とアリスは肩を落として言う。

仕事が無い。活躍できない。宣伝できない。人来ない。故にランク上がらず、仕事無い。なんだこの負のスパイラル。

……これ、端から四人集めて結成しないと詰んでるんじゃないのか？

俺は思わずげんなりしそうになるが……それでも、恐らく他のランク無しと、このギルドは違う。

一応アルドやリアといった情報屋のバックアップを受けているし……今日、こうしてランク無しのギルドには来ない様な依頼も獲得できた。アリスがさっき言った通り、軌道には乗っている筈。

だからきっと……残り二人位集められる。

「まあ今はあんまり仕事ねえかもしれねえけどよ、今回の仕事でランク無しでも依頼が舞い込んでくる様に派手に活躍して、依頼も人も集めて、さっさとDランクに上がっちまおうぜ。軌道に乗ってんだろ？」

「……そうね」

アリスは薄っすらと笑みを浮かべてから俺に言う。

「じゃあ……次の仕事、頑張りましょ！」

「そうだな――」

目の前の仕事は、俺のモヤモヤの事を取り除いたとしても、そう簡単にこなせる物じゃないだろう。それはきっと、これから先に受ける仕事だって変わらない。前途多難だ。
だけど……ギルドとして、向かうべきところは把握した。
ならそこに全力で向かってみようじゃないか。
そしてその道のりで、俺が付いた嘘の壁を壊せると思えるようになればいい。胸を張って肩を並べられる様になればいい。
その為に、まずは第一歩だ。

「――絶対に成功させようぜ！」

「おーッ！」

まだ詳しい話も聞いていないない段階だけれど、こうして俺達のモチベーションは最高潮になったのだった。

１６　ギルドランク（後書き）

次回、最初のドラゴンの件を除けば、２７話にして初の依頼人登場です。

１７　依頼人

その後、やや高ぶったテンションを抑えた後に、時間潰しの為に俺達が行ったのは、アリスの家の棚に仕舞われていたチェスだった。

にしてもこの世界にも当たり前の様にチェスがあった事にはやや驚いたが、まあその辺は結局人間考える事は同じという風に考えてもいいんじゃないだろうか。一応外の外観を考えれば、チェスとかがあってもおかしく無いわけだし。

まあそれはそれとして、時間潰しに始めたチェスは、あくまで時間潰しだ。だから俺達は依頼の件も含めた適当な雑談を交わしながら、盤上の駒を動かしていく。

「にしてもさ」

俺はふと気になった事をアリスに尋ねてみた。

「今回狙われてるお偉いさん……企業の社長だっけ？　何をしてる会社なんだ？」

さっきは一々話の腰を折るのもアレだったからという理由で聞かなかったが、一応聞いておきたい。何をしたら誘拐何かされるのか……いや、ロベルトの考えが意味不明な以上、何もしてなくても誘拐されそうだけども。

「ヒント。今ロベルトがやっている事関連」

「……黒点病の薬作ってる所か」

「正解」

アリスはそう言って駒を進める。

「……アイツ、黒点病の薬に恨みでもあんのか？」

「さあ。やる事成す事全てが突拍子もなく意味のわからない事ばかりだから。分かる人なんて本人達位じゃないの」

「そうだな……あ、チェック」

「え、あ……ぐぬぬ。これで」

「チェック」

「じゃあこれ！」

「チェック」

「く……」

「チェック」

「……」

「チェック」

アリスは必死に起死回生の一手を考える様に唸るが、どう足掻こうともうチェックメイトである。

「……駄目だ。チェックメイト。参りましたぁッ」

「とりあえずコレで七連勝って所か」

どうもアリスはチェスが相当苦手なようだ。俺だってオンラインでたまにやる程度の実力なのに全く負ける気配がしなかった。

「裕也強すぎ」

「お前が弱いだけだろ」

想像を絶する位の弱さだった。なんというか、自ら見えてる地雷原に突入している感じだったもん。

「ま、まあこの失態は仕事で返すから」

「……そこの所は真剣に頼むぞ」

もう嫌だからな。始めて会った時の様な、生死を彷徨う様な状態のお前を見るのは。

でもまあ、あの時とは状況が違う。仮にそうなりそうな事態に陥っても、今は俺が居る。一人より二人だ。人数が増えれば状況も変わってくるだろうし、そう簡単にああいう事にはならない筈だ。

……というか絶対にさせない。

アイツらが何をしようとしているのかは分からなくても、それだけは絶対に回避する。どんな理由があろうと関係ない。

そのためにも、しっかりと依頼主の話を聞いておかねえとな。

「……で、そろそろ二時だな」

途中で昼食を交えたのと、アリスがやたらと長考する為、気が付けばもう二時である。

「そうね。もう来てもいい頃かしら」

その人が十分前行動を心掛けているとすれば、そろそろ依頼主がやって来てもおかしく無いだろう。

チェス中の会話で出た話だが、今回依頼の電話を掛けてきたのは秘書の女性だそうだ。

アリスはその人の事を律儀と言ったけど、チェス中にアリスが言っていた事を思い返すと、確かにそれは間違っていないのかなという感想を浮かべた。

アリス曰く、警備などの依頼、それに複数のギルドに同時に依頼するとなれば、詳細は電話や当日などの口頭説明で済まされる事も多いらしい。

にも関わらず、こうして出向いてくれるというのは、律儀と言ってもいいのではないだろうか。

……折角態々来てくれるんだ。あまり失礼な対応は出来ないなと思う。

「ちなみに一応聞いとくけど、茶菓子の準備とか出来てる？」

いや、聞いといてなんだけど、この世界にそういう文化があるのかは分かんねえけどな。

「……しまったぁ……ッ」

「……何してんだよ」

「いや、だって慣れてないし……普段殆ど依頼ないし……」

額を抑えて俯くアリスに、俺は思わずため息を付く。

慣れる慣れない以前の問題じゃありませんかね、ソレ。

「……大丈夫かな？」

「多少心象は悪くなるんじゃねえの？」

「……やっちゃったぁ……ッ」

本当にしっかりしてほしい所だが、もう嘆いても仕方が無い。時間も無いし。

ここで失敗した分は仕事で挽回するしかない。

そんなやりとりがあった直後、玄関の扉がノックされる。

「来たぜ、依頼人」

「……買っておけばよかった」

「もう行ったって仕方がねえだろ。ほら、行くぞ」

俺はアリスを促して立ち上がり、共に玄関へと足取りを進めた。

◆◇◆◇

ギルドは本来、所謂事務所の様な場所を構えているらしい。
だが残念な事に俺達には金が無いので、アリスの家が実質事務所の様な機能を果たす事になる。
となれば応対するのは客間という訳だ。
「すみません。茶菓子の一つも用意できなくて。なにぶん急でしたから」
「あ、いえいえ、お構いなく。こちらも急に押し掛けてすみません」
「いえいえ。充分時間があったのに、なんのご用意も出来なかったのは此方の落ち度です。誠に申し訳ございませんでした」
俺は依頼人である二十代前半程の女性に対して、とりあえず腰を低くしてそう頭を下げる。
本当になんの用意も出来なかった。茶菓子は勿論、コーヒーですらさっき俺達が飲んだ分で切れてしまっている始末。
挙句の果てに名刺交換の様な流れになった訳だが、それもまあ無かった訳で。こちらだけが一方的に貰う事になってしまった。
リリーブ社。アイネ・フランツ。その下に電話番号が書かれてある。
本当はこっちもこういうのを用意しとかなくちゃいけないんだよな。そこは日本もこの世界も変わらない。
……ところでえーっと、あってんのか。これ、お客さんに対する言葉使いであってんのか？
チラリとアリスの方を見ているが、当のアリスは呆けた表情で俺

の方を見てボソリと呟く。
「裕也のキャラが……変わった」
「馬鹿野郎、社交辞令ってのを知らねえのか」
俺は隣に座るアリスに軽く突っ込むように、ポンと手刀を頭に……あの、出した方も悪いんだけど、こういうお客さんが居る場で白羽取りは止めてくんない？　なんか恥ずかしいぞオイ。
「なんだか面白いですね、あなた達」
ほら見ろ、アイネさん笑ってるじゃないか。
「ああ、それと、別にそんな慣れない敬語は使わなくても結構ですよ」
「……慣れてないって分かりました？」
「まあ少しぎこちなかったかなと」
……マジでか。不安だったとはいえ、改めて指摘されるとすげえ恥ずかしい……
「じゃあ、あの、えーっと……」
「自然体に、いつも通りの話し方でいいんです。その方が私も話しやすいですから」
そう言って秘書の方は笑みを浮かべる。

「そう言ってくれるとありがたいですけど、流石に目上の人には敬語を使いますよ」

でもまあ、敬語にだってレベルがある。俺が思い浮かべる営業マン的な敬語を止めて、なんとなく先輩に話す系統の敬語に切り替える。これだけで大分楽になるもんだ。

「あ、ちょっと感じ変わった」

「……お前は常に変わらねえなオイ」

常時同じ様な感じなんだけど……どうなのこれ。一組織のリーダーが客に対して取る態度としてどうなの？　先行きが不安になってくるんだけどども……というかそもそも、なんで自然な流れで俺が応対してんだよ。リーダーお前だろ？

……まあ今はアリスがどうこうという内輪の話は置いておいて、やるべき事をやらないと。

俺は改めてアイネさんの方を向き、

「……さて、アイネさん。とりあえず、仕事の話をしましょうか」

「そうですね……ではとりあえずコレを」

アイネさんは持っていた封筒から数枚の資料を取り出す。

「そちらに書かれている内容が今回の警備依頼における所定位置などの情報になります。順を追って説明していきますので、分からな

い所があれば何でも聞いてください」
　渡された資料に視線を落とすと、アイネさんの言った通り、そこには今回の依頼を遂行する為に必要な情報が書き巡らされていた。なんか小難しいんだがコレ。
「くれぐれも、理解しないまま当日を迎える様な事はない様にお願いします。当日も説明がありますが……アレには多くのフェイクを交えていますので」
「フェイク？　どうしてそんな物を？」
　アリスは首を傾げてそう言うが、俺にはなんとなくその意味が理解できた。
　そして俺の考えていた事と、全く同じ事口にする。
「万が一、当日ロベルト達が警備の中に紛れ込んでいた場合、こうしてダミーを仕掛けておく事によって炙りだしが可能になります。まあ人を騙せるレベルの幻術を彼らが持ち合わせているかどうかは分かりませんが」
　もし持っていた場合、誰かと入れ替わる可能性が出てくるからな。妥当な判断だと思う。
　……だから事前の打ち合わせをしに来たんだな。
「では、説明の方に入らせていただきますが、よろしいですか？」
　俺は大丈夫なので頷くけど……なんとなく、隣の奴は心配だ。
「……だ、大丈夫」

とりあえず、余すことなく頑張って暗記しよう。
アリスの言葉を聞いて、俺はそう決意した。

◆◇◆◇

「……以上が、本作戦の概要となります」
「ありがとうございます。これで当日は無事に動けそうです」
アイネさんの説明が終わった後、俺は思ったよりも軽い気分になっていた。
なんだろう。もっとややこしい話かと思ったけど、アイネさんが話上手だった事もあってかすいすいと頭に入ってきた。書面では伝わりにくい事もある。やはり会話というのは大切だ。
……で、案の定隣のリーダーさんは何にも理解していなさそうな表情を浮かべている。何にも分かって無い奴が、分かっているフリをしている時に浮かべる表情をしている。
……あとで俺の方から説明しておこう。
「それにしても……本当に大掛かりな警備ね」
恐らく数少ない分かった所なのであろう部分を拾い上げて、アリスはアンネさんにそう言う。
「まあ我が社とロベルトの間には少し因縁の様な物がありましてね」

「因縁？」
「まあ恐らくあちらは何も思っておらず、こちらが一方的に睨んでいるだけなのかもしれませんがね」
そう言った後、一拍開けてからアイネさんは言う。
「ロベルトは一度、ウチの工場を襲撃しているんです」
「襲撃……ですか」
……アイツ、買った奴から巻き上げるだけじゃなくて、生産元にまで手出ししてたのかよ。
「はい。そこで生産されたばかりの黒点病の特効薬を奪われまして。ただでさえ生産が追い付いていなく、需要と供給のバランスが崩れている時に……酷いと思いませんか？　挙句の果てに、購入者からも奪うなんて事をしている様ですし」
「そうね。酷い話だと思うわ」
……まあ俺もそう思う。
アイツが襲撃して、足りない薬が更に足りなくなった。それは由々しき問題だ。
「……だから皆ロベルトに対して怒りを露わにしていますよ。もちろん襲撃その物の事もそうですが……我々にとって黒点病の特効薬というのは、他の薬とはちょっと違う存在なんです」
「違う？」

「あの薬は、全く採算が取れない。作れば作るだけ赤字になる様な薬なるんですよ」

アイネさんはそう言って、少しだけ笑みを浮かべながら続ける。

「一応国からの補助金は出ています。ですがそれを含めてでも、一般市民が買える様な値段設定にすれば毎年少なくない損失が出る。それだけ生産にお金が掛る薬なんです。だから我が社以外の製薬会社は生産する為の設備なんて何処も導入してません。では、どうしてそんな状態で、我が社が黒点病の特効薬を作っているか、分かりますか？」

「自分達しか作れない……義務感の様な物ですか？」

「まあそれもありますけどね。でも結局のところ黒点病の特効薬を作っている理由の根底にあるのは善意なんです。自分達で言うのもなんですがね」

……善意、か。

まあ言ってしまえば、ボランティアに近い物なのだろうか。お金を取っているので厳密には違うだろうが、方向性はきっと同じなのだろう。

「だから現状でも高い事には間違いないのですが、充分に手の届く範囲にまで金額を落としているんです。大損害と言っていいレベルですよ。だからこそ、そういう思いを踏みにじってまで薬を奪って行ったロベルトは、私達にとって許されざる存在なんです」

そして、とアイネは続ける。

「今度はそうやって私達を引っ張ってきた社長を誘拐しようなどとぬかす訳ですから、もう徹底抗戦するしか無いでしょう」

徹底抗戦……この依頼の側面にはソレがある。

ただ守るだけでは無い。ロベルトを捕まえるという事も遂行すべき依頼の一部だ。

「だから今回の件。よろしくお願いします。あなたには期待していますから」

そう言ってアイネさんは俺に視線を向けてそう言う。

俺に……ね。

……まあ俺はお前に期待してんぜ、リーダーさんよ。

俺はアリスにちらりと視線を向けた後、再び視線をアイネさんに戻し、ちょっと気になった事を聞いてみる事にした。

「ところで、秘書さんってこういう場に出てくる様な役職でしたっけ？　なんか社長を補佐するってイメージで、常に傍にいるイメージがあるんですけど」

この場に社長が来ているならば秘書のアイネさんが居る事に何とも思わないけど、秘書が一人でこうして動く事ってあるのだろうか。

「そうですね。他の企業はどうか知りませんが、普段は基本社長の近くで補佐をしてますよ。だからいつも通り、こういう事は部下に任せて通常の業務を行う筈だったのですが……まあ事が事ですがら。流石に何時も通りにはできませんよ。せめてあなた方だけでも実際にお会いしたかった」

「あなた方だけって事は……もしかして、アイネさんは私達だけに会いに来てるの？」

「はい。他のギルドには部下を行かせています」

「じゃあなんで俺達の所にはアイネさんが来たんですか？　俺達、他のギルドと違ってランク無しですよ」

「……だからですよ」

アイネさんは一拍空けてから続ける。

「ランク無しで実績が殆ど無いが故に、我々はあなた方の事をあまり知らない。だからせめてこの目で確かめたかったんです。雇うにふさわしい方々かを」

まあそれはそうか。
噂だけで辿りついたのなら、その真偽は確かではない。辿りつく過程で膨張している事もある。
だからこの目で確かめる。きっとその判断は間違ってはいない。

「大丈夫よ。裕也はAランク……いや、Sランクのギルドに居てもトップを狙える位に強いから。そして私もそれなりに強いから」

……あの、俺の事良く言ってくれるのはありがたいんだけど、現状ランク無しっていう立場上、堂々と言われるとなんか恥ずかしいんだが……。

「ああ、いえ。そういう事では無いんです。あなた方の実力が確かなのは情報屋の方からお聞きしましたから。なんでも件のドラゴン

を討伐したそうで」

ああ……やっぱリリアから情報を買ってんのな。

「それが分かってるんなら、何を見たかったたんですかアイネさんは」

「簡単な話ですよ」

アイネさんは一拍開けてから言う。

「どんな人達かも知らない人に、我が社の社長の命を預ける事は出来ない。そう判断したから、私があなた方を知りに来たんです。どういう人達なのかを」

「……そんなもんなんですか？　護衛の人員の判断基準って」

「ただの高望ですよ。でもできる事なら、実力以外の面でも信用が置ける人を雇いたいのです」

そう言った上で、アイネさんは言う。

「あなた方は悪い人では無い気がします。安心して任せられそうです」

「……こんな短い会話で分かるんですか？」

「女のカンです」

「カンって……」

なんだよ……この世界の女性って、やたらと自分のカンに自信持ちすぎじゃね？

「やっぱり女のカンって馬鹿に出来ないわね。大正解よ」

「大正解って……それ、俺らが言える事じゃ無いだろ……」

こういうのは第三者が評価して初めて意味がある者なわけで……。だけどアリスが引くつもりは無い様だった。

「まあ確かにそうなのかもしれないけど……だけど裕也は私を助けてくれたでしょ？　そんな裕也がはかりに掛けられているんなら、私は裕也が悪く思われない様に裕也を立ててあげたい。それでどうこうなるかは分からないけど、私の自己満足の為だけでも、そうしておきたいの。別にいいでしょ？」

「お、おう……まあ、いいけど」

何だろう……なんか聞いてると少し恥ずかしくなってきた。いや、まあ嬉しいんだけども。

「……やっぱり、悪い人達ではなさそうですね」

そう言ってアイネさんは笑みを浮かべる。
……だからそんな判断基準でいいんですかねぇ。この人はアレだ。悪い人に騙されそう。なんかすげえ心配。

「……さて」

そう言ってアイネさんは立ち上がる。

「とりあえず判断すべき事はできました。早いですがこの辺でおいとまさせていただきます」

「ああ、はい」

俺達もアイネさんを見送るために立ち上がる。
そして本当にどうでもいいような雑談を交わしながら玄関へと向かい、そして別れ際。
アイネさんは最後に、笑みの中に真剣さを織り交ぜ、こう言った。

「それでは……よろしくお願いしますね」

その言葉を残して、俺にとって最初の依頼人は視界から姿を消す。
そうして玄関先には俺達二人が残された。

「裕也」

「どうした？」

「昼前にも言った事だけど、もう一度。この仕事、頑張りましょ」

「当たり前だろ」

俺は何となく恥ずかしかったので言うべきか迷ったが、まあこう思った事は事実だ。一拍開けてから、心の声をそのまま発する。

「お前に立てて貰ったんだから、頑張らねえわけにはいかねえだろ」

この依頼に向けるモチベーションを、様々な要因が引き上げてく

れる。
ロベルトの事。アイネさんから聞かされた話。ギルドランクを上げる為の第一歩。
本当に、色々だ。

そんな中でもしかすると、アリスの思いに応えてやりたいという事が一番大きいのかもしれない。
当然、それはその時その時で変わってしまう意見だろう。
それぞれの要因が俺に取って大事な事であり、きっとその時何を聞いて何を考えたかで、その感情はきっと大きく揺さぶられる。

だけど今、この時だけは。
アリスの思いに答えたいというのが一番だ。
だとすれば、答えよう。

アリスの思いも、俺がこの一件に抱く様々な感情にも、全て答えよう。

犯行予定日は三日後。

俺は気合いを入れ直すべく、拳を握りしめた。

17　依頼人（後書き）

次回から依頼の話になります。

……やっとです。

18　集う猛者

三日後、俺達は現場へと足を踏み入れる。

「でけえ建物だな」

「まあ大企業の本社だからね。そりゃでかいわよ」

組積造らしいリリーブ社の本社は、高さこそ地球の高層ビルには遠く及ばない五階建てとなっているが、その分横に広い作りとなっている。一体こんなに広くして何に使うんだよとは思うが、それは高層ビルも同じ事だ。マジで何に使ってんだよ。

そんな事を考えつつ、俺達は二階中央にある会議室を目指す。今日はまずそこに雇われたギルドのメンツが揃う事になっているのだが……他のギルドのメンツと顔を会わせるのが、少し億劫になってくる。

なんというか……実力云々は置いておいて、ギルドランク的に俺達は場違いな訳で、俺達をランク無しだと知った際に他のギルドがどんな反応を取るかと考えると、少々気が重くなっても仕方が無いだろう。

……まあだからと言って、情けない恰好は見せられない。

場違いだろうと、俺達も雇われたんだ。堂々と構えれば良いんだ。そしてある程度依頼に関する雑談をアリスと交わしながら歩いていると、会議室の前まで辿りついた。

「此処ね」

「……おう」

扉を開けば、そこに居るのは俺達よりも遥かに格上な者達。

この前アイネさんとの話で把握した情報によると、雇ったギルドの三割程がSランク。そして六割近くがAランクで後はAランクと並んでも遜色の無いBランクだそうだ。俺達を含めて総勢五十名。その何割かが、既にこの扉の先に居るんだ。

「さて、裕也。凄い人達がこの中に居るわけだけど、臆したりしない様に」

「その言葉、そのまま返すよ」

そんなやりとりをしてから、俺達は扉を開いて会議室へと足を踏み入れる。

すると既に半数以上は集まっていた目他のギルドのメンツの多くが、扉の音に反応したのか此方に視線を向ける。

そしてその中の何割かの人の視線から伝わってくる言葉。

……コイツら誰？

多分そんな感じだ。

そして同じ事をアリスも感じたらしい。

「……まあ何処のギルドも有名で、あった事が無くても互いの存在位は知ってる事が多いからね。そりゃ全く知られてない私達が出てくればこうなるわ」

「……予想はしてたけど、結構こういう視線っていたたいもんだな」

そうやって早くもげんなりしてきた俺達の元に、此方に視線をむけてきた男の一人が歩み寄ってくる。

「見ねえ顔だな。何処のギルドのもんだ」

巨体である。

多分二メートルはあるのではないだろうか。人相はヤバいと言っていいぐらい怖い上に、全身が古傷塗れと来たもんだから、正直に言って得る感想はでかくて怖い奴といった感じだ。

……で、何処のギルド、ねえ。

そういやもうこっちにきて大分時間経ってるけど、ウチのギルドって名前とかどうなってんだ？　聞かなかった俺も俺だけど、言わないアリスもアリスだろ。

「シャイニーレイン」

アリスはそんな聞きなれない単語を口にする。

だけどこの流れからして、それがウチのギルドの名前だという事は容易に理解できた。

「シャイニーレイン……聞いた事がねえな。つまりは無名に等しいBランクに上がったばっかのギルドって事か？　良く呼ばれたな」

……どうやらこの御方。此処に呼ばれるのが最低でもBランク以上のギルドだと思っているらしい。

だけどまあ……例外ではあるけれど、それは違う。

「ランクは無い。私達はノーランクよ」

「ノーランク……だと？」

一瞬驚愕の表情を見せる男。いや、まあ予想外すぎたんだろう。大方がAランク以上のこの場において、Bランクですら少数派であるにも関わらず、その三ランクも下。いや、そもそもランクすら持っていない奴らが此処にいるのだから。

「おいおい、冗談だろ？　なんでこんな雑魚が呼ばれてんだ。ここはてめぇらの様な雑魚が呼ばれていい場所じゃねえんだよ」

まるで嘲笑うかのように男はそう言った。

でもまあ、口が良い、悪いは置いておいて、俺達が此処に居る事が場違いだと思うのは、俺達がノーランクだと知った者の当然の反応なのだろう。

だけどそこは仕事で見返せばいい。ここで変に対抗意識を燃やして言い返すと、トラブルになりかねない。

「雑魚？　言ってくれるわね。言っとくけどウチの裕也は無茶苦茶強いわよ。Sランクに交じったって遜色無く戦えるわ」

……いや、ね。そう言ってくれるのはありがたいんだよ。だけど時と場合を考えような、アリス……ほら、見てみろよ。

「はぁ？　つーことはお前、この頼りなさそうな男が、俺と同等に渡り会えるっていいてえのか。舐めた事言ってんじゃねえぞ」

明らかに短気そうな男は、早くもちょっとキレちゃってる感じだ。

……いや、まあ俺も一瞬イラって来たけど。頼りねえとか言われると流石にな。

でもまあ、その言葉は的を射てしまっている。そう考えると、反論する気は失せた。
だけど俺の隣のリーダーさんにその気は無い様だ。
「いや、渡り会えるわ。ね、裕也」
その答えを俺に求めますか。
……でもまあ、いくら男の言葉が的を得ているとはいえ、アリスが知っている今の状態の俺は、決して頼りなくは無い筈だ。なによりここで否定したらアリスの顔に泥を塗る事になる。
「まあある程度はやれんじゃねえのか？　絶対勝てるとは言わねえけど、絶対負けるとも言えねえよ」
「てめぇ……」
俺にまでそんな事を言われて、男はもう完全にキレちゃってるご様子だ。
というかアイネさんの採用基準的にこの人はＯＫなんですか。ちょっと何か言われただけでこの様子って、相当危険人物なんじゃねえの？
俺がアイネさんの採用基準にやや疑問を覚えていた時、俺達の様子を見かねたのか、細身の男がこちらに向かって歩いてくる。
「そこまでにしておけよ、キース」
キースと呼ばれた巨体の男は、その声の主である細身の男の方に視線を向ける。

「あ？　冗談じゃねえぞカルロス。コイツらが喧嘩売ってきたんだぞ。引けるかよ」

……いや、売ってないし。寧ろ突っかかってきたのお前だし。

ただまあキースと呼ばれた男の扱いを、このカルロスという男は熟知しているらしい。落ち着いた様子で、肩に手を置いて語りかける。

「まあ一旦落ち着こう。ほら、平常心だ平常心。普段テディベア編んでいる時を思い出せ」

「てめえそれ外で言うなっていつも言ってんだろうがあああああああああああああッ！」

ほら、完全に怒りの対象が俺達から仲間らしいカルロスの方に向いて、内輪揉めになる事により、少しはマシな状態に……って、ええええええええええええええええええええええッ！？

「その容姿で……テディ……ッ」

「ま、マズイ、アリス。堪えろ。堪え……テディベア……ッ」

ギャップありすぎんだろ……やべえ、笑いがこみあげてくるッ！

「笑うなてめえら！　おい、カルロス！　やっぱ俺、コイツらぶっ飛ばすぞ！」

「だから落ち着けと言ってるだろう。普段クマさんに向けてる優しい視線は何処に行った」

「やっぱてめえからぶっ飛ばすぞカルロスッ！」
「それは後でな。まあお前にぶっ飛ばせるとは思えないけども」
「アァッ！？」
「ストップストップ。アンタ落ち着かせる気ねえだろ！　寧ろ煽ってんだろ！」
流石に止めに入った。なんかこのカルロスって人、煽る事に快感を覚えている様な表情を浮かべてるし、絶対に止める気が無いだろうしな。
だけどまあ……片方が楽しんでしまっているのだから、そう簡単には止まらない。
「あはは、ごめんごめん。でもこの森のクマさんの反応が一々面白くてさぁ」
まるで無視するようにカルウスはキースを煽り続ける。
森のクマさん……似合わねえ……いかん、笑うな俺。そしてアリス。堪えるんだ。
「なんだその愉快で不愉快なあだ名はよ！　広まったらどうしてくれんだ！」
「あ、いや、僕が発案じゃねえんだ。結構広まってるみたいだよコレ」
「……ッ！？　……マジでか？」

「……マジだ。流石の僕も少し可哀想だと思いました」

「……マジかよぉ……ッ」

おい、急に大人しくなったぞ。どんだけショック受けてんだよ森のクマさん。

「……それマジなのか？　森のクマさんマジなのか？」

キースの問いにコクリと頷くカルロスに、キースは頭を抱える。

……すげえ静かになった。もしこれを狙っていたのだとすれば、このカルロスという男、策士なのかもしれない……いや、自分で言っておいて何だけど、違う気がするぞコレ。

……まあ、静かになった事だけは間違いない。

カルロスは深刻そうに頭を抱えるキースから一旦視線を外して俺達の方に向ける。

「ウチのギルドの者が迷惑掛けたね。すまない」

「あ、いえ、多分此方にも非はあるんで……」

「そうかい？　そう言ってもらえると助かるよ」

カルロスはキースを煽っている時の様な物ではなく、あくまで社交辞令的な笑みを浮かべて続ける。

「いや、まあしかし、やっぱりキミ達が此処に居るというのは異様の光景だね」

異様とはいうものの、その言葉にはキースの時の様な見下していｨる感じがしなかった。

「アンタも私達を馬鹿にする？」

「いやまさか。寧ろノーランクでこの場に呼ばれたという事は、特別な何かがキミ達にはあるのだろう。ランクに縛られない何かが。所謂ダークホースとでも言うべきなのかな、キミは」

ダークホース……ねぇ。

まあそういうポジションで正しいのか俺達は。

「ちなみに聞くのは野暮かもしれないけど、キミ達は一体何をして此処に呼ばれる様な事になったんだい？」

「裕也がこの前ロベルトをぶっ飛ばしたからよ」

アリスは俺に人差し指を向けて言うと、それを聞いたカルロスは、一瞬驚いた様な表情を浮かべた後、落ち着いた表情で尋ねてくる。

「ロベルトに勝ったのかい？　それも一人で」

「ええ、まあ……とりあえず仲間が助けにきて逃げられはしましたけどね」

「ふむ……まあ勝ったという事が本当ならば、これはそこの嬢ちゃんが言っている事も間違いじゃ無いかもしれないね」

「というと？」

「Sランクでも充分にやっていけるっていう事だよ。ロベルトの強さはSランクギルド所属の僕からしても、無茶苦茶と称したくなる程だからね。それを倒したとなればキミの実力も同等かそれ以上だという事になるだろう？」

その言葉を聞いて、何故かアリスが胸を張っている。この人どんだけ俺が評価されるの嬉しがってんの？　そっちの方が嬉しいぜオイ。

……とはいえ、ほんの少しだけ、いや、大いにカルロスの言葉に違和感を覚えた。

正確には、その言葉を聞いた事によって、ロベルトとの戦いに明確な違和感が生じたというべきかもしれない。

Sランクギルドの構成員が、地球でいうトップクラスの魔術師と同等の力を持っているとすれば、はっきり言って今俺が得ている最強に近い力をもってしても、圧倒する事はできないだろう。場合によっては負けることだってあり得る。

そんなSランクが無茶苦茶と評するロベルトに、俺は前半押されながらも、最終的には勝利した。だが押されていたのは俺が攻撃する事を躊躇っていたからだ。最初からアイツを本気でぶっ飛ばすつもりだったとすれば、もっと一方的な戦いになっていたかもしれない。

……もし、カルロスの言う通り、ロベルトの強さが無茶苦茶なのだとすれば、そもそもそんな感想を抱く事は出来ないだろう。

躊躇い無く攻撃してもある程度相対してくるだろうし、俺が躊躇った時点で致命的なダメージを負わされる。そうなった時点で負け

ていた可能性だって大いにあり得る訳だ。

だけどそうはならなかった。致命的なダメージは与えられず、重力変動の後の追撃として使われたのは、強者が攻撃に組み込まないであろう暴徒鎮圧用の魔術弾。そこの部分だけ見れば、トップクラスが無茶苦茶と評する様な実力者には見えないし、俺も一方的な戦いになったなんて感想を抱いても無理は無いんだと思う。

だから考えられる可能性は二つ。

カルロスの見立てが間違っているか……それとも、あの戦いでロベルトが手を抜いていたか。

後者だとすれば。もし、本気のアイツと対峙した場合……俺はアイツに勝てるのだろうか？

それは情けない話だけど、やってみない事には分からない。

分からないけどやるしかない。不安だけど、もう後には引けないんだ。

「だからキミには期待してるよ。少しでも楽をさせてくれ」

俺の不安とは裏腹に、カルロスはそう期待の言葉を向けて来る。

今回の依頼は、別に活躍した一個人に追加報酬が与えられる訳ではない。依頼の成功により、参加者に事前に渡された前金に上乗せする形で報酬が支払われる。だから誰が倒したって、報酬の面で見れば別にいいのだ。

カルロスが俺に言葉を掛けてすぐに、俺達が入ってきた所から反対側にある扉がゆっくりと開かれた。

そこから現れたのは……アイネさん。そして取り巻きであろう部

下たちだ。
「……どうやらおしゃべりは此処までの様だね」
「みたいですね」
アイネさんが現れたと言う事は、そろそろダミーを交えた作戦説明が行われるという事だ。
「ほら、いくよクマさん」
「……あとでマジでぶっ殺す」
流石に依頼主の前だからだろうか。小さな声でキースがそう呟き、二人は俺達の元から離れて行く。
そしてそんな二人の後ろ姿を見ながら、俺はふとこんな事を考えてしまう。
……ロベルトに勝てるかどうかは分からない。
その前にそもそも、俺は本当にアイツらに勝つ事ができるのだろうか？
場合によっては負ける事もある。そんな限定的な話なのだろうか。
思い返すと、俺がこの力を手に入れて戦った相手は、ゴリ押しでどうにかなったドラゴンとトロール。そして手を抜いていたかもしれないロベルトだけだ。
ただ気合いと力だけを振るっていれば、勝てていた相手だけなのだ。

だけど……此処でもそれは通用するのだろうか？
出力だけはきっと最強に近いものと言っていいだろう。ミラを追って全力疾走した時の事を思い出せば、それには頷ける。だけどその強力な力を、俺が十分に使えているかとなると、首を傾げざるを得ない。

「何今になって不安そうな顔してんのよ。おじけづいた？」

アリスが少し心配そうに、俺にそう声を掛けてくる。

「何が不安なのかは分からないけど、安心しなさい。裕也は強いから。私が保証する。だから今、不安な気持ちを抱く必要なんてないわ」

「アリス……」

そうは言われても、不安な気持ちは拭えない。
だけど、拭えなくても前に進まなくてはいけないという事は変わりはしない。
アリスの期待を……裏切りたくない。

「……そうだな」

裏切らない為にどうすればいいかと問われれば、答えられるのは、今はどうする事もできないという回答だけだ。
偶然力を得た事による背徳感も、そうして得た力を使いこなせないのも。それによってアリスの期待を裏切るかもしれないという事も。今すぐにどうこうできる様な問題では無いんだ。
だから今やれる事は一つ。

「ロベルトの野郎をぶっ飛ばす。今はそれだけ考える」

とにかく今できる事を全力でやるしかない。

結果がどう転ぶかは分からないが、出来ない事を悲観するよりも先に、出来る事。出来るかもしれない事に全力を注がなければならない。

だからあの時のロベルトが手を抜いていたか、そうでないのか。アイツが俺より格下か、格上か。そんな事は考えるな。

とにかく……全力を尽くすんだ。今出せる全力を、ぶつけてやるんだ。

俺はそう心に刻み込み、拳を握りしめる。

そしてダミー交じりの依頼の説明が終わり、格人それぞれの持ち場に移動を開始する。

さあ……ミッションスタートだ。

１９　予期せぬ再会

「いつ出てくるか分かんないんだから、気、抜かないでよ？」

「お前もな」

俺達は三階の廊下の一角で、そんなやり取りを交わす。
今回の作戦内容をざっくりと説明すると、こういう風になる。
まずはそれぞれ二人組で所定の位置に付く。俺達の場合は三階の廊下の隅の方だ。
ここでロベルト達と遭遇したら戦闘開始となるわけだが……この作戦。そんなに単純な物では無い。
そもそもどうしてロベルトを向かえ打つための場所に、このリリーブ社の本社が選ばれたか。それはこのリリーブ社に搭載された警備システムにある。

『独立型魔術防壁・迷いの森』

その名の通り、その効力は人を迷わせる事である。
例えば、Ａの部屋からＢの部屋へ移動した筈が、Ｃの部屋に辿りついている。三階の廊下を歩いていたら、いつの間にか一階に居るという風に、各ポイントを通過した者を違う場所にワープさせてしまうのだ。迷路という例えが一番しっくり来るだろうか。
それにより、ロベルト達が社長室へ辿りつける可能性を大幅に減らす算段だ。
だがまあ、俺達まで迷ってしまっては洒落にならないので、この術式の効果を無効にする指輪が支給されている。

これによって俺達は自由に移動が可能だ。それに無効化のＯＮ・ＯＦＦも自在なので、ロベルト達が消えた場合、それを追う事が出来る。そうする事によって、それぞれバラバラの所に配置された俺達の内の一人がロベルトを発見して追う事になれば、逃げた先の警備と合流する事になる。そうしてロベルト達を大人数で囲む事も可能なのだ。

でもまあ……欠点を挙げるとすれば、突然出てこられるので、此方側も場合によってはロベルトの出現に対応出来ない可能性があるという事だろうか。

「つーか、こんな厄介な警備システム使わなくても、普通に警備した方が良いんじゃねえのか？　はっきり言って、不意打ちされるリスクがそうとうでかいと思うんだけども」

攻撃しながら突然ワープしてこられて、それに対応しろと言われても流石に厳しいと思うしな。

「それは私も同感だわ。ちょっとその辺考えてないんじゃないかなと思う」

「だよな……いや、こういう事をやるからこそ、高ランクのギルドが集められているのかもな」

「……じゃあ、こうしてぐちぐち言ってる私達は、まだまだって事ね」

「だな」

多分森のク……キースとかは、普通に構えている気がする。早く来いやァッ！　的な感じで。
まあ本当にそうしてるかどうかは分からないけど……とりあえず、そこまでオーバーじゃ無いにしろ、そういう気持ちで取り組んだ方が良いのは確かだろう。
とにかく……気合いを入れろ。
「まあとにかく、気合い淹れて頑張ろ――」
俺がそう言いかけたその時だった。
「裕也ッ！」
アリスが突然声を荒立てる。
何事かと思ったが、きっとこの段階で何事か程度の事しか考えられていない時点で、既に手遅れだったのだろう。
「……ッ」
背中に、何かが触れた感触があった。
反射的に背後に視線を向けようとした時には、既に視界の半分以上を眩い光が奪い去っていた。
ただ僅かに残った視界に、その正体は写り込む。
やや背が高めで、無表情な同い年位の少女。
……あの時。ロベルトを助けに来た、転移術式を扱う、エリィと呼ばれていた少女。

そこまで分かった段階で、俺は咄嗟に指輪の効力を切った。この時点で出来たのはそれが限界だ。
そして視界は光に染まる。

◆◇◆◇

「……ッ！」

直後、視界に移っていた情景が、スライドショーで写真が切り替わったかの如く変貌を遂げた。
転移術式。
そう認識してすぐに、僅かに宙に浮いていた俺の体は床に叩き付けられる。

「ってて……何処に飛ばされた？」

体を起して起き上りながら周囲を見渡すが、辺りには誰も居ない。本社の廊下である事は間違いない筈だから、警備と警備の間に落ちたのだろう。

それにしても……危なかった。
俺は再び指輪の効力を戻しながら、内心で冷や汗をかく。
転移術式は一見ただの移動手段に見えるかもしれないが、そんなに単純な物では無い。
あのエリィという少女が使った、対象に触れて扱う転移術式。そしてアリスが使った様な範囲指定の転移術式。どちらも使い方を工夫すれば凶器へと変貌する。

そして俺は既にその恐怖をこの身で体験している。
佐原の使った転移術式ではない……アリスが使った、脱出用の転移術式だ。
アリスの術はあの時、マナスポットのよる術式の効力の増強でコントロールが聞かなくなり、結果俺達は木の上に落ちるはめになった。
それだけである程度ダメージを負う訳だが、それがもしもっと高い高度からの落下だった場合、俺達はどうなっていた？　考えるだけでぞっとする。
そういう風に、ちょっとしたミス一つでそんな事態になりかねないのが転移術式だ。そしてそれはミスではなく、故意でも起こり得る。
俺はあの瞬間、指輪の効力を切った。
切った事によって、迷いの森の効果が発動して少なくともこの建物の敷地内に飛ばされる事だけは確定していたけど、もし切っていなければどうなっていたのか……。
「アリスの奴、大丈夫か？」
もう既に相手の姿は見えている訳だから対処の仕様はあるだろうけど、もし術を掛けられた時、咄嗟にこういう判断ができるかどうか……なんか不安だな。
「……とにかく戻るしかねえか」
まずここは何階で、そしてどこなのだろうか。

転移術式で転移のポイントを飛び越えようとしても、通常と同じ現象が起こる。つまり東側に位置する場所に飛ぼうとした場合、東側に歩いた時と同じ現象が起こると言う訳だ。そしてその転移先なんかも、当然把握済みだ。

もし今回飛ばされたのが通常の方法で移動可能な向きだったのならば、ある程度予想が付くが、そうでない場合はその限りではない。屋内から屋外みたいな特殊な例に関してはなんのデータも貰っちゃいない。だからどこに飛んだか分からない。

……そう考えると、結構穴があんじゃねえかこの警備システム。転移術式で屋外に向かって跳ばれたら、使える奴じゃないと追えねえし、どこに跳ばれたかも分からなくなる。もうちょっとしっかりしようぜ開発担当者とこの警備システム導入した奴！

……まあグチっても仕方が無いよな。

俺はゆっくりと立ち上がって、窓の外の景色に視線を向ける。そうして分かる事は……ここが一階であると言う事。そしてあの場所から一階に行く事は出来ない事を考えると、やはり俺は建物の外に飛ばされるはずだったという事。

「……戻るか」

とにかく三階に戻ってみよう。指輪の効力さえ発動させておけば、迷う事は無いからすぐに辿りつけるはず。

そう思って動き出そうとした時だった。

「な、なんなんですかコレ！　何がどうなっているんですか！」

不意に、背後から聞き覚えのある声が聞こえて来た。

俺は慌てて声の方に振り向く。
そこには、さっき見渡した時にはいなかった顔見知りが居た。

「……ミラ？」

「……へ？」

あちらも俺を認識した様で、そんな間の抜けた声を上げる。
……なんでミラが此処に？
俺のそんな問いを口にする前に、ミラの方が俺に縋る様な声を掛けてきた。

「ゆ、裕也さん！　な、なな、何なんですか！　一体何が起きてるんですか！」

真剣に事態を把握していない様な慌てた表情でそう言うミラを見て、その手に指輪の類が付けられていない事を確認するまでもなく理解した。

……巻き込まれてる。

一体どうしてこんな所に居るのかは分からないが、それは間違いないだろう。
俺はミラの問いに素直に答える事にする。

「ロベルトだよ。アイツがここの社長に誘拐予告を出したんだ。で、屋敷中に迷路化を施す警備システムが発動してる」

「ろ、ロベルトって……」

「ほんと、何がしてえのか分かんねえよ……で、ミラ」

俺がもう一つ分からない事を、ミラ本人に聞いてみる。

「なんでこんな所に居るんだ？」

この作戦中、関係の無い一般社員などは全て社外に避難する手筈になっている。確かミラは運び屋のバイトをしていると言っていたけど、それにしてもこの作戦決行時刻に建物内に残る様な時間に配達を頼まない筈だ。

じゃあ……なんで此処に居る？

「えーっと……ちょっとお届け物があったんで此処に来たんですけど……」

「でも、結構前に配達は終わってんじゃねえのか？」

「いや、まあそうなんですけど……」

「じゃあなんでまだ中に居るんだよ」

「あの、えーっと……その……」

ミラはなんだか言いずらそうに視線を逸らす。

……何故に？　そんな言いにくそうな事聞いてるか俺。

でもまあ、少しは言う気になったのか、こんな確認をとってくる。

「……笑いません？」

少なくとも、笑う様な話が出てくる場面じゃなかろうに。

「笑わねえよ。言ってみろ」

俺はミラにそう促した。
すると意を決した様にミラは俺にこう告げる。

「わかりました。そのプ……ったんですよ」

「へ？」

なんだか最後の方がほとんど聞きとれなかったぞ？

「ごめん、もう一度」

「プリ……すぎ……ですよ」

「ごめん全く分からない」

プリ？　すぎ？　何の事だよ。
でもなんだろう。笑うなって釘も刺したって事は、少し恥ずかしい事なのかもしれない。
だとしたら……言いにくいよな。

「大丈夫。俺は笑わねえよ。だから教えてくれないか？」

俺は笑みを浮かべてそう言った。

「……はい」

俺の言葉に今度こそ決心を固めてくれたようだ。相変わらず小さ

な声である事には間違いないが、その答えはちゃんと俺の耳に届いた。

「プリン食べ過ぎて……お腹壊したんですよ」

「……へ？」

「だから、プリンを食べ過ぎてお腹壊したんですよ！」

……何を言っているんだこの子は。

「その、先日お給料が入って、そしたらなんだか、プリンを死ぬ程食べたいなって衝動にかられまして。そしたら何かのセールで安かったので此処に来る前に食べまくったら……最終的にトイレの住人に……」

「……」

なんかもう、なんて言ったらいいんだろう。

笑うとか、そういう事はしないけれど……なんというか、この子残念だなぁと。ただそれだけを思った。

「えーっとあの、笑われなかったのはいいですけど……そんな残念な人を見る様な目で見て良いとも言ってませんよ？」

「仕方ねえだろ……だってすげえ馬鹿だと思ったもん。さすがに顔に出るわ」

「笑わない事以外、感情を表に出し過ぎですよ！」

いや、だって本当に呆れたもん。
まあ……昔バイキングで死ぬほど食べて死にそうになった俺が、どうこう言える話じゃないけどな。

「まあとにかくだ」

流石にこんなくだらない話を延々と続けられる様な状況ではない。俺は話の流れを切りかえる。

「此処に居たら危ないから、とにかく外に出よう」

「いや、でも……出るって言ってもどうやって。一階のトイレから出たら全く関係の無い三階の廊下に出て、そこから次が此処ですよ？　もうどこを目指したら良いのか分かりません！」

「いや、それは大丈夫」

俺はそう言ってミラに左手を差し出す。

「一応俺は通れる様になってるから。俺と手でも繋いでいれば、ミラも通れる様になるよ」

幸い此処は一階だ。俺がこのまま手を引いて出口まで連れて行けばいい。

「え、手……手ですか？」

「そそ。そうすれば、指輪の恩恵がミラにも行きわたる」

「いや、でも……」

「え、なんか俺へんな事言ってる？」

すげえ躊躇われてんだけども……え、俺なんか間違ってんのか？

「あ、いえ……別に変じゃないですけど……」

そういいながら、恐る恐るという様な感じでミラは俺の手を握る。

……本当にどうしたんだろうか？

まあそれはいいとして。

「よし。じゃ、行くか」

早い所ミラを外まで送り届けて、アリスの所まで戻らねえと。

俺はミラの手を引きながら、出口に向かって歩き出した。

２０　異変

「そういえば、アレから黒点病の方はどう？　薬効いたか？」

「はい。あの時の薬で完治しました。まだ二回目の服用だったたんですけど、治ってくれてよかったです」

出口に向かって歩きながら、俺達はそんな会話を交わす。

「それにしても……結構雇われているギルド、多いんですね」

「そんだけ厳重に警備してんだよ」

歩いているとやはり他のギルドが警備している所を通る事になる。明らかに持ち場を離れている訳だから、その都度状況を説明する必要があったけれど、短く説明すれば分かってくれた。

だけども……たった今、視界に入った方への説明はなんだか面倒そうである。

「あぁ？　なんでテメェが此処に居るんだよ。お前の警備は三階だろうが」

森のクマさんこと、キースである。

「ロベルトの仲間の奴に、転移術式で飛ばされたんです。だから此処に居ます」

「おいおい、調子乗った事言ってたくせに、なんだよそのザマは」

「……」

コレに関しては、何も反論する事が出来ない。

多分だけども……コイツが同じ状況に立たされたとするならば、俺の様にあっさり飛ばされたりはしなかったのではないだろうか。

目の前の男の力は、きっと俺の様に仮初めの力じゃない。その力を得るまでの過程に経験だって山程詰んでいる筈だから。

だからきっと、キースには俺を罵る権利があると言ってもいいだろう。

「それで、その子は？」

隣に立っていたカルロスがミラの姿を見てそう尋ねてくる。

「そうだよ、なんなんだよそのガギは」

「簡単に言うと、逃げ遅れて巻き込まれた一般人だよ」

「それで、今あなたが出口に連れて行ってると」

「そういう事です。いくらなんでも放っておけないでしょう？」

「まあ確かにそうだね。キミの判断は正しいと思うよ。今は僕達以外は自由に動けないからね。無事に送り届けてあげなよ」

「了解です」

俺がカルロスにそう返した所で、カルロスはキースに視線を向けて口を開く。

「そういえば熊さん小さい女の子とか好きだったろ？　替わりてえとか思ってる？」

その言葉を聞いた瞬間、ミラが自分の身を守る様に俺の背に身を隠す。

「なあカルロス……一周回って逆に落ち着いたぞ。後で殺すから」

「あ、これマジでヤバい奴だ……」

と言いつつも笑っているカルロスと、逆に怖い位の真顔のキースを眺める俺の背から、ポツリと声が聞えた。

「隠れておいてなんですけど……私十四ですよ。全然小さく無いですよ……」

そうは言っても、若干子供っぽい容姿な気がするし……何よりキース位の奴の場合、十四が相手でも充分に犯罪のにおいがするからな。

そんなやり取りを交わした後、俺達は再び出口を目指した。

◆◇◆◇

そして暫く歩いた時だった。

「裕也さん。裕也さんからみて、私は子供っぽく見えますかね」

「年相応じゃねえの？」
そんなやり取りを交わす俺達の前に、唐突にソレは現れる。
本来見つけるべき存在。だけどミラを外に連れ出すまでは、出会いたくなかった存在。
その存在の登場に、ミラは一歩後ずさり、そして同じ様に相手も顔を引きつらせた。
俺はミラを庇う様に前に出て、構えを取る。

「今度はお前か……ッ」

金髪の同い年くらいの青年。
俺に不可解な事を言ってのけた、あの青年が、俺達の正面に出現した。
そして青年がそう口にした直後だと思う。
身に付けていた指輪が……赤く、光り始めた。

「……ッ」

突然俺の体が金縛りの様に動かなくなる。
いや、違う……体が、勝手に動く？
気が付けば、ゆっくりと俺の視線が逸れ始めた。
ゆっくりと、確実に、ミラの姿を人見に移す。
そして訳が分からぬまま、俺の手がゆっくり、しかし確実に握られ……そして動き出す。
まるで、ミラを殴り倒そうとでもする様に。
だけど次の瞬間、その手は止まった。
否、止められた。

「何やってんだてめえ！」
青年に跳びかかられ、そのまま床に張り倒される。
そしてそのまま馬乗りになり、勝手にもがきだす俺の腕を抑え込んでいた。
青年は叫ぶ。

「コイツの指からその指輪を取れ、ミラ！」

その声に、ミラが小さく躊躇う様な声を漏らした。
戸惑っている。間違い無く状況を呑みこめていない。
そしてそれは俺も同じだ。
なんだよ……これ。

「早くしろ！　もう持たねえ！」

青年の声を聞いて……いや、もしかするとこの状況の異常性に気付いてか、ミラが俺の指か指輪を外しに掛った。
そうしてそれが抜けた瞬間……その不可解な現象は終わりを告げる。

「戻った……のか？」

指輪が抜けた瞬間から、抵抗されなくなったからか、青年がそんな事を口にし、ミラも安堵の息を漏らす。
そして俺はゆっくりと呟いた。

「……何だったんだよ、今のは」

その答えを正確に答える事が出来る者はいないだろう。
俺の身に一体何が起こった事。そしてこの青年がミラか……もしくは俺を助ける為に動いた事。他にもまだいくつか。
だけど確実に断言できる事が一つ。
俺達の雇い主のリリーブ社……裏に絶対、何かある。

２１　一時休戦

そして前々から気付いてはいた事だが……何かあるのは、この青年も同じ事だった。

その証拠がこの状況だろう。

青年はマウントポジションという圧倒的有利な状況を取っていたにも関わらず、俺からゆっくりと離れた。

俺を抑え込んで指輪を外すまでの一連の流れ。アレがミラを直接傷付けてもいいとは思わないという、あるかどうかも定かではない良識からの行動だったとしても……それでも、元に戻った俺を解放する理由なんて何処にも無い。

それが出来たかどうかはともかく、俺をボコボコにでもして見るのが、此処に忍び込んだ誘拐犯としての正しい行動では無いのだろうか。

なのに俺の体は自由の身。多分その気になれば、俺がマウントポジションをとる事だってできる。

「自分が何やってんのか分かってんのか。お前は誘拐犯で、俺は警備員だぞ」

「お前、まだ此処を警備する気でいんのかよ」

論点をすり替えられた気がするが……確かにごもっともな話だ。

はっきり言って、そうする気が起こらない。

何が起きたかは解らなくとも、誰が起こしたかという事は流石に

分かる。
俺はゆっくりと床に落ちている、もう光ってはいない指輪に視線を向ける。

アレを支給した、雇い主であるリリーブ社。俺をこういう状態にしたのは間違いなくそこの人間だ。
アイネさんと直接話した事もあってか……信じたくは無いけれど。
「まあ落ち着いて、此処は一時休戦で共闘とでもいこうぜ。俺もその為にてめぇを助けたんだからよ」

確かにそう考えれば合点が付く。
都合よく、リリーブ社に不信感を抱く警備の人間が現れた。
それを助ければ、一時的にでも取りこむ事ができるかもしれないからな。

だけど、本当にそれだけなのか？

ロベルトやこの青年には不可解な点が多くて……そして俺はこの青年の事を、それ程悪く思ってはいない。そういった事が重なって、こんな感情も芽生えてしまう。

……コイツは、純粋に俺達を助けてくれたんじゃないか？　と。

そんな事を思ってしまうと、また更に疑問は増え続けるばかりだ。

……折角眼の前に本人が居るんだ。
だったら、聞いてしまえばいい。
この青年とロベルトへの疑問の解を。

でもその答えが正確に返ってくるかどうかなんてのは解らない。
というより返ってこないだろう。返ってくる様な素直な奴ならば、
そもそもこうしたモヤモヤを抱かずに済んだと思う。

だから鎌を掛けてみる事にした。

本人の想定していた言葉以外を突ければ、もしかすると、あるかどうかも解らない何かが零れ落ちてくるかもしれない。

そういった考えの元で思い付いた嘘は、きっと今みたいな事が有ったからこそ明確に出てきた可能性の一つ。だけども見当違いの可能性も高く、違っていたら滑稽もいい所な、そんな言葉。だけどその返答次第で、モヤモヤが解けるかもしれない問い。

そして、ミラが聞くと少し不快になってしまう様な言葉。
俺は青年の隣まで歩き、青年にしか聞こえない小さな声で言う。

「なあ……なんだっててめえらは、そんな回りくどい人助けをしてんだよ」

本当に、言っている自分が滑稽だと思った。
だけど、そんな事をしただけの収穫は確かにあった。

「……ッ」

青年が、息を呑んだ。
まるで隠していた事を突かれたかのように。
そして、ゆっくりと静かに、小さな声で青年は言う。

「……どこまで気付いた？」

それは俺が抱いた薄い可能性が正しかった事を意味する返答。

「何処までだろうな」

何処まで気付いたか。何処までも気付いていない。
でも気付けなくても少しモヤモヤは晴れた。

全くの見当違いなら、それで敵と割り切ってよりモヤモヤを解消できた気がするけども……その言葉の真意がどうであれ、こっちの方が気分は楽だ。
そして俺が鎌を掛けた事を、青年は俺の返答で見抜いた様だ。

「……俺を誘導して、何が知りたい？」

「不可解すぎる、お前らの言動の意味を」

今までに抱いた違和感に加えて……今回の一件そのものの動機。
コイツの反応が本物で、本当の悪人ではなかった場合、こんな大々的な犯行予告まで出して何がしたかったのだろうか。
そして俺の要求を聞いて、青年は言う。

「……その話は後だ」

青年は諦めたように……いや、肩の荷が下りた様に、俺の要求を呑む様な言葉を口にした後、こう続ける。

「ミラの前で……俺達の被害者の前で、言える様な事じゃねえよ」

それがどうしてなのかは分からない。俺が考えた様に、不快感を

与えてしまうからなのか、それとも別の何かか。

「それに……言ってる場合じゃねえだろ。見ろ」

俺は言われた通り、青年の見ている方向に視線を向ける。

「……確かに、オチオチ話してる場合じゃねえな」

視界の先には見覚えのある二人が居た。

キース立ち程ガッツリと話してはいないが、会釈程度はしたBランクギルドの構成員二名。

Bランクといえど A ランクと遜色の無い彼らの手に付けられた指輪は赤く染まっていて……まるで生気を感じられない。

少し前の自分を思い出す。

まるで体が勝手に動く様な状態。それが眼の前の奴らにも起きている。

だとすれば……、

「こ、こっち来ますよ！」

ミラは青年の居る方に来るのをためらった様だったが、それでも俺の後ろにやってきて隠れる。

「詳しい事は何も分かんねえが……アイツら二人が仲良く歩いてんの見ると、どうやら指輪を付けてねえ奴を襲う感じになってるみてえだな」

青年が指を鳴らしながら、瞳を赤く染める。

俺も同じ様に瞳を赤く染めた。

そして一応聞いておく。

「じゃあとりあえず一時休戦だ。お前、名前は？」

「シドだ。……てめえは？」

「浅野裕也」

「オーケー、把握した」

そんなやり取りをして、俺達はミラの盾になる様に正面の敵を待ちかまえる。

想定外の事態になったが……とりあえずこの場、切り抜ける！

22　強襲

「いくぞ！」
開口一番にシドが先陣を切った。
戦闘スタイルは俺と同じ、近接戦闘タイプらしい。ただシンプルに、迫ってくるBランクの内の一人が肉体強化以外の何かしらの魔術を放つ前に、跳び膝蹴りを顔面に喰らわせる。
だがそれで止められるのは一人。鞭を手にしたその男の標的は、どうやら俺かミラ。
「下がってろ、ミラ」
「はい！」
流石に戦闘中にミラを一人で放置する訳にもいかない。その為に俺が残ったんだ。
……残ったからには、ちゃんと役目は果たすぞ。
男は接近しながら鞭を放つ。
その動きに一切の無駄は無く、隙の少ない構えで放たれた鞭その速度は高速と言ってもいい。
だけど、動体視力が上がっている今の俺には、確かにソレは見えた。
そしてミラがいて交わせないとなるならば、おのずと選択肢は一つ。
「今だッ！」
ガシリと確かに……放たれた鞭を右手で掴み取った。

だけどこの時、やはり俺には経験が足りていないと痛感した。

「グ……ッ」

鞭を掴んだ右手から、強力な電流が流れ出す。
しかも鞭から手が離れない。
……掴まれる事を想定して、術式を組んでやがる。

だけど……だからどうした！

そんな経験豊富な相手に、俺が対抗できる手段は唯一つ。それは力を無茶苦茶に振るう、力のごり押し！　この位耐え忍んで、無理矢理攻撃に繋げろ！

「っ、らあああああああああああああッ！」

俺は右手を勢いよく引いて、鞭を持った男を引きよせ、力強いヘッドバットを喰らわせる。
男はのけ反るが、電撃を感電させる事は出来ない。俺が発火術式を使用して燃えないのと同じ原理で、使用者にはその攻撃魔術の効果が及ばない物が多い。
そもそもそれ以前に、ヘッドバットで電撃が止まっていた。
俺は右手の鞭を離し、同時に左手でのけ反った男の襟首を掴んで再び引きよせる。

「……悪い！」

そして右拳を握りしめ、その顔面に勢いよく叩き込んだ。
そして……アリスから言われた事を思い出す。
勝てる確信が無い限り、手は抜かない。

相手はこういう場に呼び出される強者だ。だったら確実に勝てるかどうかなんてのは解らない。だったら……まだたりねえ！
もう一発。

左手で男を引きもどし、再び拳を叩きこむ。
そしてその勢いで襟首から手が離れ、自然と俺との距離が開いた男の腹部に、全力の蹴りを叩きこんだ。
勢いよく吹き飛んだ男の体は近くの壁へと叩きつけられ、一瞬のその体を動かして、そのまま意識を失う。

「ハァ……ハァ……」

荒い息を整えながら、自分が蹴り飛ばした男に改めて視線を向ける。
蹴りを喰らってまだ意識があった……つまり途中で躊躇っていれば、そこから反撃されていたかもしれない。
アリスの言う通りだ。手なんて、抜けやしない。
そして次の瞬間、俺が倒した魔術師の近くに、もう一人の魔術師が転がる。
特に危なげもなく戦闘を繰り広げていたシドの、何かしらの魔術を要いた掌低を受けて、吹き飛んだのだ。
そして俺の相手と同じ様に撃沈。
シドは倒れている二人に近づいてそれぞれの指輪を抜き取る。

「これでコイツらも元に戻るだろ」

「俺の時と同じ状態ってんなら、そうだろうな……で、俺やコイツらみたいに指輪を付けていた連中は、みんなこうなってるって事か」

「だろうな」

リリーブ社に雇われたギルドの人間は、皆指輪を付けている。俺も……そして、アリスも。

あの会議室に居た猛者達が全員暴走している。考えただけで嫌になる。

「……とにかく、アリスを元に戻さねえと」

「お前の連れか？」

「ああ。ウチのギルドのボスだ。とにかく、最優先事項はそこだ……いや、ちょっと待て」

本当にそうか？

多分先にするべき事がある。

「……先にミラを外に出すのが先決か」

はっきり言って、この状況にミラを立たせていたら命がいくつあっても足りやしない。

多分、地球に居たころの俺がこの場にいたら、速攻で殺されてた。

……そしてそれをやるなら、動くのは俺だ。

なんにしても、動くなら早くした方が良い。

いつ奇襲を受けたって分からないんだから……と、そう思った時だった。

衝撃音と共に、目の前からシドが消えた。否、殴り飛ばされた。

そして殴り飛ばしたのは……つい先程出くわした人物。

「カルロス……ッ」

突然の奇襲を仕掛けてきたカルロスは、ぶっ飛ばされたシドを追う様に、迷いの森の効力で消えたシドを追っていく。
その様子を目に下直後、俺はすぐさま警戒を強めミラに言う。

「とにかく壁際だ！　壁際にいろ！　あと窓には近づくな！」

「は、はい！」

ミラがそう言った直後、ソイツは現れる。
カルロスが出てきた時点で、来てもおかしくないとは思ってた。
会議室にて。強さを張りあった相手。Ｓ級ギルドの構成員。
キースが……何もない空間から現れ、跳びかかってきた。

23　SランクVSランク外　上

「……ッ」

跳びかかってきたキースの蹴りをサイドステップで交わす。
俺の隣を通り過ぎたキースに合わせて蹴りを放つが、何かしらの術で僅かに浮き上がったキースの体の真下を右足が通過し、蹴りの隙を突く様にキースの手からキューブ状の白い何かが放出される。
それをなんとか地を蹴って回避……したと思った所で、キューブが床に着弾した瞬間に砕け散り、中から散弾が俺に向かって放たれる。

「グ……ッ」

一発左手に貰った……だけど、軽傷だ。
……今度は、こっちから仕掛ける。
足が地に着いた瞬間、再び地を蹴り、同じく着地したキースに向かって突っ込む。
そして放つ右拳。

「なに……ッ」

身を捻られて、躱された。
躱されて……掴まれた。

「……ッ」

拳を放った右腕の袖を左手で掴まれ、そのまま右手で襟首を掴まれた。

そうして放たれるのは……俺の勢いをりようした背負い投げ。
いや……違う！

「く……ッ」

途中で手を離され投げ出された。
本命は……投げた瞬間踏みこんで来た直接攻撃。
地に足が付くよりも拳の方が早い。躱す事は不可能。
だったら……どうする？
決まってる。反撃に打って出るべきだ。

現状、俺が使えるもう一つの戦闘用魔術。発火術式。
コイツを……ゼロ距離で叩きこむ！
だがしかし……一筋縄ではいかない。
炎を放った瞬間、俺とキースの間に薄い何かが展開されているのが分かった。
結界。それは発火術式で燃やしつくせるが、例え薄くても結界を焼き尽くすには僅かながら時間が掛る。
故に、その攻撃は止められない。

渾身の、シールドチャージ。
否……実質的にそれは、ショルダータックル。

「ガハ……ッ」

真正面から直撃。
激痛と共に後方に、大きく吹き飛ばされた。
次の瞬間、突然視界に移る景色が変わる。
迷いの森の効果が発動して、恐らくは俺達が集まっていたのとは違う、大きな会議室へと転移した。

「……ッ」

床を転がりながら、なんとか地に足を付け、後方に大きく跳躍。

シド達が別の部屋へと再移動している事を確認しながら、キースとの距離を取る。

「ハァ……ハァ……」

息が、荒い。冷や汗が滴り落ち、頭部からは血液が流れ出す。

今の一瞬で、一気にやられていてもおかしくなかった。

……落ち着け、呼吸を整えろ。

俺は改めて、今にも跳びかかってきそうなキースを見据える。

相手はＳ級。こっちは出力は高くてもベースは最低クラス。

出力が勝っていたとしても、戦闘経験。使用できる術式の数。ランク。戦術に技能。すべてにおいて俺は劣っていると考えた方が良い。当然の事だ。

だとすれば……どうやって、俺は戦えばいい？

次の瞬間、キースが魔法陣の展開と共に天井に向け手を振り上げる。

その手から放たれたのは、先程よりも一回り大きいキューブ。その数六つ。

空中で破裂したキューブからは複数の小型キューブが三つずつ放たれ、それらが再び空中で破裂。中からは先程の様な白い何かが放出される。

地面にバウンドする様に跳び回ったその白い何かに対し身構えたが……やってきたのはたったの数発。

六×三×α。それだけの内の多くが無駄弾になった？

……そんな訳が無いだろう。

その予想は、間違いなく正しい。Ｓ級だとか言われる連中が扱う術が、この程度の結果しか残せない訳が無い。

……はっきりとした意図がある。それは解りきっていた。

そして思い出す。こういう光景を、俺はかつてテレビで見た事がある。

それと同系統の術式だとすれば……覚悟を決めるしかない。

文字通り……何かが来る！

そう思った次の瞬間には、目の前にキースの姿があった。

あの術式は、攻撃する事が目的の物ではない。否、一定以下の術力者ならば攻撃用となり得るが、それ以上になれば補助用として成り立つ術式。

飛ばしたキューブ。及び散弾の軌道で疑似的に魔法陣紛いの物を作りだし、疑似的に魔術を発動させる。だが扱いや発動までにキューブ展開という時間が掛るだけあって……その効力は、絶大だ。

故に彼は目の前に居る。

強化された動体視力を持ってしても、殆ど見えなかった様な速度で、目の前に居る。

そして腹部に激痛。もろに喰らったアッパーカットで体内の空気が口から漏れだし、そして俺の体は天井に突きあげられる。

発動した術式は、シンプルに肉体強化。その猛威はまだ終わらず、落下してきた俺に追い打ちを掛ける様に蹴りを叩きこんで来た。

咄嗟に左腕で頭部を守る。そして次の瞬間には左腕が嫌な音と激痛と共に、変な方向に曲がって居た。

「う……ガ……ッ」

そのまま勢いよく蹴り飛ばされ、壁に叩きつけられる。
全身に、激痛が纏わりついていた。左腕は、今の一撃で間違いなく折れている。
……それでも。

「……のやろう」

俺はゆっくりと、立ち上がる。
まだ、体は動いた。立ち上がれた。まだ……戦える。
こうしてみると、俺の肉体強化は攻撃よりも防御に割を持っていかれているのかもしれない。
思い返せば、佐原との喧嘩の際も、俺の体は思ったより佐原の攻撃を耐えていたからな。
まあどちらに割が持っていかれていようが、変わらない。
俺がやるべき事は、変わらない。

キースと渡り合える。
アリスは、そう言ってくれた。

……だったら渡りあえよ。

その為に……どうすれば勝てるか、考えろ。
でも、そもそも……俺に色々な策を用意する技量なんてのは、まだない。
現時点では、まだ真っ正面からぶつかる事位しか出来ない。
……だったら……もう、それでいいだろ。
かっこいい戦い方じゃないかもしれない。泥臭い戦い方かもしれない。
だけど現状それしかできないのならば、それに全力を注げ。

「……今度は、こっちからいくぞ、キース」

再び、床を蹴った。

勝つために。折れた左腕すらも酷使する覚悟を決めて。

始めよう。唯のシンプルな、殴り合いを。

さあ、泥試合の始まりだ。

23　SランクVSランク外　上（後書き）

次回反撃開始！

24　SランクVSランク外　下

……キースの使った術は、非常に扱いにくい部類に属する。
魔術戦において、あの術式の、疑似的な魔術を構築するにあたる数秒のワンクッションは非常にネックだ。ある程度の間合い。ある程度のスピードを有すれば、そのワンクッションの間に拳を叩きこめる間合いにまで接近できる。
つまりは、俺が発動直後にあの術式の正体が分かる程度の経験を有していれば、勢いよく接近するだけで破る事が出来る戦法だったという訳だ。

……と、推測するけれど、多分それは違う。

そんな致命的な弱点がある戦法を、一体一の戦いで使う様なら、多分コイツは此処に呼ばれる様な人材では無い。
十中八苦、例え発動までのタイムラグを突かれた際の対策は講じてある筈だ。
それが一体何なのかまでは、俺には分からない。

俺の実力は本来、最底辺。戦闘のプロの策など読める筈が無いんだ。
だから……知らなくたっていい。余計な事に頭を使うな。
今はただ……目で見える物に集中しろ。
俺が跳ぶのと同時に展開されていたキューブが再び拡散。そうして生まれたキューブから小型の散弾が打ち出され、その一部は正面から突っ込んだ俺に叩きこまれる。
だけどそれは激痛の一歩手前。受けるのは軽傷。
故に止まらない。寧ろ俺が一部の散弾の軌道を止めたと言ってもいい。

つまり、先程の身体強化の魔法陣を描く事は、もう出来ない。その魔法陣を描くために放たれた術としては、打たれてはならない致命的な一手の様に思える。
だけどそれで終わりじゃ、この術は多分欠陥だらけのポンコツだ。

……いや、ポンコツなんだ。

その次に起きた現象を見て、俺は思う。
コイツは……テレビでみた魔術師は、そのポンコツを、プロで通用する最高の術式へと変えているんだ。
……軌道がそれても終わらない。一枚岩じゃ終わらせない。
プランAが頓挫すれば、出てくるのはプランBだ。

「グ……ッ」

左右に突如として展開された魔法陣から放たれた、高威力の散弾を受け、全身に激痛が走る。貫通こそしなかったものの、全身から血が流れ出た。多分並大抵の力じゃ蜂の巣になっている。
プランB……正面突破されて、ある一定の散弾を止められた際に発動する、俺みたいな奴の為の対策。きっと違う部分を壊していれば、それだけ違う魔術が発動されただろう。
だけど変わろうと変わらなかろうと、きっとこの状況は変わらない。
歯を、喰いしばった。
激痛に耐えながら、それでも体を動かした。右拳を僅かに引き、拳を構える。

「お、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

激痛に耐えながら、腕を振り抜いた。

次の瞬間、魔力の雨はやみ、キースは体を捻って俺の攻撃を回避する。流石に攻撃を受けながら無理矢理放った攻撃だ。隙が大きすぎた。
そしてその隙を突く様に、キースは俺に拳を振るう。
そしてその拳は俺の頬に吸い込まれる様に直撃し、俺の意識は飛びかける。
でも……飛びかけただけだ。
今、お前はきっと、無理にでも距離を取るべきだったんだ、キース。

「……ッ」

無理矢理、踏み止まった。
そして、こうなる事は端から予想済みだ。こうする為に突っ込んだ。
だから即座に、攻撃に移る。
拳を握って、キースの懐に入る。
もう距離は離させない。攻撃を派手に躱そうとは思わない。
躱せればギリギリで。躱せなければ、大人しく受け、次の攻撃に移る。
先に倒れた方が負け。
インファイト。ただの殴り合い。
きっと現状俺が唯一まともにできる、俺なりの戦い方。

「うおおおおおおおおおおッ！」

俺はキースの脇腹目掛けて右フックを叩きこむ。
その体が折れ曲がりそうになるが、折れ曲がる事は無く、逆にこちらの骨をへし折る様に拳が放たれる。
左胸に吸い込まれる様に放たれたキースの拳により、肋骨がミシ

リという嫌な音を上げる。
だけど止まらない。
次の瞬間には、体の勢いに任せ折れた左腕で裏拳を放つ。そして牽制程度の裏拳の後に、本命の右拳を突きだした。そして同時にキースも素早い切りかえしで拳を放つ。
右拳に衝撃。
それが必然か偶然かは分からない。少なくとも俺は狙っていない。
だが確かに、俺達の左拳はぶつかり合った。
そして行われるのは、純粋な力比べ。

「ッらああああああああああああああッ！」

声を張り上げ、拳を振り抜く。振りぬけた。
キースの拳を、押しやった。
そしてその瞬間に生れた隙を無駄にはしない。
俺は僅かに離れた間合いを詰め、顔面に右拳を叩きこむ。
確かなてごたえ。並の魔術師ならそれ一発で昏倒していてもおかしくない様な、そんな一撃。
それでもキースは倒れない。故にＳ級。
再びのけ反ると同時、伸びた俺の右腕に右拳を突き上げる。

「グ……ッ！」

右腕が悲鳴を上げた。もしかすると今の一撃でヒビ位は入ってしまったかもしれない。
だけど、そんな事は知るか。
激痛に耐えながら、次なる拳を。脚を放つ。
それに対抗する様に、キースも攻撃を繰り返した。
その度にきっと骨にヒビが入り、何処かの骨が折れていく。
それでも気力は折れやしない。体が動かなくなるまで聳え立つ。

そして次の瞬間、一つの偶然が発生した。

同時。

互いが攻撃姿勢を取ったのが、全く同じタイミングだった。
そして俺の拳に乗る勢いが今までとはまるで違う。きっと今までの中で、最高のモーションに偶然なっていたのかもしれない。
そしてその事に気付いたのと同時に、一つの異常に気付く。

視界の端に、小さなキューブが飛んでいるのが分かった。

次の瞬間、キースの動きが僅かに加速する。
コイツ……この殴り合いの中で、密かにキューブを放ってやがった！
だけど……大した効果は現れていない。この殴り合いの中で、高度な軌道は描けちゃいない。
それでも効果は現れ、その一撃の重さが増している。
直感的に、次の一撃で決まると思った。
最高のモーションと、術により強化された拳。
先に目標へ届いた方の勝ち。
そしてその勝者がどちらだったかは、結論から言えば分からない。
殴った感触は確かにあって……だけど次の瞬間には俺の体は床に転がっていたからだ。

「……ッ」

顔面を抑えながら、ゆっくりと体を起す。起せた。その程度には、まだ体は動く。
そして目の前で同じ様に倒れているキースは……動かない。

「……勝った、って事で、いいのか？」

自分で思わずそんな事を呟いてしまうが、それは違う。
勝っていない。まだ終っちゃいない。
俺はフラフラな足取りでキースに近づく。するとこの数秒で意識を取りもどしたキースがゆっくりと体を起し始めた。
同時にキースが右手からキューブを射出させる。
そのキューブは拡散する事も無く、俺の垂れ下がった左腕に追い打ちを掛けた。攻撃はそれだけで一時止み、俺はそれでも止まらない。
そしてキースの前に経ち、次弾を撃ち込もうとしたキースの腕を掴んだ。

「いい加減目ぇ覚ませよ、この野郎」

そして俺はキースの右手から指輪を引き抜く。
……これで、俺の勝ちだ。

リメイクします

さて、久々の更新がこのような報告になってしまって大変申し訳ないです。
サブタイトルの方に書きました通り、日本産魔術師と異世界ギルドをリメイクする事にしました。
新しいタイトルは、『一から始める異世界ギルド』です。
もし日本産をまだ読んでくれていた方がいれば、今度こそはちゃんと更新しますので応援よろしくお願いします。

そうなるに至った経緯は活動報告の方で詳しく書く予定ですが、ここでも簡潔に書かせていただきます。

簡単に言えば話を投稿していく上で、その時点で張っておくべき複線を張っていなかったり、描写が足りていなかったり、そして完全に物語を進める上で邪魔になっている設定が存在したりと、話をそのまま展開していくことが困難になる程プロットの詰めが甘かった事です。
最近更新できなかった理由の一つがコレで、リメイクを決意した最大の理由がコレです。
読んでいただいた方ならなんとなく察してくれると思うのですが、特に件の警備システム。話を動かしやすくする為に設置したそのギミックが結果的に続きを書くことを難解にさせたというか、今後の展開をものすごく不自然にしてしまう原因となってしまいました。

……まあそれだけではなく他にも原因があります。流石にそれをここでずらずらと書くのはアレですので、もし知りたい方が居れば活動報告の方にどうぞ。

最後になりますがこのような結果になってしまい、大変申し訳ありませんでした。

リメイク版の方ではまだ残っていた誤字脱字を修正したうえで加筆修正を行っており、序盤こそ些細な変化しかないかもしれませんが、徐々に新しい追加シーンや変更シーンなどを入れていけると思います、というより入れます。その為のリメイクです。

そしてリメイクしてまで続きを書くのだから、読者の皆様が満足していただけるような作品作りを心がけたいと思います。

今後ともよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2135bu/

日本産魔術師と異世界ギルド

2015年10月21日08時20分発行